上竹矢7号墳・東百塚山古墳群・古天神古墳・安部谷古墳群調査報告書

―松江市東部における古墳の調査（３）―

2018. 3

島根県教育委員会

上竹矢7号墳・東百塚山古墳群・古天神古墳・安部谷古墳群調査報告書

－松江市東部における古墳の調査（３）－

2018．３

島根県教育委員会

序

島根県教育委員会では、県内に所在する重要遺跡の保護を図るため、遺跡の範囲及び性格を確認する調査を継続して行っています。

本報告書は国庫補助を得て平成 25 年から 29 年度に実施した、松江市東部に所在する古墳の測量および発掘調査の記録です。これらの古墳は、古代出雲の政治・文化の中心地で貴重な遺跡が集中する八雲立つ風土記の丘地内に所在しています。

このうち上竹矢 7 号墳は出雲地方東部有数の規模を有する前方後円墳として知られていましたが、これまで発掘調査が行われておらず、詳細は不明なままでした。今回の調査でその築造方法に関する情報を得ることができました。

また、東百塚山古墳群、安部谷古墳、古天神古墳は古墳の集中地域である大草丘陵に位置しています。これらの古墳を適切に保護し活用していくためその全容の把握が求められ、今回測量および発掘調査が行われました。調査の結果、当地域の墓制に関わる様々な事実を明らかとすることができました。

本書が、地域の人々や未来を担っていく若者たちの、歴史と文化財への理解と関心を深める一助になれば幸いです。

最後になりましたが、この調査を始めるにあたり、ご指導・ご協力を頂きました関係者・関係各位の方々に深く感謝の意を表します。

平成 30 年 3 月

島根県教育委員会

教育長　鴨　木　　朗

例　言

1．本書は平成 25 年度から 29 年度にかけて実施した上竹矢 7 号墳、東百塚山古墳群、古天神古墳、安部谷古墳群の調査成果をまとめたものである。調査は県内の重要遺跡の保護・活用を図ることを目的とし、文化財保護事業費埋蔵文化財調査費補助金（県内遺跡発掘調査費補助金）を受け実施した。

2．本書で報告する遺跡は下記のとおりである。

上竹矢 7 号墳（松江市竹矢町）

東百塚山古墳群（松江市大草町・八雲町）

古天神古墳（松江市大草町）

安部谷古墳群（松江市大草町）

3．この調査事業は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターと島根県古代文化センターが実施した。調査組織は別記のとおりである。

4．本書に使用した上竹矢 7 号墳の測量図は本庄考古学研究会の実施した成果を用い、東百塚山古墳群の測量図は松江北高等学校考古学研究会の実施した成果を用いており、それぞれ作成者の許可を得ている。古天神古墳の出土品の大半は東京国立博物館所蔵で、東百塚山古墳群の出土遺物のうち一部は島根大学考古学研究室の所蔵であるが、それ以外の図面、写真、出土遺物は埋蔵文化財調査センターで保管している。

5．挿図中の北は平面直角第Ⅲ系の X 軸方向を差し、座標系の XY 座標は世界測地系による。レベル高は海抜を指す。また挿図には国土地理院発行 1/2,5000 地形図を使用した。

6．調査にあたり、土地所有者の皆様をはじめ、松江市教育委員会、大庭公民館、竹矢公民館、竹矢地区ならびに大草地区自治会など地元住民の皆様には物心にわたりご協力をいただいた。また、島根大学大橋泰夫氏、岩本崇氏、松江北高校大谷晃二氏、愛媛大学ミュージアム吉田広氏には、多くのご助言をいただいた。記して感謝の意を表します。

7．本書の編集は埋蔵文化財調査センター神柱靖彦が行った。執筆者は目次に記した。

調査体制

【事務局】

平成 25・26 年度

野口　弘（文化財課長）丹羽野　裕（古代文化センター長）廣江耕史（埋蔵文化財調査センター所長）渡部宏之（同総務課長）

平成 28 年度

丹羽野　裕（文化財課長）廣江耕史（古代文化センター長）萩　雅人（埋蔵文化財調査センター所長）渡部宏之（同総務課長）

平成 29 年度

丹羽野　裕（文化財課長）廣江耕史（古代文化センター長）萩　雅人（埋蔵文化財調査センター所長）石橋　聡（同総務課長）

【調査担当者】

平成 25 年度

（古代文化センター）松尾充晶、仁木　聡

（埋蔵文化財調査センター）池淵俊一（安部谷古墳調査主担当）、原田敏照（古天神古墳調査主担当）、勝部智明

平成 26 年度

（古代文化センター）間野大丞、松尾充晶

（埋蔵文化財調査センター）池淵俊一、岩橋孝典（東百塚山古墳群調査主担当）、神柱靖彦（上矢 7 号墳調査主担当）

平成 28 年度

（古代文化センター）岩橋孝典、東山信治

（埋蔵文化財調査センター）池淵俊一、是田　敦（上竹矢 7 号墳調査主担当）、仁木　聡、神柱靖彦

平成 29 年度

（古代文化センター）原田敏照、岩橋孝典、東山信治、岩本真実、井谷朋子

（埋蔵文化財調査センター）大庭俊次、池淵俊一、是田　敦、仁木　聡、神柱靖彦（報告書作成担当）、吉松優希

【測量・発掘調査参加者】

（埋蔵文化財調査センター）川原和人、人見麻生、糸川沙織、岩本真実、津森玲子

本文目次

第１章　調査の経過 ……（神柱）１
　第１節　調査に至る経緯 ……１
　第２節　調査の経過 ……２
　　１．発掘調査の経過……２
　　２．整理等作業の経過……２
第２章　位置と環境 ……（神柱）３
　第１節　遺跡の位置と環境 ……３
　第２節　歴史的環境 ……３
第３章　上竹矢７号墳の発掘調査 ……（神柱）７
　第１節　調査および研究略史 ……７
　第２節　発掘調査の成果 ……８
　　１．古墳の現況と測量調査結果……８
　　２．第１トレンチ…… 12
　　３．第２トレンチ…… 12
　　４．第３トレンチ…… 15
　　５．第４トレンチ…… 19
　　６．第５トレンチ…… 19
　　７．第６トレンチ…… 19
　　８．第７トレンチ…… 22
　　９．第８トレンチ…… 22
　　10．表採遺物…… 22
第４節　小結 …… 24
　　１．調査知見のまとめ…… 24
　　２．墳丘形態・規模の復元について…… 24
　　３．段築について…… 24
　　４．墳丘の構築方法について…… 24
　　５．上竹矢７号墳の位置付け …… 24
第４章　東百塚山古墳群の発掘調査 ……（岩橋）27
　第１節　調査概要 …… 27
　　１．測量調査の経過と成果…… 27
　　２．小結…… 30
　第２節　発掘調査の成果 …… 31
　　１．発掘調査の経過…… 31
　　２．東百塚山 20 号墳の調査 …… 31
　　３．遺物…… 35
　　４．小結…… 35
　　５．東百塚山 63 号墳～ 65 号墳の調査 …… 35

６．遺物…… 38
７．小結…… 40
８．東百塚山 71 号墳の調査 …… 40
９．盗堀廃土の調査…… 43
10. 遺物 …… 43
11. 小結 …… 44
第３節　まとめ …… 45
１.松江市域における東百塚山 20 号墳の位置づけ …… 45
２．貼石・列石の構造…… 45
３．松江市域の四隅突出型墳丘墓の地域性…… 47
第５章　古天神古墳の発掘調査 ……（原田）49
第１節　調査及び研究略史 …… 49
第２節　発掘調査の成果 …… 55
１．古墳の現況…… 55
２．調査箇所と概要…… 58
３．墳丘西側（全方部－後方部）の断面調査…… 58
４．石室開口部下方の法面調査…… 61
５．前方部西側下方のトレンチ調査…… 61
６．出土遺物…… 62
７．閉塞石…… 62
第３節　小結 …… 63
１．調査知見のまとめ…… 63
２．墳丘の構築及び築造年代について…… 65
第６章　安部谷古墳群の測量調査 ……（池淵）67
第１節　調査の経緯 …… 67
第２節　調査の経過 …… 67
第３節　遺跡の位置と環境 …… 68
第４節　測量調査の結果 …… 69
（１）１号墳 …… 71
（２）２号墳 …… 73
（３）３号墳 …… 74
（４）４号墳 …… 76
（５）５号墳 …… 76
（６）６号墳 …… 76
（７）７号墳 …… 78
（８）８号墳 …… 78
（９）９号墳 …… 79
第５節　まとめ…… 80
第７章　総括……（神柱）82

挿図目次・表目次

第 1 図　調査古墳周辺の遺跡位置図 …… 4
第 2 図　上竹矢 7 号墳周辺の地形測量図 …… 9・10
第 3 図　上竹矢 7 号墳トレンチ配置図 ……11
第 4 図　第 1 トレンチ出土遺物実測図 ……12
第 5 図　第 1 トレンチ実測図 …… 13・14
第 6 図　第 3 トレンチ出土遺物実測図 ……15
第 7 図　第 2 トレンチ実測図 ……16
第 8 図　第 3・第 5 トレンチ実測図 …… 17・18
第 9 図　第 4 トレンチ出土遺物実測図 ……19
第 10 図　第 4 トレンチ実測図……20
第 11 図　第 6・第 7 トレンチ実測図……21
第 12 図　表採遺物実測図……22
第 13 図　第 8 トレンチ実測図……23
第 14 図　上竹矢 7 号墳墳丘復元図……25
第 15 図　東百塚山古墳群の測量図……28
第 16 図　H 26 年度表採遺物実測図 ……29
第 17 図　19 ～ 23・97 号墳地形測量図 ……32
第 18 図　第 1・第 2 トレンチ実測図……33
第 19 図　第 3 トレンチ実測図……34
第 20 図　63 ～ 67・69 ～ 71 号墳地形測量図……36
第 21 図　残丘－ 63 号墳間 T 実測図 ……37
第 22 図　63 － 64 号墳間 T：64 － 65 号墳間 Tr 実測図 38
第 23 図　20 号墳 63・64 号墳出土遺物実測図 ……39
第 24 図　71 号墳 Tr 実測図……41
第 25 図　71 号墳出土遺物実測図 ……42
第 26 図　貼石・配石の類型から見た松江市内の四隅突型
　　墳丘墓の小地域性……46
第 27 図　古天神古墳の位置……49
第 28 図　各報告の古天神古墳の石室（1）……50
第 29 図　各報告の古天神古墳の石室（2）……52
第 30 図　各報告の古天神古墳の墳丘測量図……52
第 31 図　各報告の出土遺物実測図……53
第 32 図　古天神古墳の調査箇所の配置図……56
第 33 図　古天神古墳の内部構造実測図……57
第 34 図　古天神古墳墳丘土層断面図……59
第 35 図　石室開口部付近土層断面図……60
第 36 図　石室開口部下方及びトレンチ土層部……60
第 37 図　古天神古墳　出土遺物実測図……61
第 38 図　古天神古墳　石材（閉塞石）略測図……62
第 39 図　調査後墳丘測量図及び土層断面見通し図 ……64
第 40 図　古天神古墳　出土須恵器実測図……65
第 41 図　安部谷古墳群測量調査伐採風景……67
第 42 図　安部谷 9 号墳より茶臼山を望む……67
第 43 図　大草丘陵古墳群（東半部）……68
第 44 図　安部谷古墳測量図……69
第 45 図　安部谷 1・2 号墳測量図 ……70
第 46 図　安部谷 1 号墳（南西から）……71
第 47 図　安部谷古墳群 1・2 号墳表面採集遺物 ……72
第 48 図　安部谷 1 号墳（北西から）……73
第 49 図　安部谷 3・4・5・6 号墳測量図 ……75
第 50 図　安部谷 4 号墳（北から）……76
第 51 図　安部谷 7・8・9 号墳測量図 ……77
第 52 図　7 号墳（北から）……78
第 53 図　9 号墳（北から）……79

第 1 表　平成 26 年度　東百塚山古墳群測量古墳一覧 ‥27
第 2 表　東百塚古墳群遺物観察表 ……83

図版目次 1

図版 1．1． 上竹矢 7 号墳　遠景（南から）
2． 第 1 トレンチ　掘削状況
図版 2．1． 第 2 トレンチ墳丘検出状況
2． 第 2 トレンチ　墳端部土層堆積状況
図版 3．1． 第 3 トレンチ墳丘検出状況（西から）
2． 第 3 トレンチ東端部　盛土堆積状況
図版 4．1． 第 4 トレンチ　調査終了状況（北から）
2． 第 5 トレンチ墳丘検出時状況
図版 5．1． 第 5 トレンチ墳端付近土層堆積状況
2． 第 6 トレンチ地山検出状況
図版 6．1． 第 7 トレンチ掘削状況（北から）
2． 第 7 トレンチ掘削状況（南から）
図版 7．1． 第 8 トレンチ掘削状況（1）
2． 第 8 トレンチ掘削状況（2）
図版 8．1． 上竹矢 7 号墳出土遺物（1）
2． 上竹矢 7 号墳出土遺物（2）
図版 9．1． 東百塚山 20 号墓 1 トレンチ　墳丘東側の列石
2． 64 号墳　墳丘東裾の土器群出土状況
図版 10. 1． 20 号墓 1 トレンチ　東裾列石の状況
2． 20 号墓第 1 トレンチ　東裾列石拡大
3． 20 号墓 2 トレンチ　東裾列石の状況
図版 11. 1． 20 号墓 3 トレンチ　北側墳裾列石の状況
2． 20 号墓 3 トレンチ　北側墳裾列石拡大
3． 20 号墓 1 － 3 トレンチ　墳丘東側の列石
図版 12. 1． 71 号墳墳丘断ち割り土層
2． 71 号墳周溝堀り上げ状況
3． 71 号墳周溝内埴輪出土状況
4． 71 号墳周溝内埴輪出土状況 2
図版 13. 1． 20・63 号墓出土遺物
2． 71 号墳出土遺物
図版 14. 1． 71 号墳出土遺物 1
2． 71 号墳出土遺物 2
図版 15.1~5. 64 号墳出土遺物
6． 64 号墳出土遺物集合
図版 16. 1． 古天神古墳調査前全景（南から）
2． 調査前全景（南から）
図版 17. 1． 調査前全景（北から）
2． 調査後全景（南から）
図版 18. 1． 土層断面（前方部先端付近）
2． 土層断面（前方部）
図版 19. 1． 土層断面（前方部 ~ くびれ部）
2． 土層断面（くびれ部付近）
図版 20. 1． 土層断面（前方部 ~ くびれ部）
2． 土層断面（後方部石室開口部付近）
図版 21. 1． トレンチ調査状況
2． トレンチ土層断面
3． トレンチ遺物出土状況
4． 石室開口部下方土層断面
5． 石室開口部周辺礫群
6． 閉塞石
7． 閉塞石
図版 22. 1． 閉塞石
2． 調査完了状況
3． 法面保護工事（北から）
4． 法面保護工事（南から）
5． 法面保護工事（北から）
6． 作業風景（閉塞石移動）
7． 作業風景（土層精査）
図版 23. 1． 調査指導風景
2． 調査指導風景
3． 現地説明会風景
4 . 現地説明会風景
5 . 横穴式石室（前庭部から）
6 . 横穴式石室（羨門）
7 . 横穴式石室（玄室前壁左コーナー）
8 . 横穴式石室（玄室前壁）
図版 24. 1． 横穴式石室（玄室内屍床仕切石）
2． 横穴式石室（玄室内前壁左コーナー付近）

図版目次２

図版 25. 1．出土須恵器・埴輪・弥生土器・土師器

2．出土須恵器・埴輪・弥生土器・土師器

図版 26. 1．出土石鏃

2．出土須恵器・埴輪・弥生土器

図版 27. 1．安部谷古墳群　表面採集須恵器

2．表面採集埴輪

第 1 章　調査の経過

第 1 節　調査に至る経緯

八雲立つ風土記の丘は松江市南部に広がる意宇平野一帯をエリアとし、ここには古代出雲の政治文化の中心であったことを如実に示す貴重な遺跡が数多く残されている。昭和 47 年に開所した時点においては、出雲国府跡や出雲国分寺、岡田山古墳などの史跡が整備・公開されたが、未指定・未整備の重要遺跡も少なくなかった。

このことから島根県教育委員会では、同地内の重要遺跡の保護を目的として継続的な調査を実施しており、そのなかで史跡山代正倉跡、史跡山代二子塚古墳、史跡山代郷北新造院（来美廃寺）などの重要遺跡の調査・整備を進めてきた。特に平成 11 年度からは史跡出雲国府跡の調査に着手し、平成 25 年度にはその成果を総括報告書として刊行し、現在に至っている。

一方、古代文化センターでは、「考古資料から見た地域間交渉調査事業」（その後「考古基礎資料調査研究事業」と改称）の一環として、県内の重要遺跡についての測量・発掘調査を継続的に進めてきた。当事業では、主としてそれまで重要古墳でありながら詳細が不明であった松江市大橋川沿岸の大型古墳を対象として行い、その成果は平成 26 年度に島根県古代歴史博物館で開催された企画展「倭の五王と出雲の豪族」及びテーマ研究の報告書「前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究」の刊行に結実している。

古代文化センターによる上記の大橋川流域の大型古墳の基礎調査が一段落した際に、新たな研究テーマとして俎上にあがったのは意宇平野周辺に所在する古墳であった。その中でも実態が不明のままであった 2 基の大型後期古墳、魚見塚古墳と東淵寺古墳についての調査は平成 23 年から着手され、平成２７年度にはその調査成果が発掘調査報告書としてまとめられ刊行された。

魚見塚古墳、東淵寺古墳の調査が進むなか、次なる調査対象古墳について議論がなされ、上竹矢 7 号墳、安部谷古墳、古天神古墳、東百塚山古墳群の調査を行うこととなった。このうち上竹矢 7 号墳については意宇平野周辺の大型古墳のうち未発掘古墳の内の 1 つであり、その実態の把握が望まれていたためトレンチによる発掘調査を実施する方針が定められた。安部谷古墳については、墳丘測量調査が未実施であったため調査を行うこととした。古天神古墳は地滑りにより墳丘が崩落しており、地滑り対策工事が行われることとなっていた。これに併せ墳丘の構築方法などを明らかにするため、墳丘崩落面の土層断面調査を実施することとなった。東百塚山古墳群については、その築造開始時期や全貌の把握が問題となっており、調査が行われることとなった。

第 2 節　調査の経過

1. 発掘調査の経過

平成 25 年度には大草丘陵周辺に所在する古墳に関する調査を 2 班体制で実施した。1 班は古天神古墳で地滑り対策工事に先立ち、墳丘崩落面の土層断面の記録作成のため調査を実施した。調査は 6 月 6 日に着手し、7 月 19 日に終了した。墳丘断面の調査によって、墳丘の前方部及び後方部の構築状況の概略を把握することが出来た。また 7 月 16 日には現地説明会を実施し、約 40 名の参加を得た。

もう 1 班は併せて墳丘測量図が未作成であった安部谷古墳の墳丘測量調査を行った。5 月 23 日に着手し、7 月 19 日に終了した。

平成 26 年度はこれまで発掘調査歴がなく詳細が不明であった上竹矢 7 号墳の発掘調査を行った。また東百塚山古墳群において補足測量調査と一部古墳の発掘調査を実施した。（平成 29 年度にも補足測量調査を行った）

東百塚山古墳群では 4 月 30 日から 6 月 6 日にかけて、古墳群の全体像を把握するための補足測量調査を行った。その後 9 月 1 日から上竹矢 7 号墳の発掘調査を実施した。墳丘各所に合計 7 本のトレンチを掘削した結果、古墳の規模や築造方法などを確認することが出来た。12 月に入ると調査と併行し埋め戻し作業を行い、12 月 25 日には全ての調査を終了した。一方、東百塚山古墳群では 11 月 18 日から調査を開始し、丘陵上の墳墓のうち、71 号墳 63~65 号墳および 20 号墓の調査を実施した。調査の結果 20 号墓が四隅突出型墳丘墓であることを明らかにし、出土遺物から 64 号墓と 65 号墓が古墳時代後期に築造されたことを確認した。1 月 24 日には現地説明会を開催し、約 90 名の参加を得て 2 月 13 日には全ての調査を終えた。

2. 整理作業等の経過

整理作業については、現地調査の着手と併行して進め、各年度ごとに遺物の注記・接合及び遺構図面の整理作業を順次進めていき、平成 29 年度後半に報告書作成作業を行った

第２章　位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

上竹矢７号墳は松江市竹矢町、安部谷古墳と古天神古墳は松江市大草町に所在し、東百塚山古墳群は松江市大草町と八雲町に所在する。これらの古墳、古墳群が所在する松江市東部の意宇平野周辺一帯は、奈良時代には出雲国府や出雲国分寺が置かれた古代出雲の中枢付近に位置していると言える。ここでは掲載古墳・古墳群を包括する意宇平野周辺の地理的・歴史的環境について概略を述べてみたい。

松江市南郊に屹立し『出雲国風土記』に「神名樋野」と呼ばれた標高 172 mの茶臼山を中心とする当地域は、地理的には茶臼山の南に流れる意宇川によって形成された意宇平野と呼ばれる沖積地帯、茶臼山の西に広がる山陰では珍しい乃木段丘（島根県 1974）と呼ばれる標高 20 ～ 25 m の河成段丘地帯、及び茶臼山北の中海と宍道湖を結ぶ大橋川沿いの狭隘な谷地帯に大別される。

上竹矢７号墳は茶臼山の北東に広がる低丘陵地帯の南端に位置し、南には意宇平野が広がっている。当古墳が位置する丘陵の西側の谷には古墳時代の幹線道路であった「プレ枉北道」が南北に走っていたと推定されており、後述するように当古墳の性格を陸路交通の要衝に位置している視点から把握する視座も重要といえる。

一方、安部谷古墳、東百塚山古墳群、古天神古墳が位置する大草丘陵（標高 30 ～ 90 m）は、意宇平野の南に接している。これらの古墳および古墳群は大草丘陵の東側に位置しており、丘陵の西側には西百塚山古墳群が所在する。丘陵の東側は谷を挟んで、春日丘陵が広がっている。丘陵の北及び西側は意宇川が蛇行しつつめぐっているが、江戸時代に行われた付け替え前は南側も丘陵に沿って意宇川が流れていたとされている。

第２節　歴史的環境

当地域周辺の歴史は旧石器時代まで遡る。茶臼山西麓に広がる乃木段丘地帯は火山灰層が良好な状態で残存しており、県内でも旧石器時代研究のフィールドとなる可能性を秘めた地域である。現在までのところ調査例は少ないが、下黒田遺跡では後期旧石器時代の玉髄・瑪瑙製の剥片・石核がまとまって出土しているほか（丹羽野 1994）、市場遺跡では黒曜石製の細石核が出土している。また、発掘資料ではないが、大草町の上立遺跡では、東北地方から搬入された可能性の高い頁岩製掻器が採集されており、当該期における当地と東北地方との交流を物語っている（丹羽野 2001）。

縄文時代の遺跡は主に意宇平野の縁辺部で発見されている。主な遺跡としては、上小紋遺跡、鵜貫遺跡、布田遺跡、石台遺跡などがあげられる。これらの遺跡は縄文時代後～晩期に属する例が大半であり、いずれも丘陵にほど近い平野縁辺部に立地する。布田遺跡の砂礫層から出土した木片の C14 年代から、約 3,000 年前には意宇平野のかなりの部分は陸地化していたことが知られている（林 1991）。これらの遺跡では打製石斧等も出土していることから、おそらく縄文海進が終了し、意宇平野が陸地化したこの時期に縄文人が植物採集や穀物栽培のため平野部に進出していった状況を物語るものであろう（島根県立八雲立つ風土記の丘 2015）。一方大橋川の谷でも、米坂遺跡や米坂

第１図　調査古墳周辺の遺跡位置図

古墳群で黒曜石・安山岩製の石鏃や打製石斧が出土しており、当該期の遺跡の存在が知られる。

弥生時代の遺跡としては、意宇平野では布田遺跡、上小紋遺跡、馬橋川流域では石台遺跡や勝負遺跡が存在する。このうち布田遺跡は意宇川旧河道河口部付近に展開した出雲を代表する弥生時代前半期集落の一つであるが、意宇平野における遺構・遺物の分布を見る限り、弥生時代における意宇平野の開発は未だ十分なものではなく、おそらく布田遺跡の位置する意宇川旧河道河口付近と茶臼山山麓の扇状地周辺に限定されていた可能性が高い。後者で発見された上小紋遺跡や向小紋遺跡の水田跡は布田遺跡を母村とする集団が進出した子村集団による開発地であったのであろう。

このように、当該期までの当地の歴史的環境は出雲のその他の地域と大きな違いは認められないが、こうした様相が大きく変化するのは、古墳時代前期後葉以降のことである。その嚆矢として茶臼山東麓に築かれた廻田 1 号墳の存在があげられる。当古墳は大和北部型と呼ばれる埴輪を備える現在のところ出雲最古の前方後円墳であり（島根県古代文化センター 2004）、その墳丘規模はその後の出雲の首長墓の規範となった可能性がある。5 世紀に入ると大橋川の谷の南北両岸において、廟所古墳（82 m）や石屋古墳（42 m）といった大形方墳が累代的に築造される。特に廟所古墳の築造は出雲地域において大きなインパクトであり、大型方墳という墳形や王陵系埴輪の存在から、倭王権の直参的首長という性格が想定されている（仁木 2015）。ほぼ同時期には意宇平野中心部に立地する出雲国府下層で首長居館状の方形区画遺構が確認されており、これを水利開発拠点として、当該期には意宇平野の大規模な開発が進められていた可能性が高い（池淵 2015）。先の大橋川の谷の大型古墳群出現の背景の一つとして、当該期における意宇平野の開発の進展といった事象を指摘することができよう。

このような大橋川沿岸の大形方墳は古墳時代中期末には井の奥 4 号墳（全長 57 m）のような前方後円墳や竹矢岩舟古墳（全長 50 m）のような前方後方墳へと墳形を変化させつつ、6 世紀に入ると墓域を大橋川沿岸から内陸部の茶臼山西麓の乃木段丘地帯へと移動する。その背景については不明と言わざるを得ないが、一つの要因としては、柳堀遺跡など当該地区における近年の調査事例などを勘案すれば、当地域の開発を企図した墓域移動であった可能性も想定されるかもしれない（松江市教育委員会ほか）。6 世紀後半に築かれた山代二子塚古墳はそれまでの出雲の在地首長墓の規格であった全長 60 mを遥かに上回る全長 94 mの規模を誇り、既存の在地首長の支配領域を複数包括する、より広域的首長の墓であり、当古墳の築造が出雲の古墳時代政治史において極めて大きな画期であったことは多くの先学の指摘するとおりである。その他、当該期の古墳としては既存の在地首長墓クラス（50 ～ 60 m級）として東淵寺古墳、手間古墳が、中小首長墓として、岡田山 1 号墳、御崎山古墳、団原古墳、岩屋後古墳、岩屋後古墳、古天神古墳が築かれ、短期のうちに極めて多数の首長墓が集中的に築造されている状況を看取することができる。こうした当該期の特異な古墳の築造状況の背景をいかに読み取っていくかが今後の大きな課題の一つであると言える。

一方の大橋川北岸では、6 世紀代に入ると首長墓は、朝酌岩屋古墳や朝酌小学校校庭古墳、廻原 1 号墳など朝酌平野周辺に継続的に築かれ、それまでの西尾町周辺に築かれていた首長墓系列とは明らかに断絶する。そして魚見塚古墳はこれらの首長墓群からさらに離れた朝酌矢田地区に単独墳として孤立的に築かれているのである。このように、大橋川北岸地域における首長墓の築造状況から見た場合、魚見塚古墳の立地は特異であると言え、この場所に墓域を選定するに至った何らか特別な事情を考慮すべきであろう。

奈良時代に入ると、意宇平野南部には出雲国府がおかれ、当地域は名実ともに古代出雲の中心地となる。この時期の遺跡としては、官衙関係として出雲国府跡のほか、大型倉庫群が検出された山代郷正倉跡、「云石（飯石）」の墨書土器が出土し、首長居館の一角である可能性が指摘されている黒田畦遺跡などがあり、寺院関係としては出雲国分寺、国分尼寺をはじめ、『出雲国風土記』に記載されている山代郷北新造院跡（来美廃寺）、山代郷南新造院跡（四王寺跡）が実際に発掘調査で確認されており、これらに瓦を供給した出雲国分寺瓦窯跡や小無田Ⅱ遺跡なども明らかになっている。

一方、大橋川北岸の大井町周辺では、古墳時代後期から奈良時代にかけて出雲最大の須恵器窯跡群である大井窯跡群が所在する。近年の発掘調査でその一端が明らかにされつつあり、付近ではイガラビ遺跡など須恵器工人の居住域または工房と推定される遺跡も確認されている。なお、この時期における意宇平野一帯の様相については、これまでの発掘調査成果や『出雲国風土記』の研究に基づきその歴史的景観の復元的研究が行われているので（島根県古代文化センター 2009）、詳しくはそちらを参照されたい。

中世に入っても、当地一帯は中世出雲府中として出雲の政治的中枢としての地位を維持し、 実際に天満谷遺跡など当該期の遺跡もかなりの数が確認されているが（西尾・広江 2015）、詳細については不明な点が多い。戦国期に入り守護であった京極氏が没落し尼子氏が勃興するに至って、当地は出雲の政治的中心地の座を明け渡したものと考えられる。

〈参考文献〉

池淵俊一 2015「意宇平野の開発史」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター
勝部　昭 1993「正西道の検討」『出雲古代史研究』３出雲古代史研究会
島根県 1974『土地分類基本調査松江』
島根県古代文化センター 2004『松江市東部における古墳の調査 廟所古墳・観音山古墳群・廻田古墳群』
島根県古代文化センター 2009『出雲国府周辺の復元研究』
島根県立八雲立つ風土記の丘 2015『古代文化の発祥の地 意宇の開発史』
仁木　聡 2015「巨大方墳の被葬者像」『前方後方墳と東西出雲成立に関する研究』島根県古代文化センター
丹羽野裕 1994「松江市下黒田遺跡出土の石器群」『古代文化研究』２島根県古代文化センター
丹羽野裕 2001「松江市出土の石器３点」『松江考古』９松江考古談話会
林　正久 1991「意宇平野の微地形とその形成過程」『一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ（布田遺跡）』島根県教育委員会
西尾克己・広江耕史 2015「遺跡から見た出雲府中」『松江市史研究』６松江市教育委員会
松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ振興財団 2014『柳堀遺跡・大庭原ノ前遺跡』

第 3 章　上竹矢 7 号墳の発掘調査

第 1 節　調査及び研究略史

上竹矢 7 号墳は 8 基の方墳、1 基の竪穴式石室とともに上竹矢古墳群を構成する前方後円墳である。1961 年に果樹園造成の作業中に石棺の蓋石が発見されたことにより竪穴式石室が調査され「上竹矢古墳」として報告された（池田・東森 1972）。その後（1977 年 3 月および 4 月）内田律雄および松本岩雄により周辺の分布調査が行われ、方墳 7 基、前方後方墳もしくは前方後円墳とみられるマウンド 2 基、方墳 7 基を確認した。

この中で 7 号墳とされた最も規模の大きいマウンドは前方後円墳であれば重要な古墳であると考えられ 1983 年には内田律雄などにより測量調査が実施されている。

1990 年には松本岩雄により島根・鳥取両県の古墳について報告がなされた（松本 1990）。この中で上竹矢 7 号墳は「出雲の大型古墳」の表に規模 64m の前方後方墳として掲載され、「外部施設等」の覧には「葺石」が標記されている。同じく掲載された「出雲・石見・隠岐の主要古墳編年」表では「墳形・立地から推定」され中期末から後期初頭に位置づけられている。一方翌年に刊行された「前方後円墳集成　中国・四国編」（近藤編 1991）には内田らの測量成果のデータが記載されており、測量図から復元された墳丘規模のデータとともに、「外表施設」の覧には「埴輪未確認・葺石あり？・外表遺物 : 須恵器片」と記載され、大型古墳一覧表には掲載されているが、古墳編年表や解説では取り上げられてはいない。

2004 年には 1983 年の測量成果の詳細が報告された（島根県古代文化センターほか 2004）。報告では全長 63.9m の後円部が 2 段築成で、全体的に長細い前方部をもつ前方後円墳とする墳丘復元案が示されている。復元案の墳形から前期古墳である可能性とともに、「出雲地方東部で最も古い前方後円墳と考えられている廻田 1 号墳に先行して築造された可能性」も指摘していて注目される。

このように、当古墳の位置づけは発掘調査が未実施であったため必ずしも明確になされてこなかった現状がある。出雲東部有数の大型の前方後円墳である当古墳の基礎的な調査研究が地域史の解明のために求められていたといえよう。

〈引用文献〉

池田満雄・東森市良 1972「松江・上竹矢古墳」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅳ集　島根県教育委員会
松本岩雄 1990「3 山陰」『古墳時代の研究』10 雄山閣
内田律雄・曳野律夫・松本岩雄・渡辺貞幸 1991「島根県」『前方後円墳集成』中国四国編　山川出版社
島根県古代文化センターほか 2004『松江市東部における古墳の調査 廟所古墳・観音山古墳群・廻田古墳群』

第 2 節　発掘調査の成果

1. 古墳の現状と発掘調査成果

古墳の現状　上竹矢 7 号墳は松江市竹矢町上竹矢に所在する。後円部頂の平坦面には基壇状に加工され「荒神さん」が祀られている。後円部南側は雑木林状を呈しているが、後円部北側および前方部周辺は植林がなされていた。このため、古墳の北側は植林のために地形が大規模に改変されていた。前方部周辺に関しては発掘調査着手までに土地所有者により伐採が行われ、その状況が明確になっている。前方部の中央付近は南北に走る山道により切断されている。

古墳の所在する丘陵尾根上には上竹矢古墳群を形成する小規模な方墳が点在している。丘陵南側裾には民家が建ち並び、古墳の北側には谷を利用して溜池が築かれている。丘陵の東側には出雲国分寺跡が所在する。

調査研究略史で述べたように、当古墳は内田律雄ら（本庄考古学研究会）により測量されているが、国土座標に基づく測量ではないため、正確な測量図の作成が求められていた。このため発掘調査に先立ち古墳の地形測量を測量会社に委託し実施した。

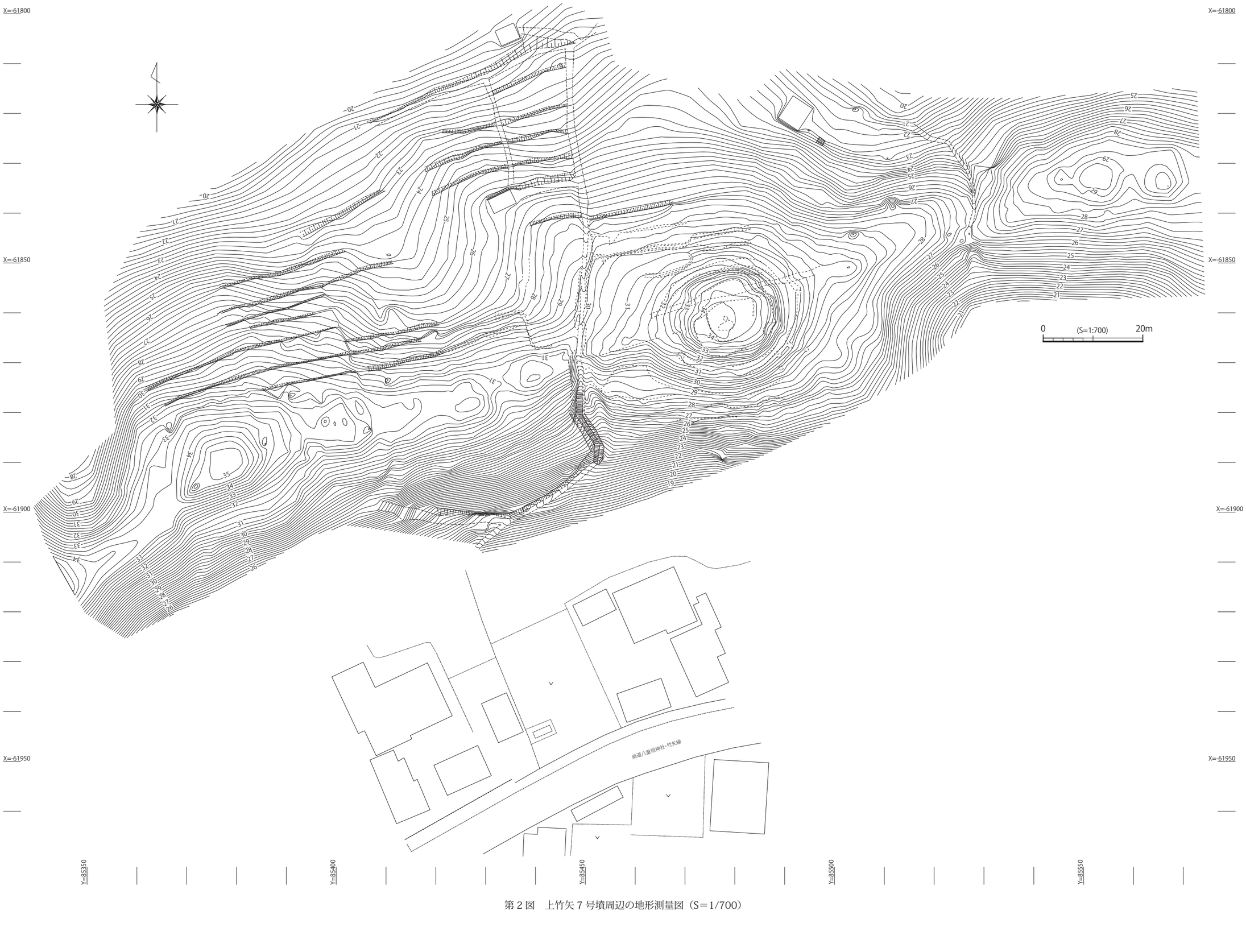
墳丘の形状（第 2 図）　古墳は、東西（厳密には西南西から東北東）に延びる約 500m の丘陵のほぼ中央付近に築造された前方後円墳で、古墳は尾根筋方向に沿って築造されており、見かけ上の主軸は尾根方向とほぼ一致している。

後円部の墳丘は、後円部東側から南側にかけてよく遺存している。墳丘斜面の傾斜は比較的急であるが、後円部東側斜面の傾斜は緩やかである。墳裾は後円部の東側と南東側、後円部南西から南側くびれ部にかけては比較的容易に観察できる。後円部はほぼ正円をなし、前方部はくびれ部から前方部中央付近まではあまり開かないが、中央付近から先端にかけて直線的に広がっていく。見かけ上の墳裾の標高は、後円部東側の主軸付近で 30.3m、後円部南東側で 28.5m、後円部南西側で 29.1m、南側くびれ部で 29.9m、前方部南側偶角付近で 29.5m、前方部前面の主軸付近で 30.8m を測る。このことから、見かけ上の墳裾の標高が前方部側がわずかに高いものの、ほぼ水平に築造されていることが分かる。前方部前面は、上端幅 6.1m、下端幅 6.1m、深さ 0.5m の切刻溝によって墳丘から切り離されている。

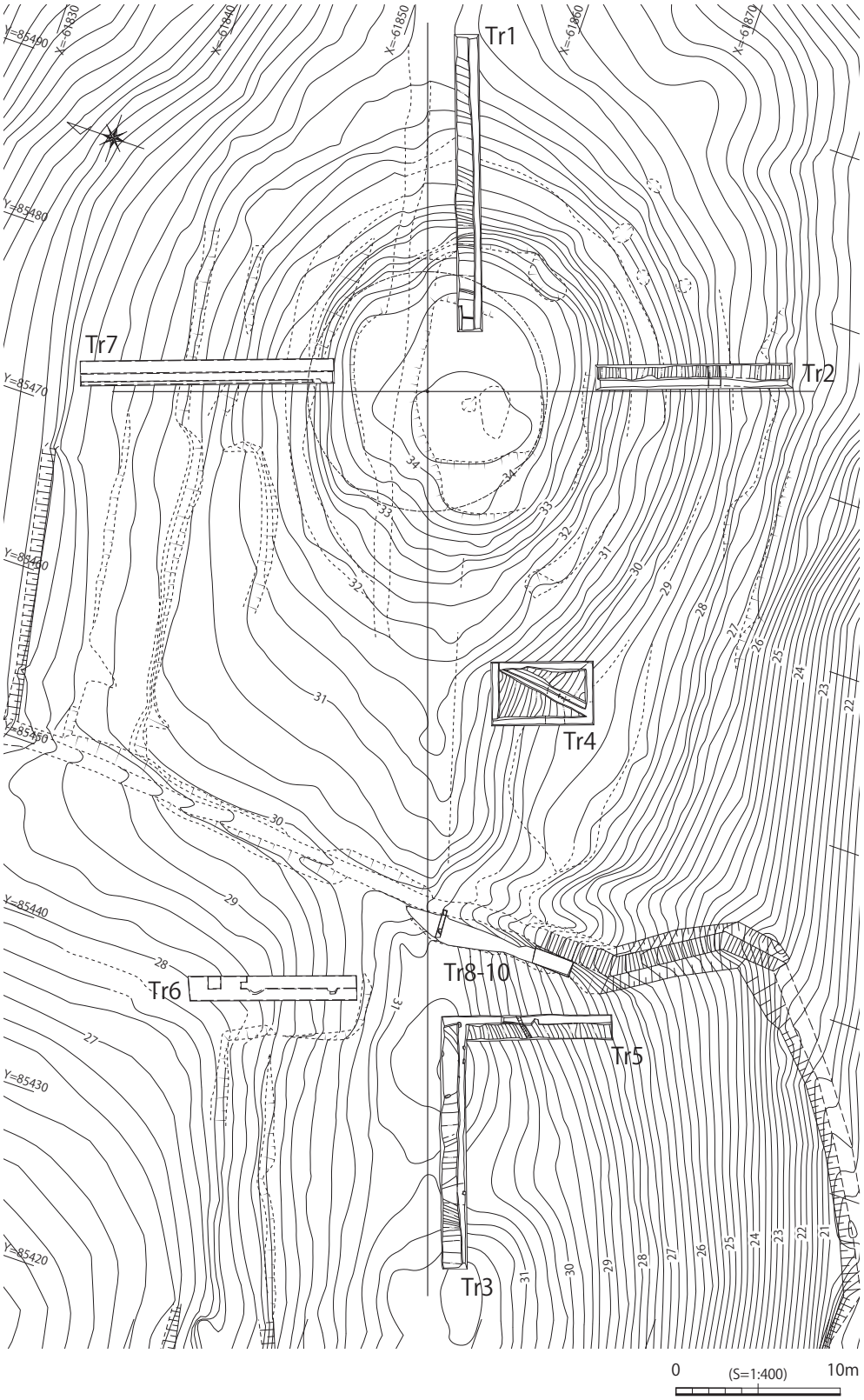
後円部の東側の主軸付近と南東から南西にかけてテラス状の平坦部がめぐる。後円部東側のテラスは主軸付近の標高 31.1m に認められ、後円部南東では標高 30.8m から標高 31.3m にかけて幅 1.6m のテラスが認められる。また、後円部南西の標高 31.1m 付近にもテラス状の平端面が認められる。このテラスは、くびれ部頂付近では不明瞭となりそこには標高 31.m から 32.0m にかえて等高線が舌状となるスロープ状のなだらかな斜面が観察される。このスロープ状のものについては、後円部頂にある「荒神さん」に行くための後世のものである可能性が高く、周辺の地形は、築造当時の状況を反映していないものと考られる。

後円部は見かけ状 2 段築成状を呈しており、後円部南東の標高 31.3m に見かけ状の 2 段目下端が観察できる。墳丘斜面は、後世の改変を受けているところが多いが、本来の高さは現状とほぼ同じであったと推測される。

後円部頂の平坦面の大きさについては明瞭ではなく、後円部頂、くびれ部頂及び全方部頂の標高



第２図　上竹矢７号墳周辺の地形測量図（S＝1/700）



第３図　上竹矢７号墳トレンチ配置図（S ＝ 1/400）

はそれぞれ、34.43m、31.30m、31.57m である。

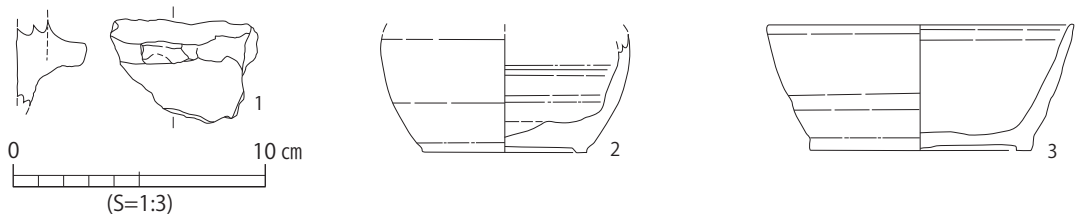
2. 第 1 トレンチ（第 5 図）

トレンチの概要　後円部東側に墳丘主軸ラインに並行して設定した、長さ 18 m、幅 1.5m のトレンチである。トレンチの南壁沿いにはサブトレンチを掘削し土層断面状況の確認を行った。主軸ライン付近は里道などにより地形がかなり改変を受けていることが考えられるため、比較的墳丘本来の地形を残していると考えられた位置（約 2m 程南）に設定した。トレンチの東端から 1.7m 付近までは本来の墳丘の状況が保たれているものと考えられる。墳丘の盛土を切る格好で段を有する深さ約 70cm（段までの深さ約 40cm）の掘形部が確認されており、これは墓壙の端部の可能性があると考えられる。掘形の上面は厚さ約 15cm の粘質土で覆われており、これは掘形が墓壙であった場合その被覆土の可能性も想定される。掘形から西へ 5m 付近までは盛土を検出した。盛土は最大 30cm 程度の単位で互層状に構築されており、最も厚い部分で約 90cm を測る。盛土はその堆積状況から、第 1 トレンチ周辺では丘陵頂部平坦面の際に堤状に盛土を施した後、後円部中央付近に盛土を施したものと想定される。

トレンチ中央部付近は地山が掘削されており、トレンチ東端から 6m 付近で地山が幅約 2m にわたって L 字状にカットされている。また、トレンチ東端部から 10m 付近では幅約 3.5m にわたって地山が削り出されており、埋土からは古代の土器片が出土している。トレンチ西端部から 4.2m 付近では、地山の傾斜が若干ゆるやかに変化している。このため、この付近まで後円部の墳裾が及んでいた可能性が考えられ、現在の残存する墳丘傾斜から復元される墳裾想定位置ともおおむね一致している。なお、葺石に相当する川原石などの転石はトレンチ内では確認されていない。

出土遺物（第 4 図）　第 4 図 1 は円筒埴輪である。表面の摩滅が激しい小片であるため調整などの詳細は不詳だが、突帯の形態から古墳時代前期末から中期初頭の時期に属すると考えられる。なお、今回の調査で確認された埴輪片はこの 1 点のみであった。

2、3 は古代の須恵器で 2 は高台付の壺、3 は高台付の坏である。当トレンチからはこの他にも古代の須恵器片が若干出土している。

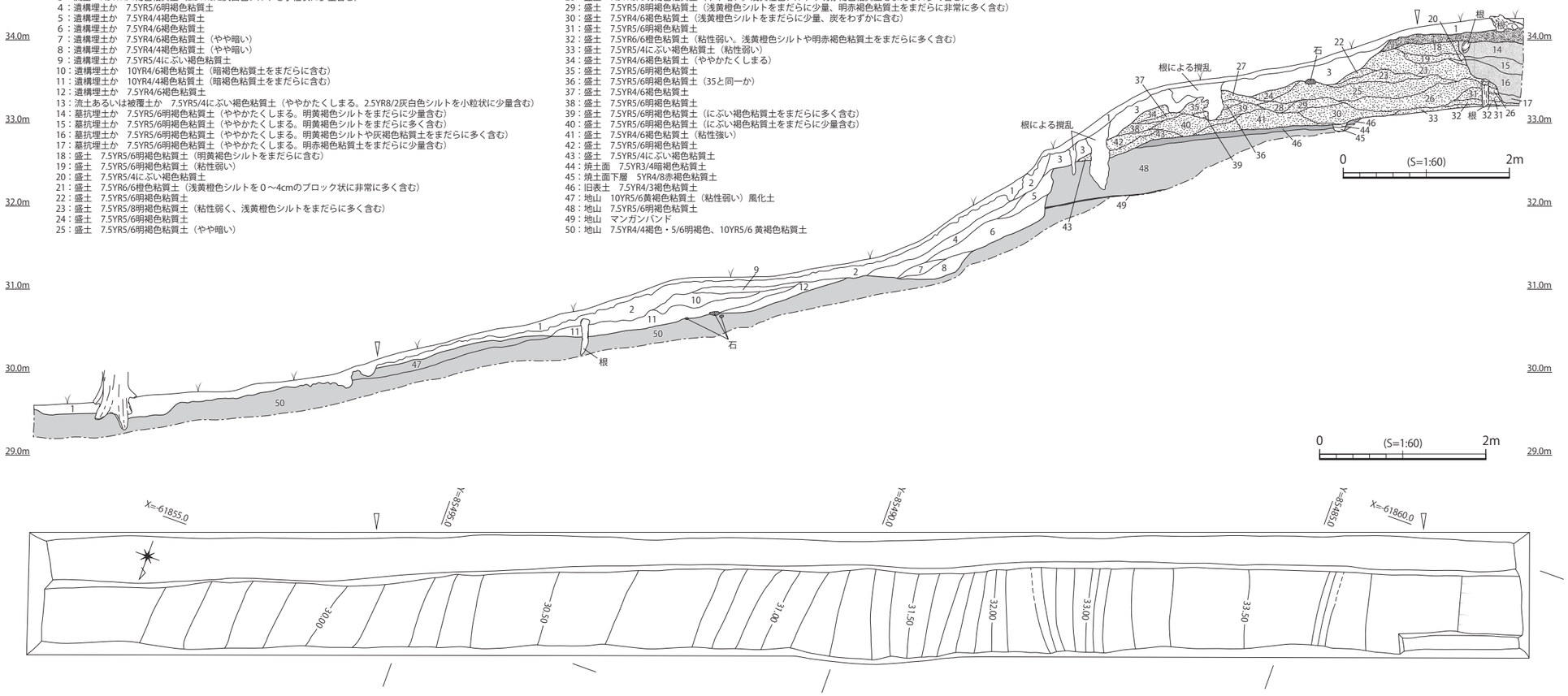


第 4 図　上竹矢 7 号墳第 1 トレンチ出土遺物実測図（S ＝ 1/3）

3. 第 2 トレンチ（第 7 図）

後円部南側に墳丘主軸ラインに直行して設定した、長さ 12m、幅 1.5m のトレンチである。トレンチ西壁沿いに幅 50cm のサブトレンチを掘削し、地山の断ち割りを行っている。基本層序としては表土下に最大 40cm 程度の厚みで流土が堆積しており、地山を覆っている。盛土についてはこのトレンチでは確認していない。トレンチ南端から 4.5 ～ 5.0m 付近に幅約 80cm、深さ約 20cm の溝が確認された。この溝は、見かけ上の墳裾とほぼ一致した位置で確認されたことから墳丘の裾をめぐる周溝の可能性も考えられる。トレンチ北端部付近では地山が L 字状に幅約 1.5m にわたり

1：表土
2：流土　7.5YR5/6明褐色粘質土（粘性弱い）
3：流土　7.5YR4/4褐色粘質土（2.5YR8/2灰白色シルトを小粒状に少量含む）
4：遺構埋土か　7.5YR5/6明褐色粘質土
5：遺構埋土か　7.5YR4/4褐色粘質土
6：遺構埋土か　7.5YR4/6褐色粘質土
7：遺構埋土か　7.5YR4/6褐色粘質土（やや暗い）
8：遺構埋土か　7.5YR4/4褐色粘質土（やや暗い）
9：遺構埋土か　7.5YR5/4にぶい褐色粘質土
10：遺構埋土か　10YR4/6褐色粘質土（暗褐色粘質土をまだらに含む）
11：遺構埋土か　10YR4/4褐色粘質土（暗褐色粘質土をまだらに含む）
12：遺構埋土か　7.5YR4/6褐色粘質土
13：流土あるいは被覆土か　7.5YR5/4にぶい褐色粘質土（ややかたくしまる。2.5YR8/2灰白色シルトを小粒状に少量含む）
14：墓抗埋土か　7.5YR5/6明褐色粘質土（ややかたくしまる。明黄褐色シルトをまだらに少量含む）
15：墓抗埋土か　7.5YR5/6明褐色粘質土（ややかたくしまる。明黄褐色シルトをまだらに多く含む）
16：墓抗埋土か　7.5YR5/6明褐色粘質土（ややかたくしまる。明黄褐色シルトや灰褐色粘質土をまだらに多く含む）
17：墓抗埋土か　7.5YR5/6明褐色粘質土（ややかたくしまる。明赤褐色粘質土をまだらに少量含む）
18：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土（明黄褐色シルトをまだらに含む）
19：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土（粘性弱い）
20：盛土　7.5YR5/4にぶい褐色粘質土
21：盛土　7.5YR6/6橙色粘質土（浅黄橙色シルトを0～4cmのブロック状に非常に多く含む）
22：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土
23：盛土　7.5YR5/8明褐色粘質土（粘性弱く、浅黄橙色シルトをまだらに多く含む）
24：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土
25：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土（やや暗い）
26：盛土　7.5YR5/8にぶい褐色粘質土（粘性弱い。浅黄橙色シルトや明赤褐色粘質土をまだらに多く含む）
27：盛土　7.5YR5/6橙色粘質土（ややかたくしまる。浅黄橙色シルトや明赤褐色粘質土をまだらに多く含む）
28：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土（やや暗い。浅黄橙色シルトや明赤褐色粘質土をまだらに多く含む）
29：盛土　7.5YR5/8明褐色粘質土（浅黄橙色シルトをまだらに少量、明赤褐色粘質土をまだらに非常に多く含む）
30：盛土　7.5YR4/6褐色粘質土（浅黄橙色シルトをまだらに少量、炭をわずかに含む）
31：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土
32：盛土　7.5YR6/6橙色粘質土（粘性弱い。浅黄橙色シルトや明赤褐色粘質土をまだらに多く含む）
33：盛土　7.5YR5/4にぶい褐色粘質土（粘性弱い）
34：盛土　7.5YR4/6褐色粘質土（ややかたくしまる）
35：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土
36：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土（35と同一か）
37：盛土　7.5YR4/6褐色粘質土
38：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土
39：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土（にぶい褐色粘質土をまだらに多く含む）
40：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土（にぶい褐色粘質土をまだらに少量含む）
41：盛土　7.5YR4/6褐色粘質土（粘性強い）
42：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土
43：盛土　7.5YR5/4にぶい褐色粘質土
44：焼土面　7.5YR3/4暗褐色粘質土
45：焼土面下層　5YR4/8赤褐色粘質土
46：旧表土　7.5YR4/3褐色粘質土
47：地山　10YR5/6黄褐色粘質土（粘性弱い）風化土
48：地山　7.5YR5/6明褐色粘質土
49：地山　マンガンバンド
50：地山　7.5YR4/4褐色・5/6明褐色、10YR5/6 黄褐色粘質土



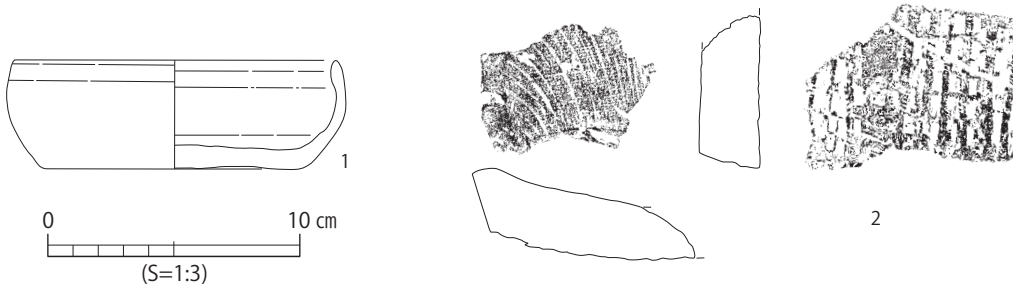
第５図　上竹矢７号墳第１トレンチ実測図（S＝1/60）

削られており、その位置から古墳とは関係のない遺構が存在した可能性があるが、トレンチ内での検出であり遺物も出土していないため詳細は不詳である。また、トレンチ南端部付近でも幅約 1.0m 深さ最大 50cm の規模で地山が L 字状に掘削されているが、想定した墳裾より外側に位置しており、この落ち込みも古墳とは無関係な遺構であった可能性が高い。なお、埴輪片などの遺物や葺石と想定される川原石などの転石はトレンチ内では確認されていない。なお、墳丘南側は現在の地表面上の標高 31.0m 付近にみかけのテラスがめぐり、2 段築成状を呈するが、本トレンチにおいては同地点付近において地山がテラス状に削平された状況は見て取れなかった。

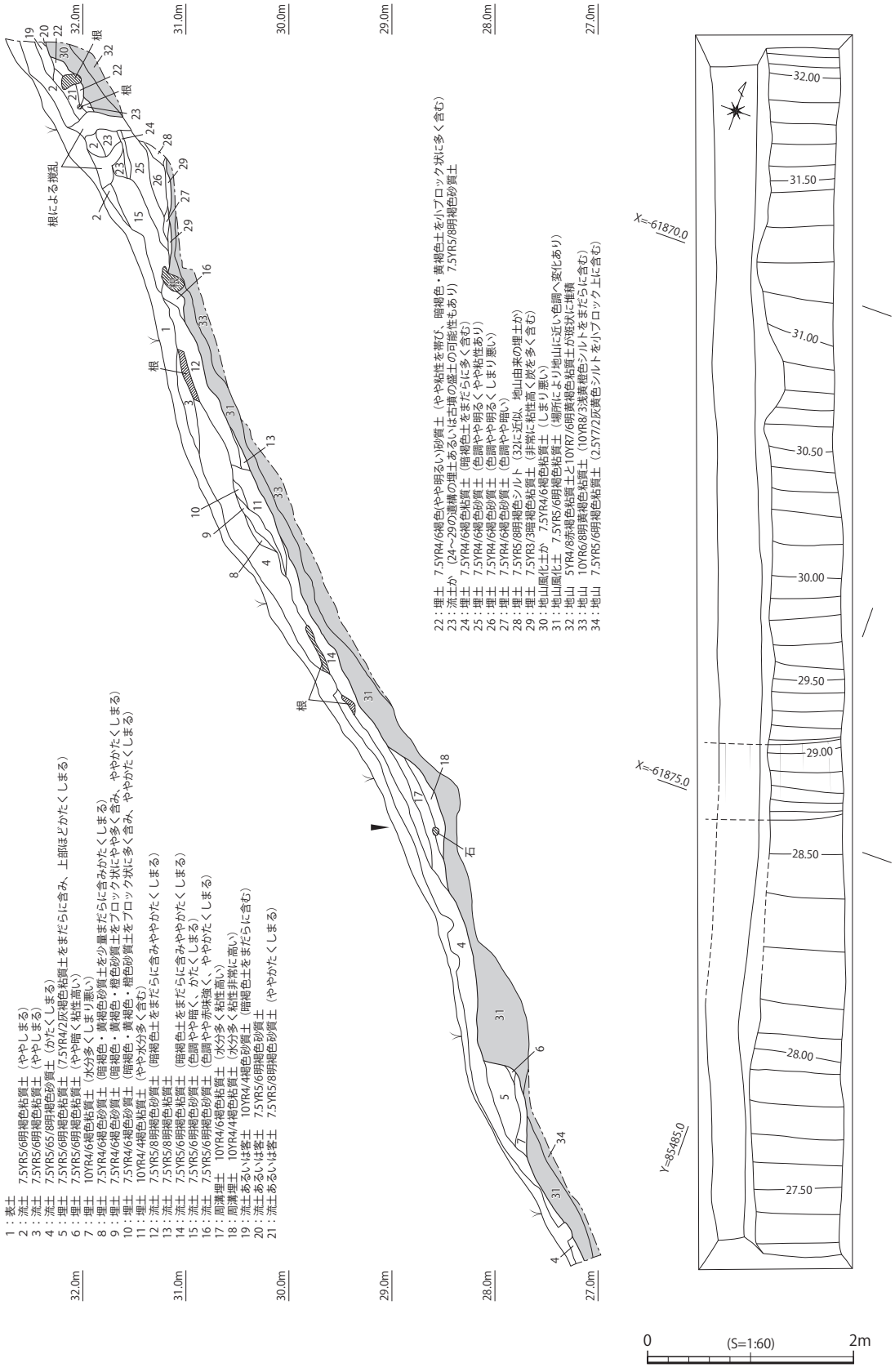
4. 第 3 トレンチ（第 8 図）

前方部の主軸ラインに並行（約 0.6m 南）して設定した長さ 15.4m、幅約 1.5m のトレンチである。東端付近で第 5 トレンチと接続しており、トレンチの西側は 7 号墳に隣接する 8 号墳の東側部分に及んでいる。トレンチ南壁沿いに幅約 50cm のサブトレンチを掘削し、地山層認定の確実さを期した。トレンチの東側には旧表土上に最大約 65cm の厚みで盛土が盛られている。旧表土の直上や盛土の間から一辺 20 ～ 30cm 程度の石が複数点出土している。古墳の築造にあたり意図的に置かれたとすれば、盛土を盛る際の目印として置かれた可能性が考えられる。盛土は旧表土上に厚さ 10 ～ 20cm 程度の厚さごとに盛られたと考えられ、トレンチ東端から 2.2m 付近に約 60cm の高さで堤状に盛られた後、その東側と西側に盛土がなされたと想定される。トレンチ東端より 5.5m 付近で旧表土が一旦認められず、その直上に盛土がなされていることから、前方部前面は地山を削り出した後に盛土が施されるという工程で成形されたと考えられる。前方部前面の傾斜は現状で 15°程度で非常になだらかな印象を受ける。前方部前面東側には 8 号墳が隣接することから、その境界部分は現状で区画溝状を呈しているが、盛土と溝の埋土の堆積状況から 7 号の溝が埋まった後に 8 号墳が築造されたものと想定される。溝の底部幅は最大で約 1.5m ほどを測り、盛土の最高点との高低差は約 1.2m である。トレンチの土層堆積状況からトレンチ東端から 4.4 m付近に前方部平坦面端が位置し、墳端はトレンチ西端から 5.2 m付近であったと想定される。前方部前面のトレンチ西端から 7.2m 付近に 2 か所傾斜変換点が見られ、それぞれ前方部の 1 段目上端と 2 段目下端にあたる可能性も考えられる。なお、古墳時代の遺物や葺石と想定される川原石などの転石はトレンチ内では確認されていない。

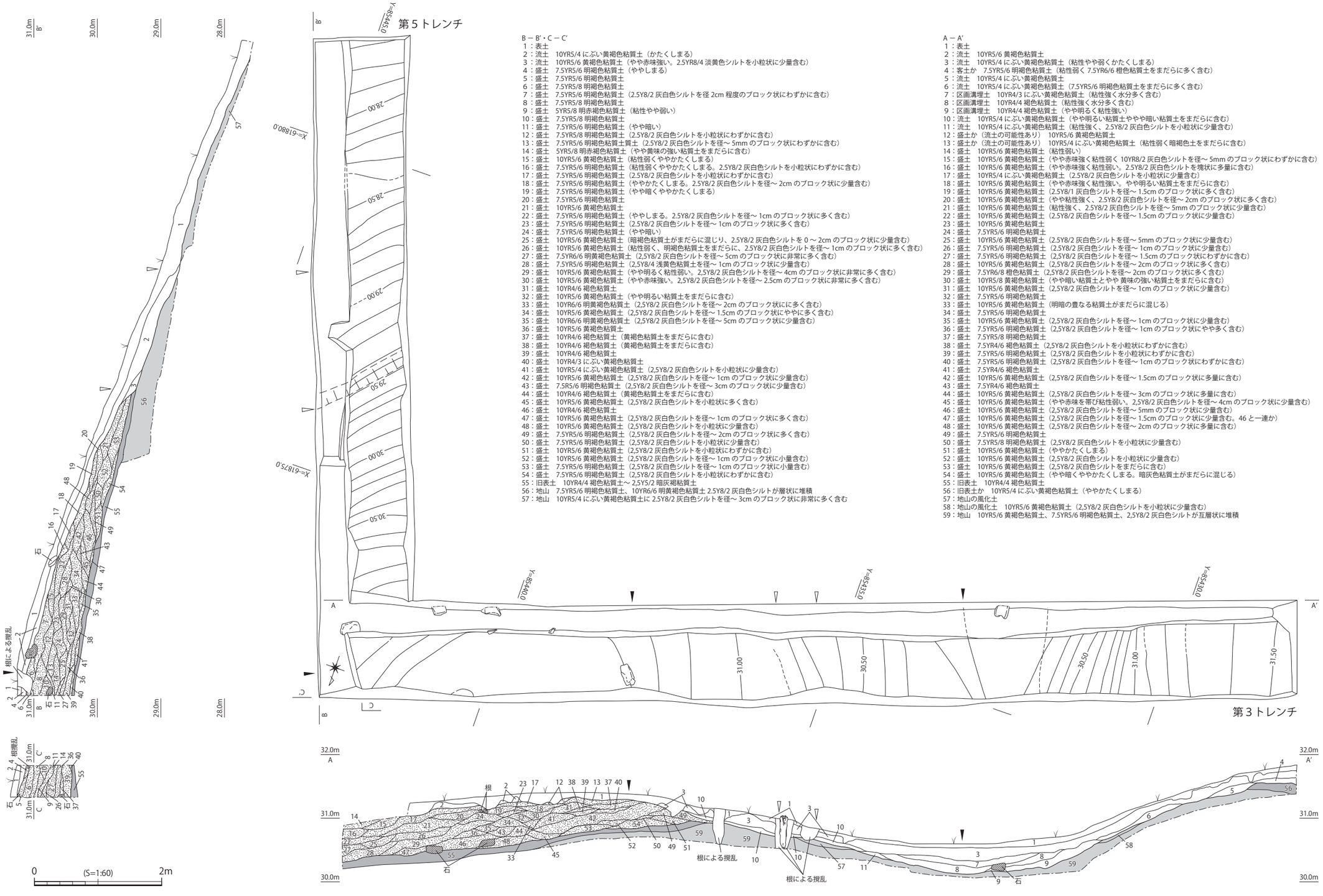
第 3 トレンチ出土遺物（第 6 図）　第 6 図 1 は須恵器の坏である、2 は瓦片でともに古代の遺物である。このほか古代の須恵器片や瓦片などが出土しているが、図示したものも含めすべて表土および流土中からの出土である。



第 6 図　上竹矢 7 号墳第 3 トレンチ出土遺物実測図（S ＝ 1/3）



第７図　上竹矢７号墳第２トレンチ実測図（S = 1/60）



B－B′・C－C′
1：表土
2：流土　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（かたくしまる）
3：流土　10YR5/6 黄褐色粘質土（やや赤味強い。2.5YR8/4 淡黄色シルトを小粒状に少量含む）
4：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（ややしまる）
5：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土
6：盛土　7.5YR5/8 明褐色粘質土
7：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径 2cm 程度のブロック状にわずかに含む）
8：盛土　7.5YR5/8 明褐色粘質土
9：盛土　5YR5/8 明赤褐色粘質土（粘性やや弱い）
10：盛土　7.5YR5/8 明褐色粘質土
11：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（やや暗い）
12：盛土　7.5YR5/8 明褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを小粒状にわずかに含む）
13：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 5mm のブロック状にわずかに含む）
14：盛土　5YR5/8 明赤褐色粘質土（やや黄味の強い粘質土をまだらに含む）
15：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（粘性弱くややかたくしまる）
16：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（粘性弱くややかたくしまる。2.5Y8/2 灰白色シルトを小粒状にわずかに含む）
17：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを小粒状にわずかに含む）
18：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（ややかたくしまる。2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 2cm のブロック状に少量含む）
19：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（やや暗くややかたくしまる）
20：盛土　7.5YR5/8 明褐色粘質土
21：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土
22：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（ややしまる。2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 1cm のブロック状に多く含む）
23：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 1cm のブロック状に多く含む）
24：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（やや暗い）
25：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（暗褐色粘質土がまだらに混じり、2.5Y8/2 灰白色シルトを 0～2cm のブロック状に少量含む）
26：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（粘性弱く、明褐色粘質土をまだらに、2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 1cm のブロック状に多く含む）
27：盛土　7.5YR6/6 明黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 5cm のブロック状に非常に多く含む）
28：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（2.5Y8/4 浅黄色粘質土を径～ 1cm のブロック状に少量含む）
29：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（やや明るく粘性弱い。2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 4cm のブロック状に非常に多く含む）
30：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（やや赤味強い。2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 2.5cm のブロック状に非常に多く含む）
31：盛土　10YR4/6 褐色粘質土
32：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（やや明るい粘質土をまだらに含む）
33：盛土　10YR6/6 明黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 2cm のブロック状にに多く含む）
34：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 1.5cm のブロック状にややに多く含む）
35：盛土　10YR6/6 明黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 5cm のブロック状に少量含む）
36：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土
37：盛土　10YR4/6 褐色粘質土（黄褐色粘質土をまだらに含む）
38：盛土　10YR4/6 褐色粘質土（黄褐色粘質土をまだらに含む）
39：盛土　10YR4/6 褐色粘質土
40：盛土　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
41：盛土　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを小粒状に少量含む）
42：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 1cm のブロック状に少量含む）
43：盛土　7.5R5/6 明褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 3cm のブロック状に少量含む）
44：盛土　10YR4/6 褐色粘質土（黄褐色粘質土をまだらに含む）
45：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを小粒状に多く含む）
46：盛土　10YR4/6 褐色粘質土
47：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 1cm のブロック状に多く含む）
48：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを小粒状に少量含む）
49：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 2cm のブロック状に多く含む）
50：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを小粒状に少量含む）
51：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを小粒状にわずかに含む）
52：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 1cm のブロック状に小量含む）
53：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 1cm のブロック状に小量含む）
54：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを小粒状にわずかに含む）
55：旧表土　10YR4/4 褐色粘質土～ 2.5Y5/2 暗灰褐粘質土
56：地山　7.5YR5/6 明褐色粘質土、10YR6/6 明黄褐色粘質土 2.5Y8/2 灰白色シルトが層状に堆積
57：地山　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土に 2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 3cm のブロック状に非常に多く含む

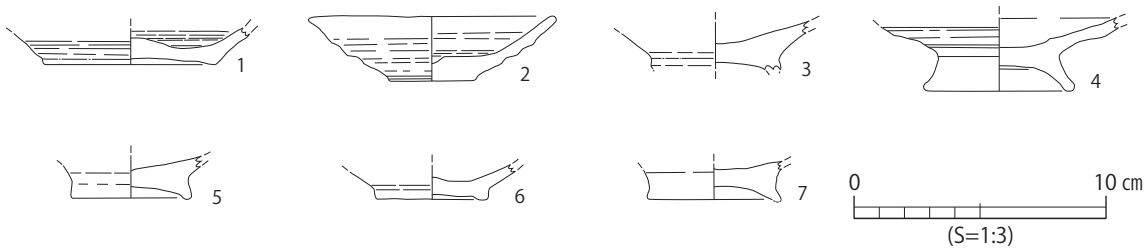
A－A′
1：表土
2：流土　10YR5/6 黄褐色粘質土
3：流土　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（粘性やや弱くかたくしまる）
4：客土か　7.5YR5/6 明褐色粘質土（粘性弱く 7.5YR6/6 橙色粘質土をまだらに多く含む）
5：流土　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
6：流土　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（7.5YR5/6 明褐色粘質土をまだらに多く含む）
7：区画溝埋土　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（粘性強く水分多く含む）
8：区画溝埋土　10YR4/4 褐色粘質土（粘性強く水分多く含む）
9：区画溝埋土　10YR4/4 褐色粘質土（やや明るく粘性強い）
10：流土　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（やや明るい粘質土ややや暗い粘質土をまだらに含む）
11：流土　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（粘性強く、2.5Y8/2 灰白色シルトを小粒状に少量含む）
12：盛土か（流土の可能性あり）　10YR5/6 黄褐色粘質土
13：盛土か（流土の可能性あり）　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（粘性弱く暗褐色土をまだらに含む）
14：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（粘性弱い）
15：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（やや赤味強く粘性弱く 10YR8/2 灰白色シルトを径～ 5mm のブロック状にわずかに含む）
16：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（やや赤味強く粘性弱い。2.5Y8/2 灰白色シルトを塊状に多量に含む）
17：盛土　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを小粒状に少量含む）
18：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（やや赤味強く粘性強い。やや明るい粘質土をまだらに含む）
19：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/1 灰白色シルトを径～ 1.5cm のブロック状に多く含む）
20：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（やや粘性強く、2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 2cm のブロック状に多く含む）
21：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（粘性強く、2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 5mm のブロック状に少量含む）
22：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 1.5cm のブロック状に少量含む）
23：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土
24：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土
25：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 5mm のブロック状に少量含む）
26：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 1cm のブロック状に少量含む）
27：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 1.5cm のブロック状にわずかに含む）
28：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 2cm のブロック状に多く含む）
29：盛土　7.5YR6/8 橙色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 2cm のブロック状に多く含む）
30：盛土　10YR5/8 黄褐色粘質土（やや暗い粘質土とやや 黄味の強い粘質土をまだらに含む）
31：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 1cm のブロック状に少量含む）
32：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土
33：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（明暗の豊なる粘質土がまだらに混じる）
34：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土
35：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 1cm のブロック状に少量含む）
36：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 1cm のブロック状にやや多く含む）
37：盛土　7.5YR5/8 明褐色粘質土
38：盛土　7.5YR4/6 褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを小粒状にわずかに含む）
39：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを小粒状にわずかに含む）
40：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 1cm のブロック状にわずかに含む）
41：盛土　7.5YR4/6 褐色粘質土
42：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 1.5cm のブロック状に多量に含む）
43：盛土　7.5YR4/6 褐色粘質土
44：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 3cm のブロック状に多量に含む）
45：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（やや赤味を帯び粘性弱い。2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 4cm のブロック状に少量含む）
46：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 5mm のブロック状に少量含む）
47：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 1.5cm のブロック状に少量含む。46 と一連か）
48：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを径～ 2cm のブロック状に多量に含む）
49：盛土　7.5YR5/6 明褐色粘質土
50：盛土　7.5YR5/8 明褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを小粒状に少量含む）
51：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（ややかたくしまる）
52：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを小粒状に少量含む）
53：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトをまだらに含む）
54：盛土　10YR5/6 黄褐色粘質土（やや暗くややかたくしまる。暗灰色粘質土がまだらに混じる）
55：旧表土　10YR4/4 褐色粘質土
56：旧表土か　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（ややかたくしまる）
57：地山の風化土
58：地山の風化土　10YR5/6 黄褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを小粒状に少量含む）
59：地山　10YR5/6 黄褐色粘質土、7.5YR5/6 明褐色粘質土、2.5Y8/2 灰白色シルトが互層状に堆積

第８図　上竹矢７号墳第３・５トレンチ実測図（S＝1/60）

5. 第 4 トレンチ（第 11 図）

墳丘南側のくびれ部の状況を確認するために設定した幅約 4.0m、長さ約 6.2m のトレンチである。トレンチの壁面沿いと北東隅から南西隅に斜行するサブトレンチを設定し掘削した。トレンチ南西隅部分を残し、トレンチ南側部分は幅約 1.0 ～ 2.0m 幅、深さ 30cm 程度の溝が検出されている。溝の埋土から古代の土師器片が多数出土していることからも、トレンチ周辺はかなり後世の改変を受けていることが想定される。トレンチ西壁の北端から 2.4 mから 2.8 m付近で地山の傾斜が急になり、そこから南側は傾斜がなだらかとなっている。このことから、トレンチ西壁の北端から 2.8 m付近がくびれ部の墳端にあたると推定される。なお、第 4 トレンチでも古墳時代の遺物や葺石と想定される川原石などの転石はトレンチ内では確認されていない。

第 4 トレンチ出土遺物（第 9 図）　第 9 図 1 ～ 7 は土師器の坏である。1 は無高台で、2 ～ 7 は高台をもつものである。当トレンチからは土師器片が合計 2.1kg 出土している。



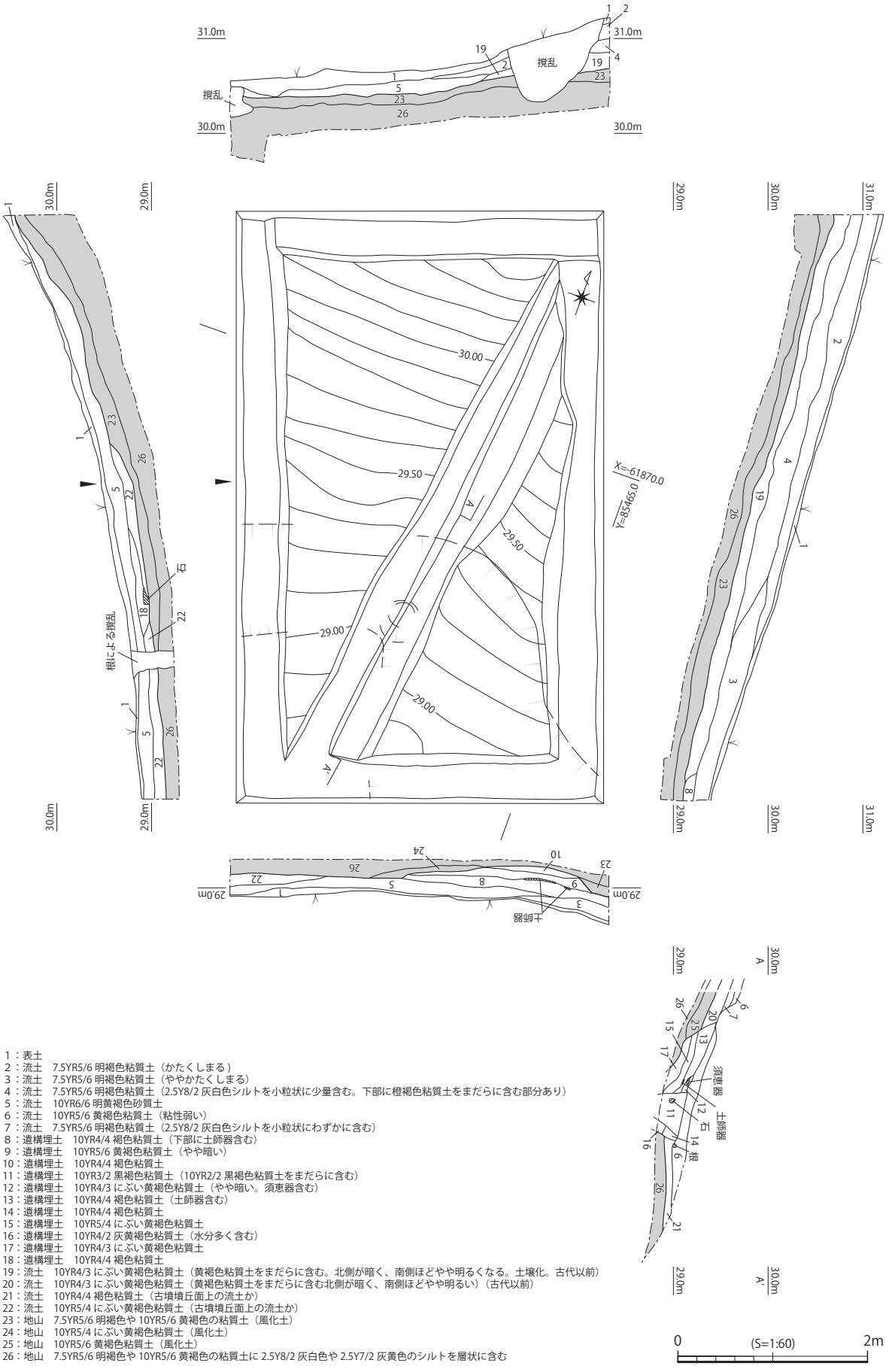
第 9 図　上竹矢 7 号墳第 4 トレンチ出土遺物実測図（S ＝ 1/3）

6. 第 5 トレンチ（第 8 図）

前方部南側に中軸ラインに直行して設定したトレンチで、長さは 12m、幅は 1.5m である。トレンチの北端部は第 3 トレンチに接続している。トレンチ西壁沿いにはサブトレンチを掘削した。トレンチ北端から南 4.7m 付近まで地山上で旧表土層が堆積しており、その上に最大約 90cm の厚みで盛土が盛られている。盛土は 10 ～ 20cm 程度厚さを 1 単位として盛られている。土層の堆積状況から、第 5 トレンチ周辺では、墳裾で地山を削り出し、その上に盛土を盛るという工程で墳丘が築造されたと考えられる。トレンチ北端から 4.8m 付近と 7.3m 付近で墳丘上面の傾斜の角度が変化するため、前者が前方部の傾斜変換点、後者が墳端の可能性が考えられる。なお、古墳時代の遺物や葺石と想定される川原石などの転石はトレンチ内では確認されていない。

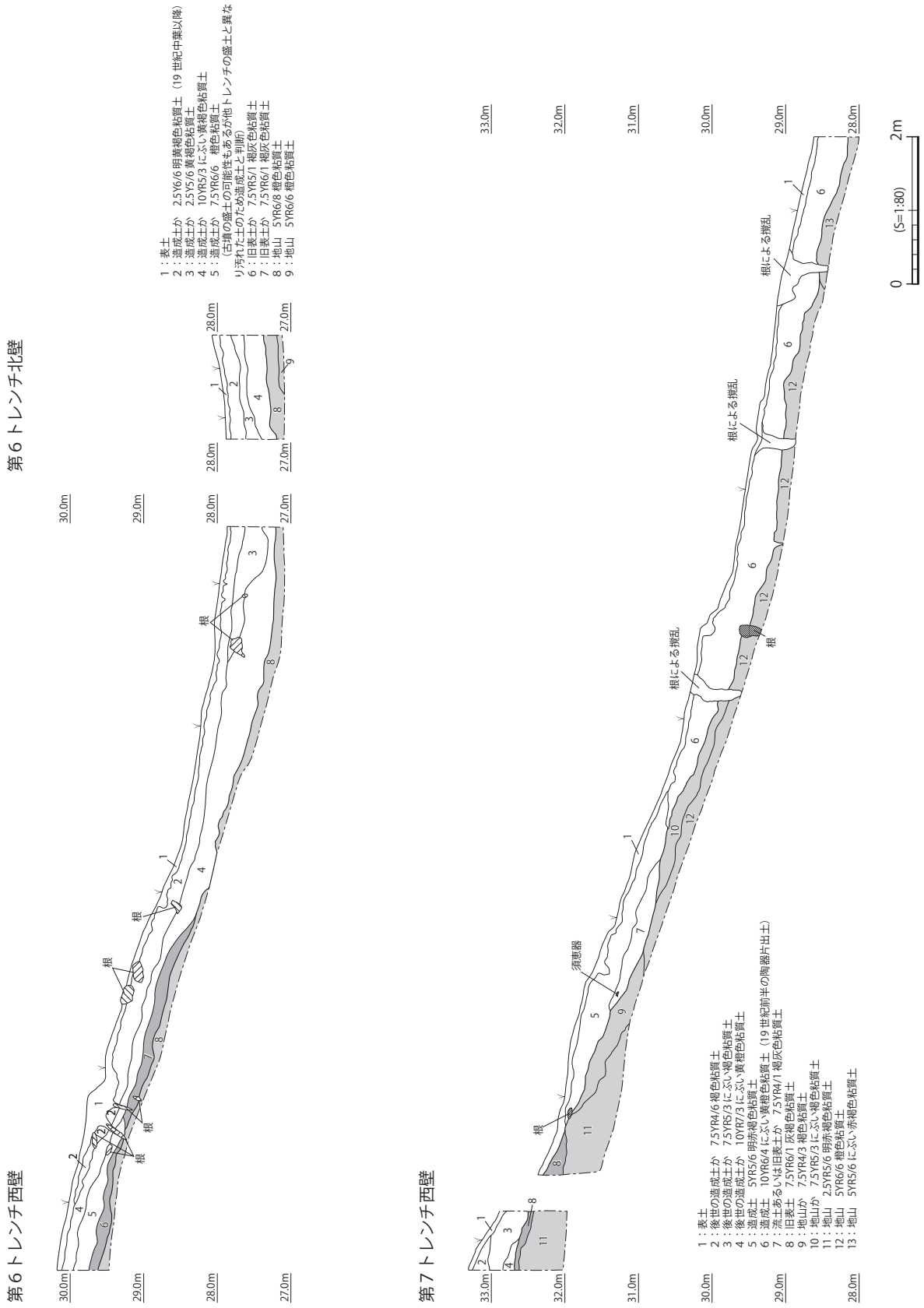
7. 第 6 トレンチ（第 11 図）

前方部北側に主軸ラインに直行して設定した長さ約 9.5m、幅 2m のトレンチである。トレンチ南端から 1 ～ 2m 付近の間は植林された立木があったため、掘削を行っていない。表土直下には約 30 ～ 60cm の厚みで造成土と考えられる粘質土が堆積している。このうち上層では 19 世紀中葉の陶磁器（紅皿）が出土しており、この時期以降にトレンチ周辺が造成されたものと考えられる。トレンチ上端から 3.5m 付近までは、造成土と地山の間に約 10cm の厚みで旧表土と考えられる褐灰色粘質土が堆積している。トレンチ周辺部は南側から西側にかけてかぎ状に低い崖面が形成されており、後世に耕作等のための造成がなされていると考えられる。造成土からは須恵器と土師器の破片が多数出土した。いずれも小片であり詳細は不詳であるが、トレンチ周辺に古墳時代以降の遺構が存在した可能性も考えられる。トレンチ内では古墳の築造時の盛土や地山の整地の痕跡を確認することはできなかったため、墳端の確認には至らなかった。なお、埴輪や葺石と想定される川原



1：表土
2：流土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（かたくしまる）
3：流土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（ややかたくしまる）
4：流土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを小粒状に少量含む。下部に橙褐色粘質土をまだらに含む部分あり）
5：流土　10YR6/6 明黄褐色砂質土
6：流土　10YR5/6 黄褐色粘質土（粘性弱い）
7：流土　7.5YR5/6 明褐色粘質土（2.5Y8/2 灰白色シルトを小粒状にわずかに含む）
8：遺構埋土　10YR4/4 褐色粘質土（下部に土師器含む）
9：遺構埋土　10YR5/6 黄褐色粘質土（やや暗い）
10：遺構埋土　10YR4/4 褐色粘質土
11：遺構埋土　10YR3/2 黒褐色粘質土（10YR2/2 黒褐色粘質土をまだらに含む）
12：遺構埋土　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（やや暗い。須恵器含む）
13：遺構埋土　10YR4/4 褐色粘質土（土師器含む）
14：遺構埋土　10YR4/4 褐色粘質土
15：遺構埋土　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
16：遺構埋土　10YR4/2 灰黄褐色粘質土（水分多く含む）
17：遺構埋土　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
18：遺構埋土　10YR4/4 褐色粘質土
19：流土　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（黄褐色粘質土をまだらに含む。北側が暗く、南側ほどやや明るくなる。土壌化。古代以前）
20：流土　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（黄褐色粘質土をまだらに含む北側が暗く、南側ほどやや明るい）（古代以前）
21：流土　10YR4/4 褐色粘質土（古墳墳丘面上の流土か）
22：流土　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（古墳墳丘面上の流土か）
23：地山　7.5YR5/6 明褐色や 10YR5/6 黄褐色の粘質土（風化土）
24：地山　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（風化土）
25：地山　10YR5/6 黄褐色粘質土（風化土）
26：地山　7.5YR5/6 明褐色や 10YR5/6 黄褐色の粘質土に 2.5Y8/2 灰白色や 2.5Y7/2 灰黄色のシルトを層状に含む

第 10 図　上竹矢 7 号墳第 4 トレンチ実測図（S = 1/60）



第 11 図　上竹矢７号墳第６・７トレンチ実測図（S = 1/60）

石などの転石はトレンチ内では確認されていない。

8. 第 7 トレンチ（第 11 図）

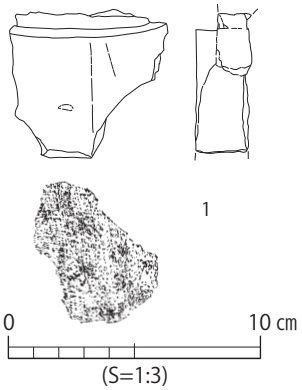
後円部北側に主軸ラインに直行する軸線から 1m 東に並行するラインで設定したトレンチで、長さは 23m、幅は 2m である。トレンチ南端から約 0.6 ～ 1.0m 付近は植林による立木があり掘削を行っていない。トレンチ北端から約 60cm 付近までは最大 40cm の厚みで褐色系の粘質土が旧表土上に堆積しており、後世に丘陵平坦面を造成した際の造成土と考えられる。トレンチ北端から 1.5m 付近から北は最大約 40cm の厚みで造成土が堆積している。トレンチ内では古墳の築造時の盛土や地山の整地の痕跡を確認することはできなかったため､墳端の確認には至らなかった。なお、埴輪や葺石と想定される川原石などの転石はトレンチ内では確認されていない

9. 第 8 トレンチ（第 13 図）

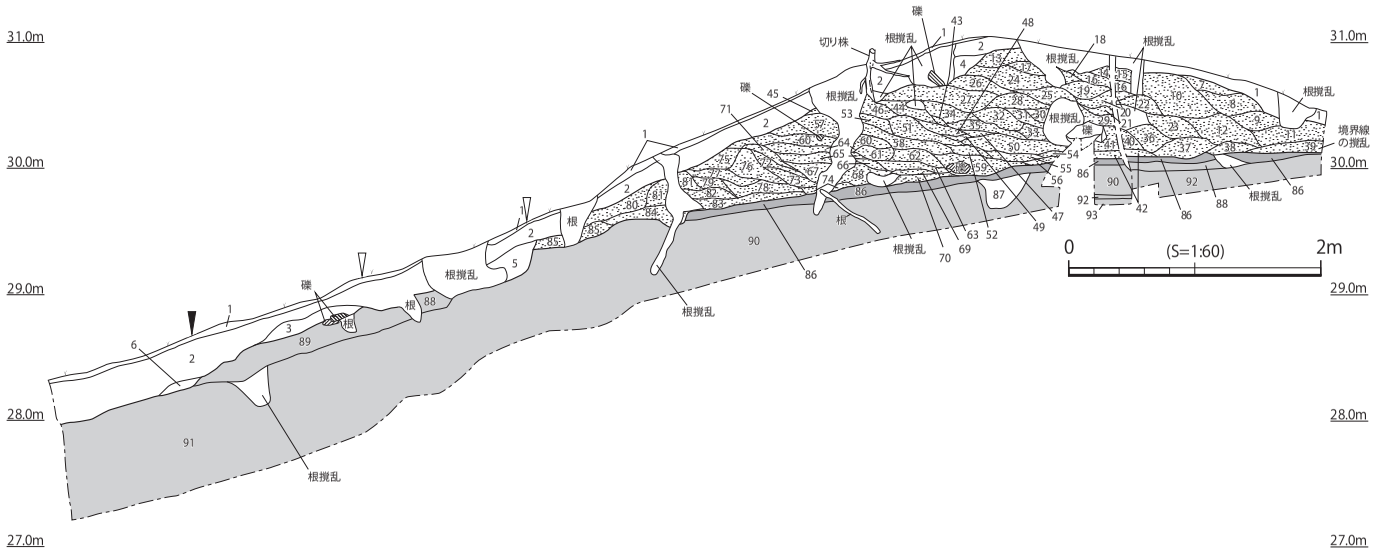
くびれ部をまたいで南北に走る里道の墳丘南側の西側法面を清掃し土層の堆積状況を確認した。トレンチ北端部から 6.3m 付近までは表土および流土下で盛土を確認した。盛土は 10 ～ 30cm 程度の厚みで細かい単位に分層が可能であり、これは施工時の盛土単位に相当すると考えられる。盛土はまずトレンチ南端から 4.0m 付近を頂点とする断面山型に盛られ、その後にその内側に盛土が盛られたと考えられる。盛土中に 2 点礫が確認されたが、これらは盛土の工程にかかわる目印として置かれた可能性も考えられる。トレンチ南端から 3.8m 付近で盛土が途切れ、そこから地山が幅約 1.2m ほどテラス状に削りだされている。また、トレンチ南端から約 1.0m 付近で地山の傾斜が変化している。これらのことから、トレンチ北端から 6.3m 付近から北が盛土による前方部の 2 段目でテラス状の部分以下が地山の削り出しによって構築された 1 段目であったと考える事もできる。

10. 表採遺物（第 12 図）

前方部平端面で採取した、有段式丸瓦の破片である。古墳群東側には出雲国分寺跡が所在するため、そこから持ち込まれた可能性が高い。



第 12 図　上竹矢 7 号墳　表採遺物実測図（S ＝ 1/3）



第13図　上竹矢７号墳第８トレンチ実測図（S = 1/60）

1：表土
2：流土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（部分的にかたくしまる）
3：流土　10YR5/8黄褐色粘質土　（ややしまり悪い）
4：流土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（しまり悪い）
5：流土　10YR5/6黄褐色粘質土　（粘質弱くしまる）
6：流土　10YR5/6黄褐色粘質土　（地山風化土可能性あり）
7：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（かたくしまる）
8：盛土　10YR5/6黄褐色シルト　（2.5Y8/2灰白色シルトを小粒状に含む）
9：盛土　7.5YR6/8橙色砂質土
10：盛土　5YR5/6明赤褐色シルト　（7.5YR6/8橙色2.5YR6/6橙色シルトをまだらに含む）
11：盛土　7.5YR6/8橙色シルト　（2.5Y8/2灰白色シルトを小粒状に少量含む）
12：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（2.5YR6/6橙色シルト2.5Y8/2灰白色シルトを小粒状に含む）
13：盛土　5YR5/6明赤褐色粘質土　（2.5YR5/6明赤褐色粘質土をまだらに少量、2.5Y8/2灰白色シルトを小粒状に多く含む）
14：盛土　7.5Y6/6橙色砂質土　（2.5Y8/2灰白色シルトを小粒状に含む）
15：盛土　7.5Y6/6橙色砂質土　（14と同じか）
16：盛土　5YR5/8明赤褐色粘質土　（粘性弱く、2.5Y8/2灰白色シルトを小粒状に多く含む）
17：盛土　5YR5/8明赤褐色シルト　（2.5Y8/2灰白色シルトを小粒状に多く含む）
18：盛土　7.5YR6/6橙色シルト　（17のつづきか）
19：盛土　7.5YR6/6橙色粘質土　（ややしまる）
20：盛土　7.5YR5/6明赤褐色粘質土
21：盛土　7.5YR5/6明赤褐色粘質土　（2.5Y8/2灰白色シルトをまだらに多くに含む）
22：盛土　7.5YR5/6明赤褐色粘質土　（やや暗くしまり悪い）
23：盛土　7.5YR5/6明赤褐色粘質土　（2.5Y8/2灰白色シルトをまだらに多くに含む）
24：盛土　7.5YR5/6明赤褐色粘質土
25：盛土　7.5YR6/8橙色粘質土　（しまり悪く2.5Y8/2灰白色シルトを小粒状に少量含む）
26：盛土　5YR6/8橙色砂質土　（7.5YR6/8橙色シルトをまだらに　2.5Y8/2灰白色シルトを小粒状に含む）
27：盛土　7.5YR5/8明褐色粘質土　（粘性弱くややしまり悪い）
28：盛土　7.5YR6/6シルト　（2.5Y8/2灰白色シルトをまだらにまだらに非常に多く含む）
29：盛土　7.5YR5/6粘質土　（2.5Y8/2灰白色シルトをわずかに含む）
30：盛土　7.5YR6/6シルト　（2.5Y8/2灰白色シルトをまだらに含む）
31：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（しまり悪い）
32：盛土　7.5YR5/8明褐色粘質土　（粘性弱く、10YR6/8明黄褐色、2.5Y8/2灰白色シルトを小粒状に非常に多く含む）
33：盛土　7.5YR5/8明褐色粘質土　（2.5Y8/2灰白色、５YR6/6橙色シルトをまだらに多く含む）
34：盛土　7.5YR6/8橙色シルト　（2.5Y8/2をまだらに多く含む）
35：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（粘性弱く、2.5Y8/2灰白色シルトおまだらに含む）
36：盛土　7.5YR6/6橙色粘質土　（やや暗く粘性弱い、2.5Y8/2灰白色シルトを小粒状に多く含む）
37：盛土　7.5YR4/6褐色粘質土　（粘性弱い）
38：盛土　7.5YR5/6明褐色シルト　（2.5Y8/2灰白色シルトを小粒状に少量含む、かたくしまる）
39：盛土　7.5YR4/6褐色シルト　（かたくしまる）
40：盛土　7.5YR4/6褐色粘質土　（ややしまる）
41：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（10YR8/6黄橙色シルトを小粒状に含む）
42：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（やや暗い）
43：盛土　7.5YR6/8橙色粘質土　（2.5Y8/2灰白色シルトを小粒状に含む）
44：盛土　7.5YR5/8明褐色粘質土　（粘性弱い）
45：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土
46：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（粘性弱い、46と同じか）
47：盛土　7.5YR6/6橙色シルト
48：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土
49：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（2.5YR8/2灰白色シルト等を非常に多く含む）
50：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（2.5YR8/2白色シルトを小粒状にまだらに多く含む）
51：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（10YR8/6黄橙色シルトをまだらに多く含む）
52：盛土　7.5YR5/6明褐色シルト
53：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土
54：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（10YR8/6黄褐色シルトをまだらに非常に多く含む）
55：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（2.5Y8/2灰白色シルトを小粒状に非常に多く含む）
56：盛土　7.5YR4/6褐色粘質土
57：盛土　7.5YR5/8明褐色粘質土　（2.5Y8/2灰白色シルト等を小粒状に少量含む）
58：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（粘性弱く2.5Y8/2灰白色シルト等をまだらに非常に多く含む）
59：盛土　7.5YR4/6褐色粘質土　（10YR8/6黄橙色シルトをまだらに含む）
60：盛土　7.5YR6/8橙色粘質土　（粘性弱く2.5Y8/2灰白色シルトを小粒状に含む）
61：盛土　10YR6/4にぶい黄橙色シルト
62：盛土　5YR5/8明赤褐色粘質土　（2.5YR8/2灰白色シルトを小粒状にわずかに含む）
63：盛土　5YR5/8明赤褐色粘質土　（10YR8/6黄橙色シルトを小粒状に含む）
64：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（粘性弱く10YR6/4にぶい黄橙色シルト混じる）
65：盛土　7.5YR5/8明褐色粘質土　（粘性弱く10YR8/6黄橙色シルト小粒状に少量含む）
66：盛土　7.5YR4/6褐色粘質土
67：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（10YR8/6黄橙色シルトを小粒状にやや多く含む）
68：盛土　5YR5/8明赤褐色粘質土　（10YR8/6黄橙色シルトを小粒状に多く含む）
69：盛土　7.5YR4/6褐色粘質土　（かたくしまる）
70：盛土　10YR4/6褐色シルト
71：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（10YR8/6黄橙色シルトを小粒状に含む）
72：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（10YR8/6黄橙色シルトを小粒状に非常に多く含む）
73：盛土　7.5YR5/8明褐色粘質土　（10YR8/6黄橙色シルトをまだらにわずかに含む）
74：盛土　10YR5/8黄褐色粘質土　（粘性弱い）
75：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（10YR8/4淡黄橙色シルトをまだらに含む）
76：盛土　7.5YR5/8明褐色粘質土　（10YR8/4淡黄橙色シルトをまだらに非常に多く含む）
77：盛土　7.5YR5/8明褐色粘質土　（赤味強く粘性弱い10YR8/4淡黄橙色シルトを小粒状に含む）
78：盛土　7.5YR5/8明褐色粘質土　（しまり悪く10YR8/4淡黄橙色シルトをまだらに多く含む）
79：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（10YR8/4淡黄橙色シルトをまだらに多く含む）
80：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（かたくしまる、10YR8/4淡黄橙色シルトを小粒状にわずかに含む）
81：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（ややしまる、10YR8/4淡黄橙色シルトを小粒状に少量含む）
82：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（10YR8/6黄橙色シルトを小粒状に多く含む）
83：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（しまり悪い、10YR8/4淡黄橙色シルトを小粒状まだらに少量含む）
84：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（粘性弱くややしまる、10YR8/4淡黄橙色シルトを小粒状にわずかに含む）
85：盛土　7.5YR5/6明褐色粘質土　（かたくしまる、2.5Y8/2灰白色シルトを小粒状に少量含む）
86：旧表土　10YR5/4にぶい黄褐色シルト
87：古墳時代以前の遺構か　（あるいは根撹乱か）　7.5YR4/6褐色粘質土
88：地山風化土　7.5Y5/6明褐色粘質土
89：地山風化土　7.5Y5/6明褐色粘質土～10YR5/6黄褐色粘質土　（2.5YR8/2灰白色シルトを1～1.5のブロック状にやや多く含む）
90：地山　7.5YR5/6明褐色～10YR5/6黄褐色シルト
91：地山　（南側ベルト付近以南Tr.9付近）2.5Y8/2灰白色シルト　（10YR5/6黄褐色粘質土をまだらに含む）
92：地山か　7.5YR5/6明褐色粘質土　（2.5Y8/2灰白色シルトを小粒状に少量含む）
93：地山か　7.5YR4/6褐色粘質土

第 4 節　小結

1. 調査知見のまとめ

まず今回の発掘調査で明らかになったことを簡単にまとめておく。

①墳丘の南側と東側下部は地山を削り出して造成し、その上に盛土を行って構築される。盛土はいわゆる土嚢積み的な様相が認められ、墳丘の外側に堤状に盛られた後に内側が盛られている。

②前方部で段築の可能性のある傾斜変換点を確認し、少なくとも前方部は 2 段築成で築かれていた可能性も否定できない。後円部のトレンチでは段築を確認できなかった。

③葺石や葺石由来の転石はトレンチでは確認していないことから、もともと葺石はふかれていなかった。

④埴輪は小片 1 点が出土したのみであり、もともとは配置されていなかった可能性が高いと考えられる。

2. 墳丘形態・規模の復元について

ここでは測量図と各トレンチの所見から、当古墳の墳丘形態と規模の検討を試みる。

まず古墳の規模であるが、墳丘主軸長 66m で出雲部で第 3 位の規模をもつ前方後円墳と判明した。この数値は内田氏らの報告した数値より 2.1m 大きいがこれは後述するように前方部の墳端が見かけの墳端より西で確認されたことによる。前方部長は 30.0m、くびれ部推定幅 14.0m、前方部正面高は約 2.5m である。後円部は推定径約 35.6m、高さ 5.5m である。平面形は前方部が撥形に開く前方後円墳であったと考えられる。

3. 段築について

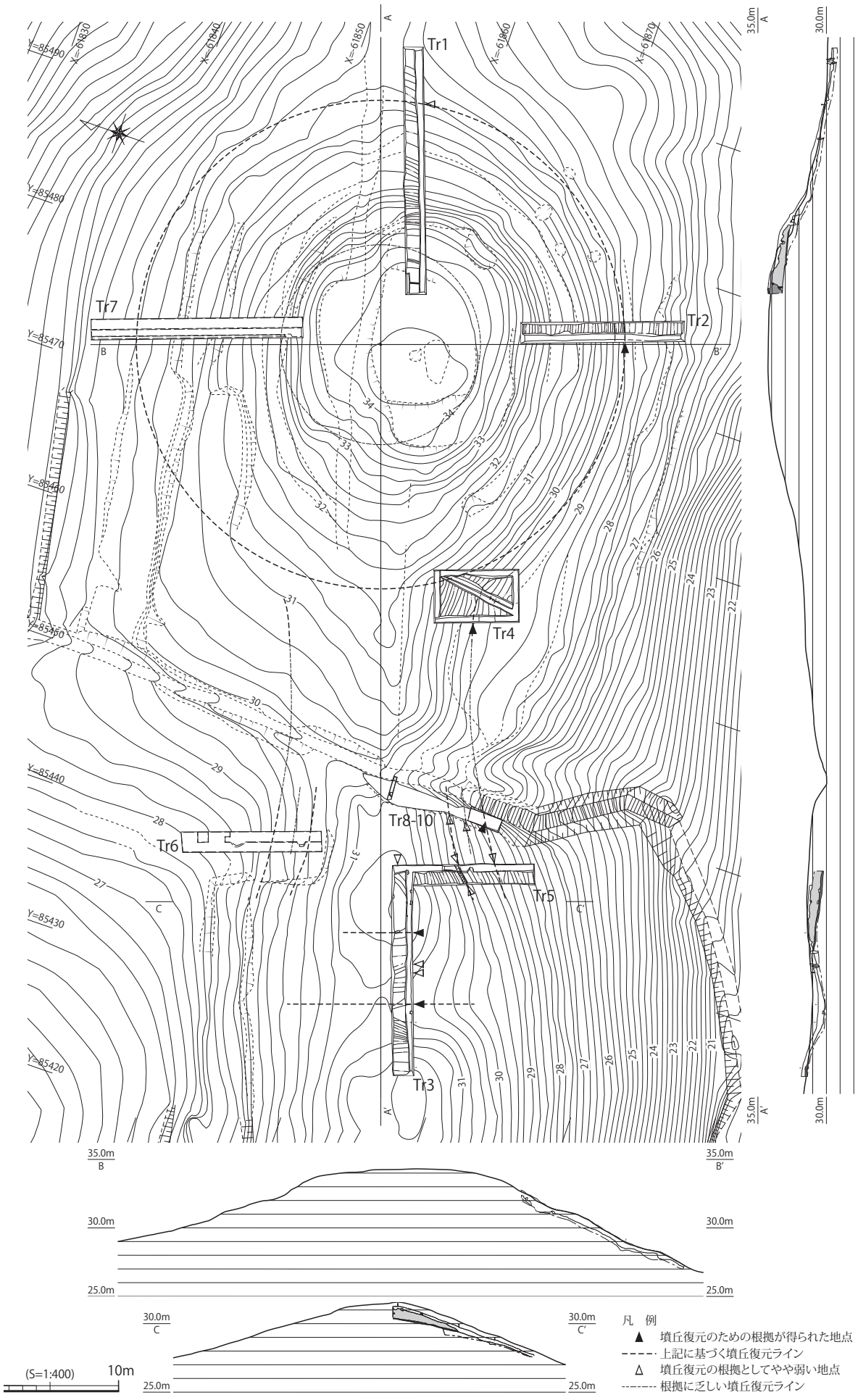
前方部については第 8 トレンチでテラス状を呈する部分が確認されたことなどから、2 段築成であった可能性も否定できない。後円部に関しては現状の地表面の標高 30m ライン付近でテラス状の地形がみられたが、今回の調査ではテラスの存在を裏付ける状況は確認できなかった。

4. 墳丘の構築方法について

上竹矢 7 号墳の墳丘は、地山削り出しの部分と盛土が施された部分とによる。地山面のうち墳裾付近で成形が必要な部分は設計意図に即した傾斜で削り出されている。前方部の平坦面を造成するために盛土が施されるが、堆積状況から土嚢積みがなされ、墳丘外側には先行して土手状に盛土が積まれたと考えられる。また、地山上で礫が複数検出されているが、これらは盛土を積む際の目印として置かれた可能性も考えられる。調査前には墳丘上で川原石が確認されたとされ、葺石が噴かれていた可能性も指摘されていたが、今回の調査により葺石を持たない古墳であったことが判明した。

5. 上竹矢 7 号墳の位置付け

上竹矢 7 号墳はその前方部が低く細長い墳形からは古墳時代前期末に築造されたと推定される。墳長は 66m であり出雲部の古墳では第 3 位の規模である。上竹矢 7 号墳の西約 600m には全長 58m の前方後円墳である廻田 1 墳が所在する。廻田 1 号墳は発掘調査で出土した埴輪から出雲地域最古級（古墳時代前期末・川西埴輪編年Ⅱ期）の前方後円墳であることが明らかにされている。池淵俊一は上竹矢 7 号墳と廻田 1 号墳の墳丘規模は、その後の出雲の古墳時代中期以降の最高首



第 14 図　上竹矢 7 号墳墳丘復元図（S ＝ 1/400）

長墓の目安として歴代踏襲されていた可能性を指摘している（池淵 2016）。

出雲地域西部には古墳時代前期末に全長 52m の前方後円墳、大寺 1 号墳が築かれる。廻田 1 号墳と大寺古墳の築造はそれまでの安来市周辺の首長墓が大型の方墳であったことと比較され、大きな画期とみなされてきた。また、増田浩太は廻田 1 号墳が定型化した円筒埴輪が持つ一方で葺石を持たないことと、大寺古墳が埴輪を持たず葺石を有することとの差異が、被葬者の出自や畿内政権との政治的なつながりを示す可能性があると述べている（増田 2004）。

今回の上竹矢 7 号墳の調査では円筒埴輪の小片 1 点が出土したのみであるため、築造時に埴輪は樹立されなかった可能性が高い。また葺石や転石も検出されていないことから、葺石は用いられなかったと判明した。これらの点をみると、葺石を用いないという共通点、その墳丘規模・形態、近接する立地から、上竹矢 7 号と廻田 1 号墳の被葬者は出自を同じくする同一系列の首長であったと考えられる。大谷晃二は今回の発掘調査で「葺石、埴輪がまったく検出されなかった」ことから上竹矢 7 号墳を廻田 1 号墳より古い大賀編年（大賀 2002）前Ⅴ期に位置づけている（松江北高校歴史愛好会 2017）。

墳形と規模、築造時期、葺石と埴輪を有しないことを総合すると、上竹矢 7 号墳は、畿内政権との強い関係を有する大橋川南岸地域の首長が出雲地方に初めて築いた前方後円墳であり、その築造は出雲地域の最有力首長系列の地位が、安来市周辺を地盤としたグループから大橋川南岸地域を地盤としたグループに遷移したことを示す重要な意義を有すると考えられよう。

引用・参考文献

池淵俊一 2016「出雲東部における魚見塚古墳・東淵寺古墳の歴史的位置」『魚見塚古墳・東淵寺古墳発掘調査報告書』島根県教育委員会
大賀克彦 2002「凡例　古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町教育委員会
川西宏之 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第 2 号日本考古学協会
増田浩太 2004「廻田古墳群」『松江市東部における古墳の調査』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
松江北高校歴史愛好会 2017「西百塚山 19 号墳－意宇平野に生きた豪族の証－」『季刊文化財』第 139 号

第 4 章　東百塚山古墳群の発掘調査

第 1 節　調査概要

1. 測量調査の経過と成果

平成 26 年度は東百塚山古墳群の所在する大草丘陵南側斜面（松江市八雲町側）に分布する 129 号墳～ 140 号墳及び古墳群東端の尾根上に立地する 141 号墳の測量を行った。

測量調査は、平成 26 年 4 月 30 日～ 6 月 6 日まで、実働 16 日で実施した。129 号墳～ 140 号墳の測量は、松江市八雲町日吉側の丘陵南斜面の最も標高の高い北側の古墳から着手して、順に丘陵斜面下方（南側）に下る形で測量を進めた。調査範囲は岩坂林産共同組合の所有地であり、杉植林がなされていたので、若干の灌木伐採の実施のみで古墳群はよく視認することができた。今回の測量では八雲町側で 12 基、古墳群東端で 1 基の古墳を確認した。測量作業はトータルステーションにより国土座標値を計測し、手書きでマイラー用紙に測点を記入して図化作業を行った。縮尺は 1/100 でコンター線は 25㎝間隔である。

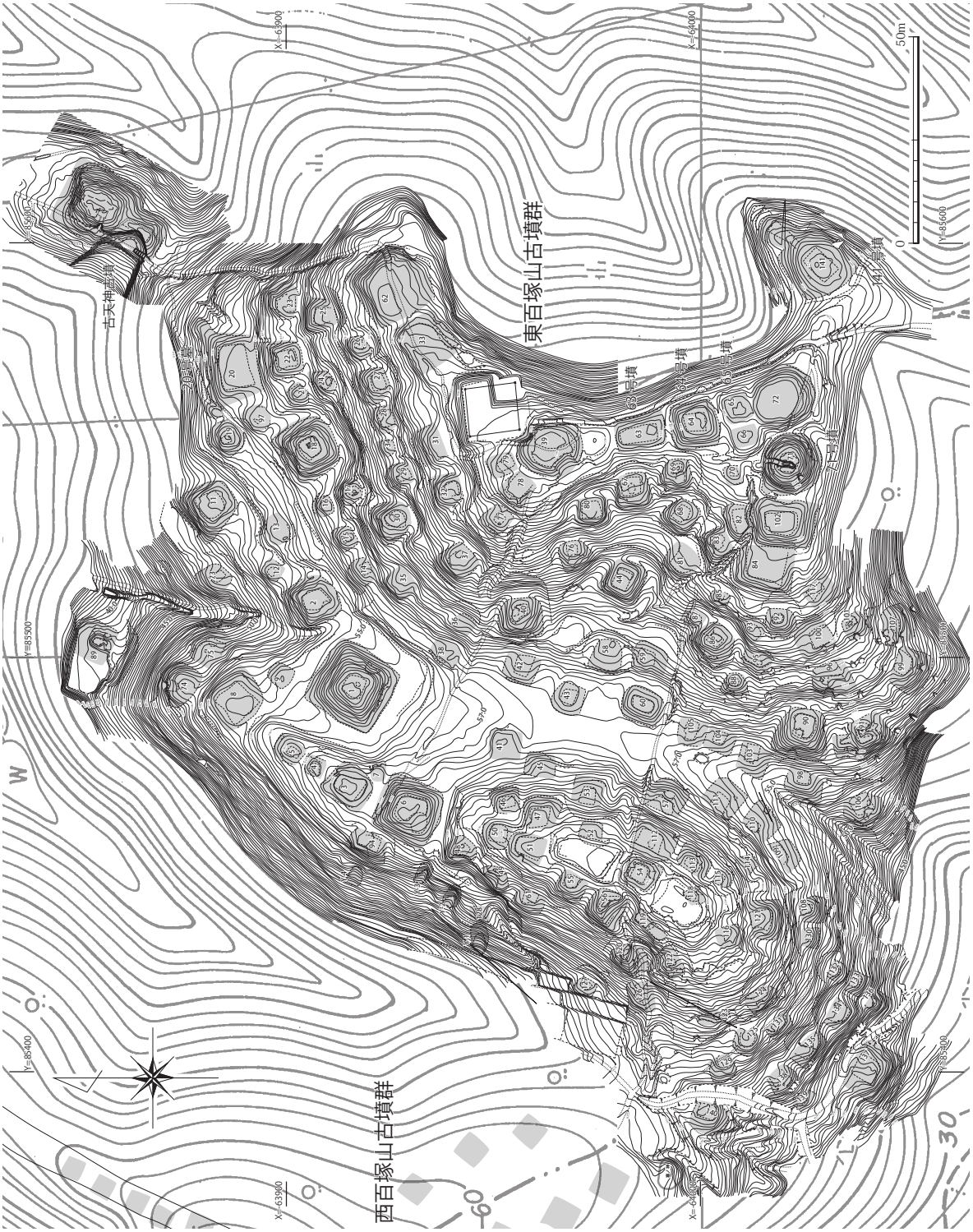
表 1　平成 26 年度　東百塚山古墳群測量古墳一覧

名　称	立　地	墳　形	規模（m）	高さ（m）	備　考
129 号墳	南側斜面	方墳	6.5 × 6.5	1.5	
130 号墳	南側斜面	方墳	5.0 × 4.5	1.25	
131 号墳	南側斜面	方墳	6.4 × 4.5	1.5	
132 号墳	南側斜面	方墳	4.5 × 4.0	1.0	
133 号墳	南側斜面	方墳	5.5 × 4.5	1.25	
134 号墳	南側斜面	方墳	6.5 × 4.5	1.5	
135 号墳	南側斜面	方墳	9.0 × 6.0	1.25	
136 号墳	南側斜面	方墳	6.0 × 5.5	2.5	
137 号墳	南側斜面	方墳	13.5 × 11	3.0	
138 号墳	南側斜面	方墳	7.0 × 6.5	1.5	
139 号墳	南側斜面	方墳	5.5 × 3.5	1.0	
140 号墳	南側斜面	方墳	10.0 × 9.0	1.75	山道で東端を削られる
塞の神	丘陵鞍部	不正円形	7.0 × 5.5	1.5	西百塚山古墳群の境界
141 号墳	小丘陵突端	前方後方墳	全長 25m	2.0	

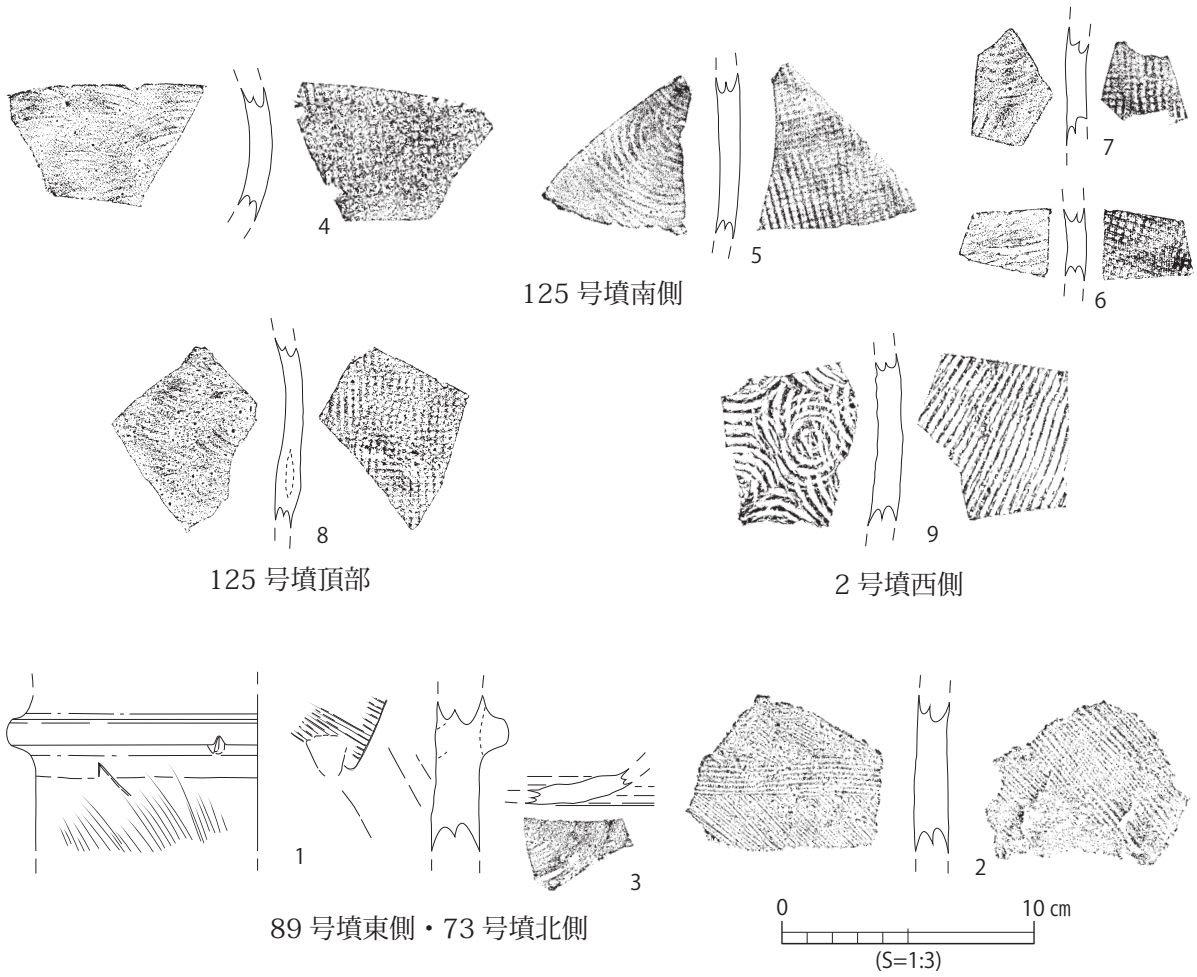
平成 26 年度の測量調査では方墳 12 基、前方後方墳 1 基の 13 基の古墳と近世以降に構築された積石遺構（賽の神）1 基を確認した。平成 8 年以来断続的に実施された松江北高等学校考古学部などの測量調査活動により、既に古墳群の大半の情報は知られていたが、古墳の墳形や群構成及び築造年代について、新たな知見を加えることができた。

今回測量調査を実施した 129 号～ 140 号墳は、松江市八雲町日吉側の低地（旧意宇川河道）にほど近いところに立地し、八雲側に生活基盤をもつ集団の墓域である可能性も考えられる。これらの古墳は、周辺で採集された須恵器などから古墳時代中期末～後期前半の築造と考えられ、古墳群全体の造墓時期とほぼ連動して造墓されていることが考えられる。古墳群の築造については、標高の高い地点から低い方へ順次古墳が築造される傾向が、当該地においても看取できる。

また、丘陵南側斜面で最も標高の低い地点（墳丘南裾で標高約 41m）に築造された 137 号墳は、



第 15 図　東百塚山古墳群の測量図（1/1,500）



第 16 図　H26 年度東百塚山古墳群　表面採集遺物実測図

長辺が 13.5m 余りであり大草丘陵南側斜面に築造された古墳の中では、ひときわ規模が大きいものである。これは北側斜面における 1 号墳のように、標高の低い山の入口の要所に盟主的な古墳を意図的に築造する傾向を認めることができる。

東百塚山古墳群内で墳丘規模が 14m 前後のものは、丘陵頂部に立地する 84、102、33、62 号墳などがあり、古墳群内で見ても小支群の造墓基点となるような盟主墳的な存在といえようか。

さらに、東・西百塚山古墳群の間には、明らかに古墳を造らない空閑地が南北帯状（道状）に横たわっており、時期ごとに大まかな墳墓築造エリアが存在し、ある時点でその造墓域が移動する可能性が考えられた。

141 号墳は、東百塚山古墳群の最東端の丘陵頂部に立地する前方後方墳であることが推察された。この古墳は 72 号墳（直径 16m の円墳）から 15m ほどの空閑地を経て、やや独立した丘陵頂部（標高 72m）に後方部を構え、北東側に延びる尾根上に前方部を向けている。全長 25m、後方部長さ 16m、後方部幅 13 ～ 16m、前方部長さ 9m、前方部先端幅約 7m、後方部墳頂平坦面 8.5 × 4.5m の規模を持つ。墳丘の高さは後方部西側で約 2m、東側で 1.75m であるが、前方部の先端基底部は尾根地形となり下降しているために標高 67.75m 付近となる。このため前方部先端と後方部墳頂との比高差は 3.5m ほどである。

前方後方墳として見たときに、後方部と背後の丘陵の切り離しの堀割形状が直線的ではなく、緩やかな弧を描いている点や、後方部のコーナー部の造作があまく、隅部を明瞭に造り込んでいない点が指摘できる。ただし、70.75m 以上の後方部墳頂付近の等高線は長方形を呈し、後方部の側面基底線は直線状となっている。また、両くびれ部も直角を志向している点は、前方後方墳の築造を意図していることをうかがわせる。

後方部墳頂と前方部墳頂部を結ぶ隆起斜道状のスロープが認められる。前方部の長さは墳頂の 1/3 強であり、前方部が極端に短く見えるが、前方部先端に存在する加工段を含めると全長 26.5m、前方部長 10.5m となり、後方部 : 前方部の比率は 6:4 となる。

2. 小結

東百塚山古墳群では、古墳 141 基（前方後方墳 2、円墳 3、方墳 135、四隅突出型墳丘墓 1）、横穴墓 4 基を確認した。既に山林開発や山道で削平、消滅した古墳や、前庭部の窪みなどを現在の地表面から確認できない横穴墓もあるものと考えられ、本来はさらに多くの古墳や横穴墓が築造されていたものと推定される。

平成 8 年以来断続的に測量活動が実施された結果、東百塚山古墳群全体をカバーする 1/100 サイズの測量図が作成され、古墳の立地状況や個々の古墳の切り合い関係、墳丘の細部に至るまで確認・検討することが可能となり、古墳群の基礎的な情報を得ることができた。今後の遺跡保護のため重要な資料となるほか、発掘調査等のさらなる発展的な調査にも利用が期待されるところである。

第 2 節　発掘調査の成果

1. 発掘調査の成果

発掘調査は、第一の目的を古墳群の築造開始時期の確認とし、次いで過去に盗掘を受けている 71 号墳の埋葬施設・副葬品の確認、築造方法の確認を主な目的として実施した。

具体的には、立地の良い尾根上に築造され、平面長方形という古相の墳形を示す 63 ～ 65 号墳について調査対象として、造墓開始時期の確認を目指すと共に、測量調査の結果で四隅突出型墳丘墓である可能性が指摘された 20 号墳の調査を実施した。（20 号墳は、発掘調査前まで「古墳」として取り扱われていたため、調査途中に弥生墳丘墓であることが確認された後に、「20 号墓」と変更している）

調査は、平成 26 年 11 月 18 日～平成 27 年 2 月 13 日まで実施し、12 月 22 日に岩本崇氏、大谷晃二氏、渡邊貞幸氏による調査指導を受けた。また、1 月 24 日には現地説明会を開催して 87 名の参加者があった。

2. 東百塚山 20 号墓の調査

20 号墓は、標高 55.2m 前後の北向きの丘陵中腹緩斜面に立地し、南側は 21・22・23 号墳に、西側は 19・97 号墳に隣接し、東側は空閑地、北側は急斜面となっている。狭義の東百塚山古墳群内では最も北東隅に立地している。

測量調査の結果から、四隅突出型墳丘墓である可能性が指摘されていたため、北東側の隅部（突出部）の墳丘東側－墳裾部にトレンチ（1T:4.2 × 2.0m）を東西方向に設定して調査を実施した。

1 トレンチでは、表土と墳丘流土である淡黄褐色粘土層を除去した時点で、南－北方向に伸びる貼石、敷石帯、立石列を確認した。貼石・配石構造は松本岩雄氏の分類によるⅡ B 類に相当する。墳丘貼石は、標高 55.5 ～ 55.8m の高さ 30㎝程度の部分に遺存しており、墳丘上部斜面には残存していなかった。この部分の墳丘は標高 55.9m 以下が基盤層で、それ以上は盛土で構築されている。つまり、盛土上に施工された貼石は、長年の風雨や浸食で盛土が流出した結果、崩落しやすい状況になったものと推測される。

表土や墳丘流土中には相当量の石が含まれていたことから、本来は墳丘斜面上部にも石が貼られていたと考えられる。貼石や敷石の石材は、10 ～ 20㎝ほどの隅の丸い角礫が使用されていた。

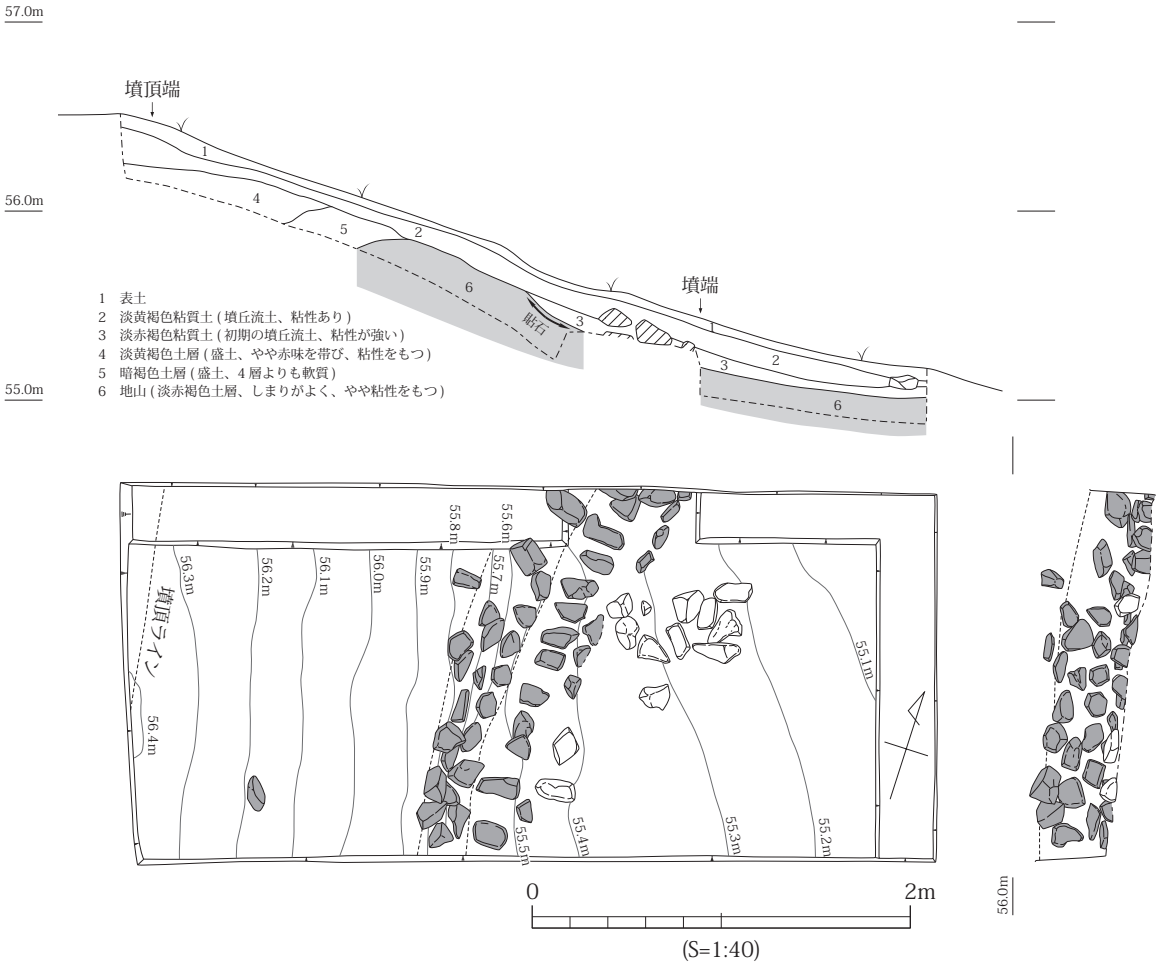
敷石帯は、墳丘貼石と立石の間隙を充填するかたちで石材の広い面を上にして敷かれている。敷石は、一列に並べられており、複数列に施工される部分は全くない。

立石列は、幅 15㎝、高さ 15㎝程度の石材を用いている。貼石や敷石に使用される石材より少し小振りである。

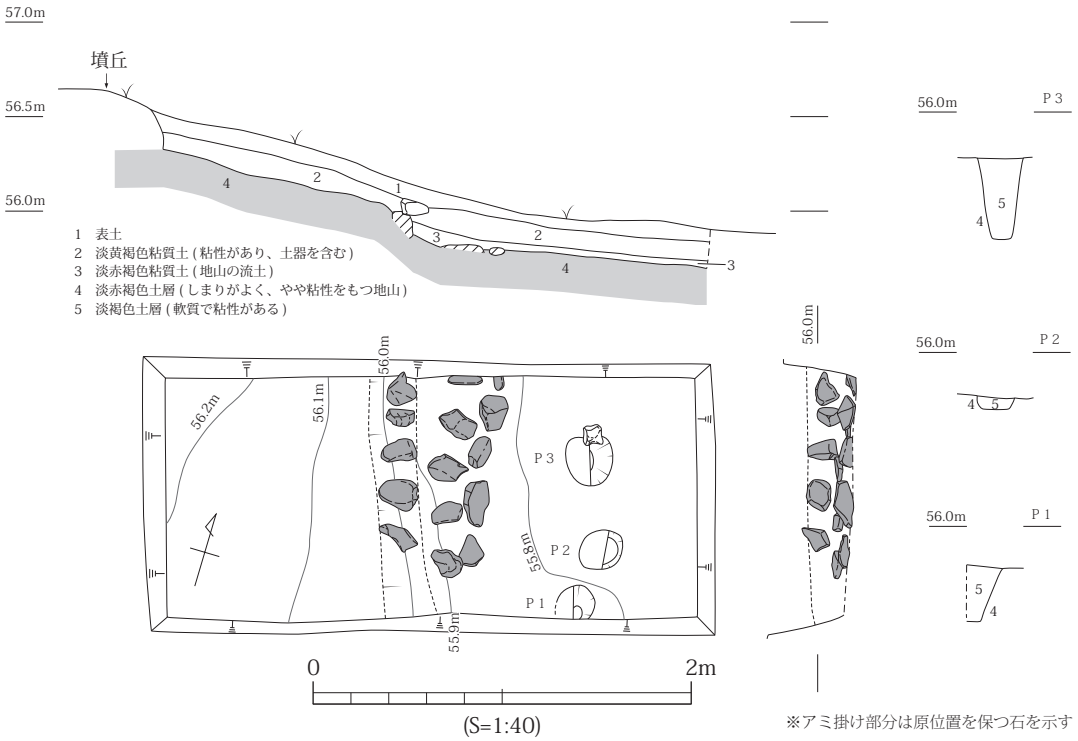
立石列の外側に 10 個前後の石材を長さ 70㎝×幅 35㎝ほどの範囲に集積した状況がみられた。他の墳丘墓外周でみられる配石墓状の遺構かと思われたが、石材の下面に土坑などは見られなかった。独立した墳墓ではなく、20 号墓に付随する配石遺構の可能性もある。

1 トレンチで四隅突出型墳丘墓に特徴的な列石が検出されたことと、弥生時代後期後葉の土器が出土したことから、20 号墓は「四隅突出型墳丘墓」であることが確認された。20 号墓は測量図上で北東隅部と北西隅部に突出部らしい地形が認められたが、南西隅部と南東隅部については突出し

第 17 図　東百塚山 19 ～ 23・97 号墳地形測量図（S = 1/250）

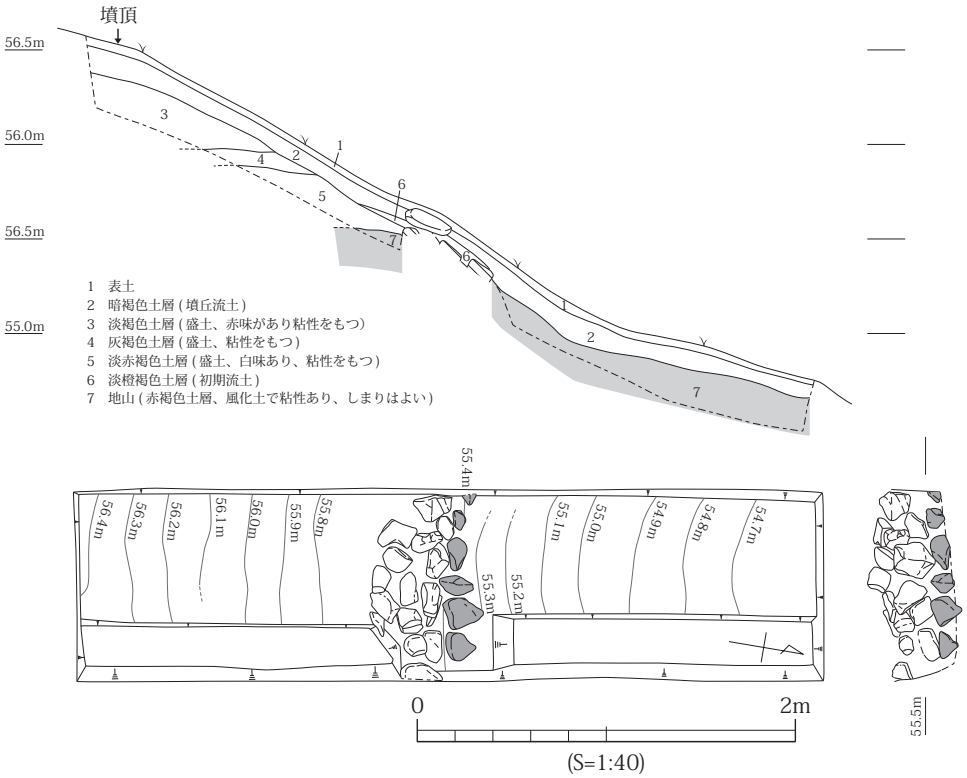


1 トレンチ



2 トレンチ

第 18 図　東百塚山 20 号墓　1 トレンチ・2 トレンチ実測図（S = 1/40）



3 トレンチ

第 19 図　東百塚山 20 号墓　3 トレンチ実測図（S = 1/40）

ておらず、方形となっていた。

このため、南東隅突出部の形状を確認するために 1 トレンチから 3.7m 南側に、2 トレンチ（3.0 × 1.5m）を設定した。

2 トレンチでは、1 トレンチで確認された列石の延長が確認された。1 トレンチ付近では墳丘基底部の標高は 55.5m 前後であるが、2 トレンチ付近では標高 55.9m であり、50㎝余り上昇している。墳丘本体が載っている基盤地形は、南から北に緩やかに傾斜する斜面であるが、その地形に合わせて墳丘を築くため、2 トレンチ付近での墳丘高さは約 1m 前後と低くなっている。また、2 トレンチで墳丘盛土は確認できず、地山削り出しにより墳丘形成している。

墳丘貼石は一段のみ残存しており、それに接して敷石帯が一列あり、さらに外側に立石列がある。各列石は 1 トレンチの状況と比較して、石と石の間隙がやや広がっており、間延びした印象がある。列石は、ほぼ直線的に 2 トレンチを横断しており、突出部に繋がるような弧線にならない。このことから、南東隅突出部は 2 トレンチから 2m 以上南側に離れて存在する可能性がある。

現状で 2 トレンチから南側は、22 号墳と 23 号の墳丘が迫ってきている。2 トレンチ内の列石の状況から南東隅部がさらに南に位置する可能性を鑑みると、22 号墳の築造の際に 20 号墳南端墳丘部分を埋め立てていることが考えられる。

また、列石の東側に基盤層に掘り込まれた直径 20 ～ 30㎝、深さ 5 ～ 50㎝のピット 3 基を確認した。このピットが 20 号墓に関連する施設なのか現状では不明である。

1 トレンチで列石が確認されたことから、意宇平野に面する墳丘北側斜面についても情報を得るために 3 トレンチ（4.0 × 1.0m）を設定した。

3 トレンチでは、55.5m 付近以下が基盤層で、それ以上の部分では約 1m の盛土を行って墳丘構

築を行っていることとが確認された。このトレンチでも石材を確認しているが、貼石－敷石帯－立石の明瞭な構造が見られないことから原位置を保つ状況ではないと考えられる。ただし、3 ～ 4 列程度の列状に石が横並びに揃っていることから、盛土の表面に施工された列石が盛土ごと一斉に滑りつつある状況と見ることができよう。1 トレンチの立石の標高が 55.5m なので、3 トレンチでも現状より 20 ～ 30㎝程度高い位置に列石が施工されていた可能性がある。

3. 遺物

20 号墓に設定した 1、2 トレンチでは若干の遺物が出土している。5 は須恵器甕の胴部破片である。外面は平行タタキ、内面は同心円文当て具痕を半すり消しとしている。1 トレンチから出土しているが 20 号墓に伴うものでは無く、南側の 22･23 号墳から転落してきた可能性が考えられる。

1・2 は 2 トレンチから出土した弥生土器（Ⅴ－ 3）で、1 が壺形土器口縁部、2 が鼓形器台の脚基部にあたる部位である。共に、胎土は明るい淡褐色を呈しており、次代の古式土師器に繋がる要素がある。

3、4 は 1 トレンチから出土したもので角閃石を含む暗茶褐色の胎土や特有の器形から、吉備系の小型特殊器台と考えられる。共に破片化・風化がみられ調整・文様の詳細は十分に観察できないが、3 は口縁端部、4 は脚端部とみられ胎土の状況などからも同一個体の可能性がある。口縁端部の稜は、断面台形状で斜め下方に張り出している。脚端部は外面に 3 条の浅い凹線が施されているようにみえるが器壁表面風化のため判然としない。

4. 小結

以上の 3 ヶ所のトレンチ調査の状況と、墳丘西辺列石のピンポール探査の結果から、20 号墳の墳丘東西長は 15.5m、南北長は推定 11m 以上、墳丘北側の高さ 1.2m となる。突出部先端の形状は不明であるがこれを含めた東西長は 22 ～ 25m 程度と考えられる。四隅突出型墳丘墓の墳丘平面形は基本的に長方形となることが多いことから、南北長よりも東西長が長い可能性が高い。

四隅突出型墳丘墓は、尾根上に複数基が連接して築造されることが多いが、20 号墓のような緩斜面に立地する例は、来美墳墓や間内越 1 号墓など少数が知られるに過ぎない。隣接して弥生墳丘墓が存在する可能性はあるが、古墳時代中期末～後期の造墓活動が盛んであり、地形の改変が進んでいるために現状では確認することは困難である。

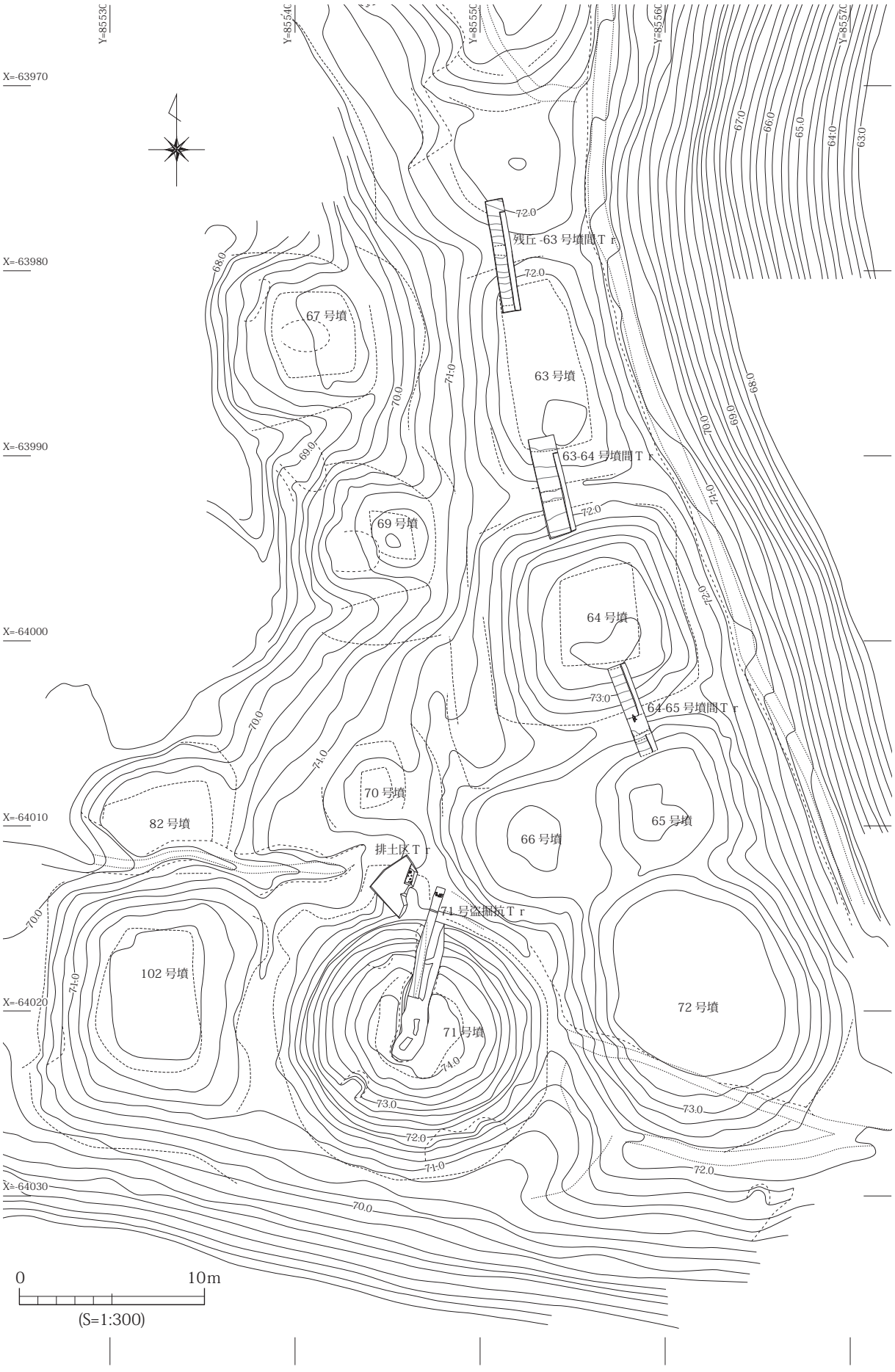
また、古墳時代以降の土地改変の影響で出土した土器類は少ないものの、弥生時代後期後葉（Ⅴ－ 3）の在地土器（甕、鼓形器台）と吉備系小型器台が出土している。松江市内で吉備系土器が出土した墳墓は的場墳墓、東城ノ前 2 号墓が知られる。また、上野遺跡（松江市宍道町）からも吉備系土器が出土しており、弥生墳墓の存在が想定される。

このような状況から、東百塚山 20 号墓は、小型と中型の境界上といえる墳丘規模を持ち、吉備地域の首長層とも何らかの関係を取り持った人物が葬られた可能性が想定される。

5. 東百塚山 63 号墳～ 65 号墳の調査

東百塚山 72 号墳は、古墳群の南東隅に立地し、墳頂部で標高 73.4m と古墳群の中では最も高い地点に立地する。72 号墳から北方に延びる尾根上には 65・64・63・39・79 号墳が連続するように築造されている。この尾根上からは北東方向（松江市東出雲町方面や中海方向）への眺望が優れており、意宇川下流～中海を強く意識した立地である。

この中で、平面墳丘形態が長方形を呈し、築造時期が前～中期に遡る可能性があった 63 号墳と



第 20 図　東百塚山古墳群 63 ～ 67、69 ～ 71 号墳地形測量図（S ＝ 1：300）

隣接する 64 号墳の築造時期と規模を確認するためにトレンチを３ヶ所設定して発掘調査を実施した。

残丘－ 63 号墳間 Tr

63 号墳の北側墳端にトレンチ（6m × 1m）を設定した。63 号墳の墳丘北側は大半が盛土により構築されており、墳高 1m のうち高さ 0.8m 余りが盛土であることが確認できた。トレンチ北側の高まりは全て地山であり、古墳造営がなされなかった残丘部分と考えられる。

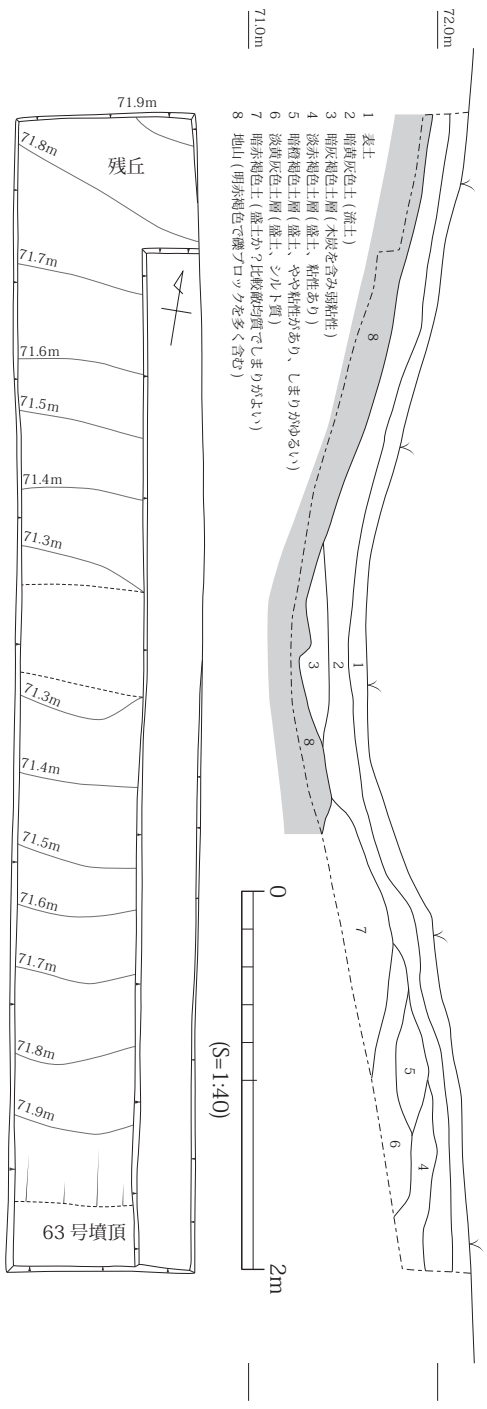
63 号墳－ 64 号墳間 Tr

63 号墳の南側墳端と 64 号墳の北側墳端の確認のためトレンチ（5.4 × 1.5m）を設定した。63 号墳は南側でも 80㎝余りの盛土が確認された。また、64 号墳北側も 1.2m 以上の盛土が確認された。特に 63 号墳については丘陵切断をした周溝部分のみ 10 ～ 20㎝余り基盤層まで掘削が及んでいるが、墳丘の大部分は盛土によって形成されている。

64 号墳の初期流土が堆積した後に、63 号墳の初期流土が堆積しているため、築造順は 64 号→ 63 号と考えられる。

64 号墳－ 65 号墳間 Tr

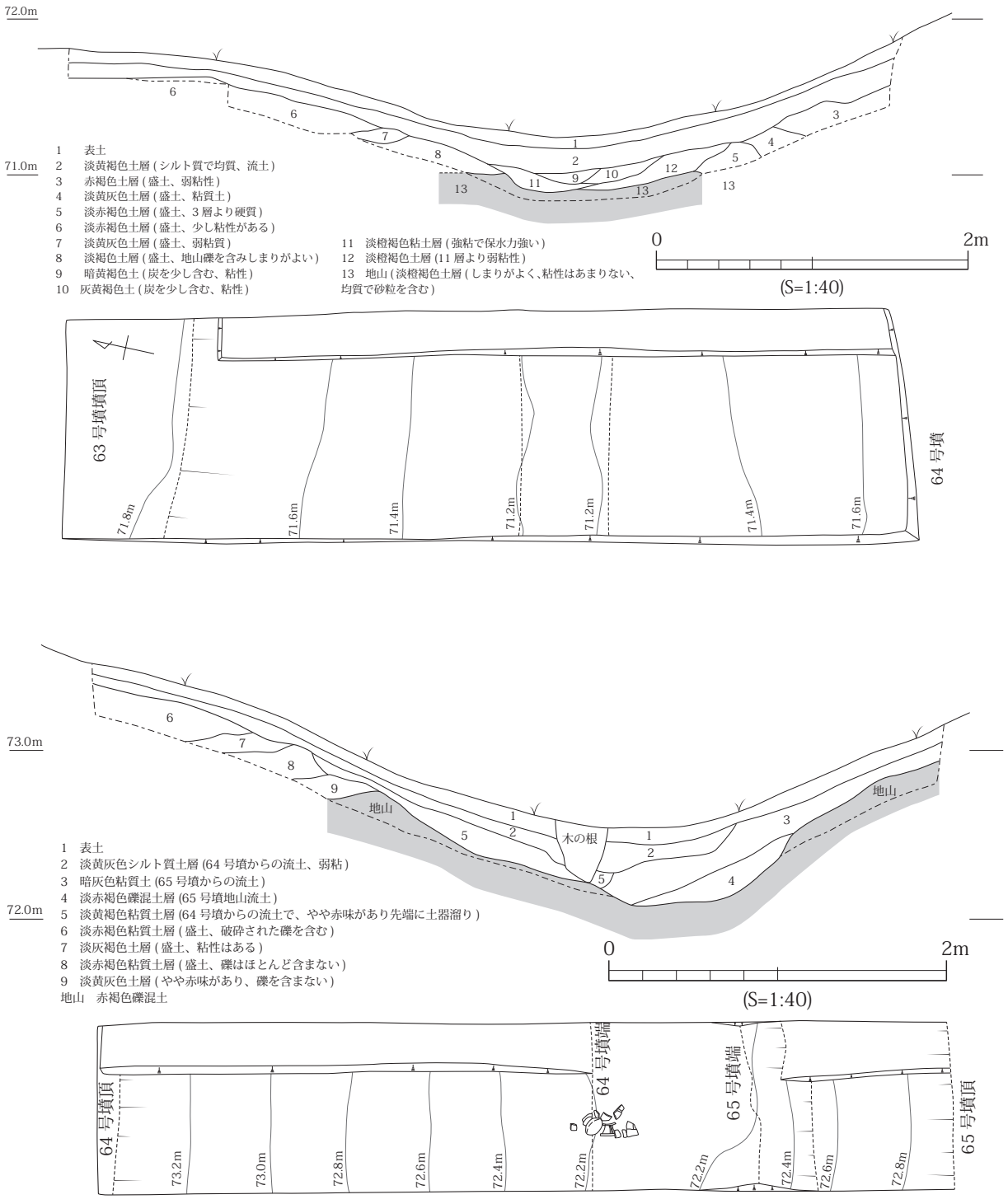
64 号墳の南側墳端と 65 号墳の北側墳端の確認のためトレンチ（5.0 × 1.0m）を設定した。64 号墳南側は墳丘高 1.6m のうち、基底部の 70㎝余りは地山削り出しで、墳丘上部 90㎝余りが盛土で構築されている。64 号墳の墳丘北側は基底部近くまで盛土で構成されていることから、墳丘構築前の自然地形が南から北に向けて傾斜していたことを示すが、これは現状の地形から見ても齟齬はない。さらに南側に隣接する 65 号墳の墳丘が、トレンチ内で確認できる限りでは地山整形であることとも矛盾しない。



第21図　東百塚山古墳群　残丘－63号墳間Tr実測図
（S＝1:40）

このトレンチでは南側に位置する 65 号墳の初期流土によって周溝が 30㎝ほど埋まった後に、64 号墳の初期流土が上に被って堆積することから、65 号→ 64 号の築造順が考えられる。

64 号墳の墳端には、須恵器𤭯 1 点、須恵器無蓋高杯 1 点、土師器高杯 3 点以上からなる土器溜まりが認められた。これらの土器群は飲食・供献を伴う祭祀儀礼に用いたものを、儀礼終了後に集積したような状況にあり、原位置に近い状態のまま土圧で破損していた。須恵器は TK208 期のような古態の形状を見せるが、端部の作りはやや間延びしてシャープさを欠いており、TK23 期古相に下る地方窯作と推測される。

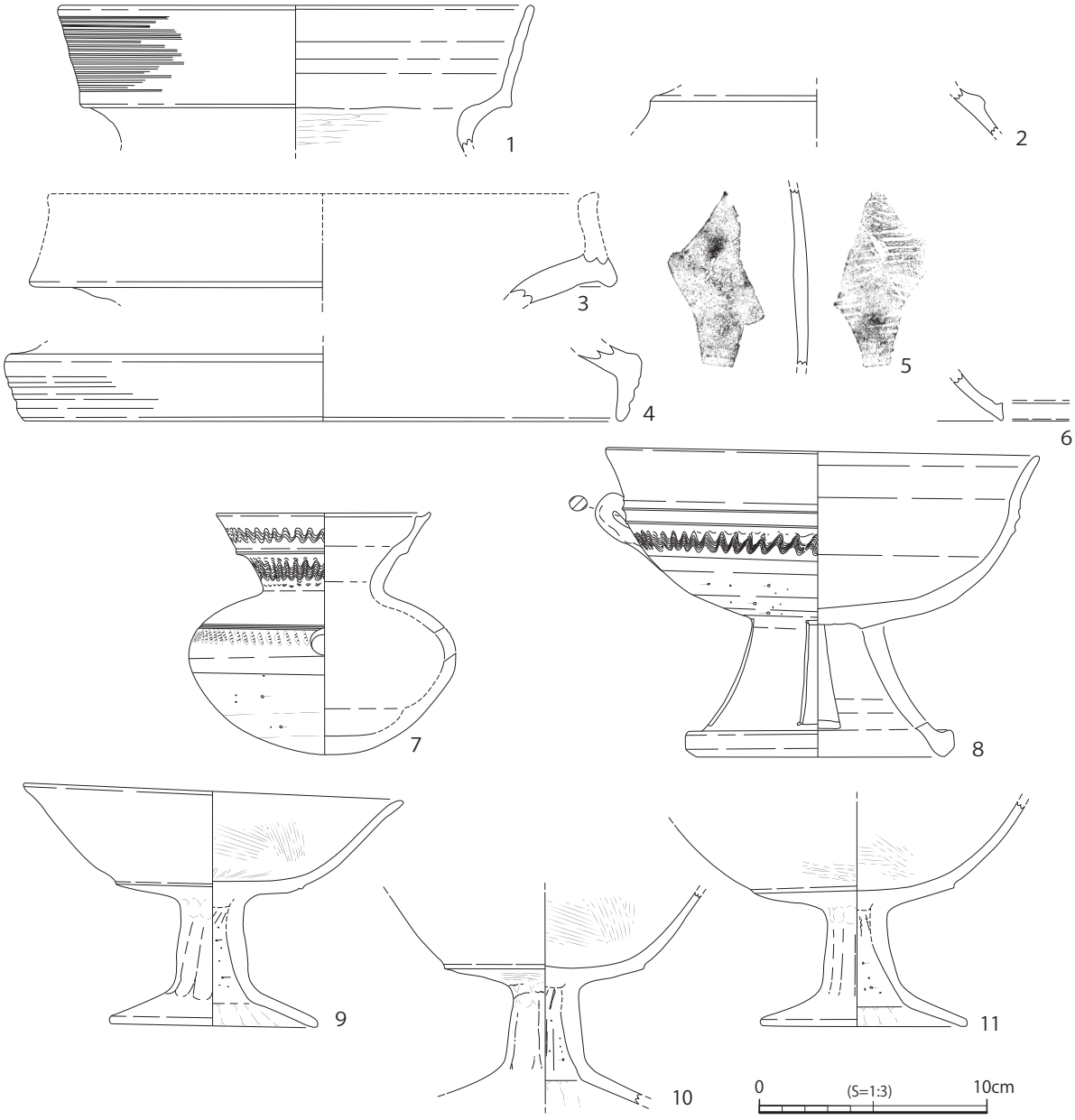


第 22 図　東百塚山古墳群 63 号古墳－ 64 号墳間 Tr：64 号墳－ 65 号墳間 Tr 実測図（S ＝ 1：40）

6. 遺物

6 は、63 号墳の墳頂近くで出土した須恵器の細片である。高杯の脚端部かと思われるが小片のため断定はできない。63 号墳に設定したトレンチ内からはこの土器しか出土していない。

7 ～ 11 は、64 号墳の南裾部でまとまって出土した土器群である。須恵器高杯（8）、須恵器𤭯（7）、土師器高杯（9 ～ 11）を図化しているが、土師器高杯はさらに 2 個体程度の細片が存在することから、7 個体前後の須恵器・土師器が墳裾に集め置かれた状況といえる。



第 23 図　東百塚山 20 号墓、63 － 64 号墳出土遺物実測図（S ＝ 1：3）

8 の須恵器高杯は、杯部外面の波状文帯～ 3 条の稜線付近の高い位置にかけて環状把手を片側に付ける。杯部外面中程に低い 3 条の稜を設け、その下に 7 条 1 単位のクシ条工具を用いた波状文を施す。杯部下半は回転ヘラ削り後、軽くナデを施しており、削りのフレッシュな面を残さない。脚部は長方形の透かし孔を 4 方向に設けている。脚端部が丸く肥厚する点は、松江市塚山古墳例にあり、出雲 1 期古段階（TK208 期）の指標とされる。また、上述の環状把手は塚山古墳例では底面近くに付けられているが、本例では杯部側面の高い位置に移行しているように、古い様相を持ちつつも、TK23 的な新しい要素もみえる。（大谷 2003）

7 の須恵器𤭯は、ほぼ完形で口縁部（4 条）と頸部（9 条）にクシ描き波状文を施す。肩部に 3 条の細い沈線を施し、その下方に口縁部波状文を施した工具を用いて刺突文を施している。胴部下半部は回転ヘラ削りで調整されるが、その後軽いナデが施されて、削りのフレッシュな面は消され

ている。口縁端部の段や複合口縁の稜はやや鋭さを欠き丸みを持っている。

9 ～ 11 は、土師器高杯である。いずれも土圧による損壊などで破片化しているが、1/2 以上は残存しており完形近く復元できる。9 は、口縁部径 16.7㎝、高さ 10.8㎝、底径 9.1㎝であり、10、11 についてもほぼ同型同大である。杯下部に稜を持ち、やや内湾気味に外傾し、口縁端部付近で外反に転じる。脚柱部は面取り状となり縦方向の稜線が見える。脚端部は直線的に開いている。

7. 小結

65 号墳～ 63 号墳の墳端に設置したトレンチ土層等の状況から、古墳築造前の地形が南から北に傾斜する尾根であったことが追認できた。そして築造の順番が 65 号→ 64 号→ 63 号墳であり、64 号墳の墓前祭祀行為が TK208 ～ TK23 前後に行われていることが推測された。埋葬主体部を調査していないので築造時期の断定はできないが、中期後半（TK208 ～ 47）の古墳で墳丘裾や周溝内に須恵器、土師器の供献する事例は松江市内でも事例が多い。（仁木 2015）

64 号墳の南墳裾では、須恵器把手付高杯 1、甕 1 と土師器高杯 3 以上が出土しているが須恵器杯身・杯蓋は見られなかった。仁木聡氏によると、供膳形態として土師器高杯が伴うのは TK208 ～ 23 古相がピークで、TK23 新相以降は土師器高杯に替わって須恵器杯身・杯蓋に置き換わる傾向が指摘されるという。64 号墳の築造の定点を 208 ～ TK23 古相とみれば、隣接する 65 号、63 号はそれに相前後する時期に連続的に築造されたとみることが妥当であろう。

65 号墳は一辺 7m、高さ 1m の方墳、64 号墳は一辺 11.5m、高さ 1.6m の方墳、65 号墳は南北 12.5 ×東西 7m、高さ 0.8m の長方形墳である。

8. 東百塚山 71 号墳の調査

71 号墳は 72 号墳の西に隣接する古墳で、東百塚山古墳群の中で 3 基しか確認されていない円墳のうちの 2 基になる。直径 15.5m、高さ 2.4m で北東部に造り出し状の突出部が認められる。周囲の古墳が比較的扁平であるのに対して、腰高な印象が強い古墳でもある。

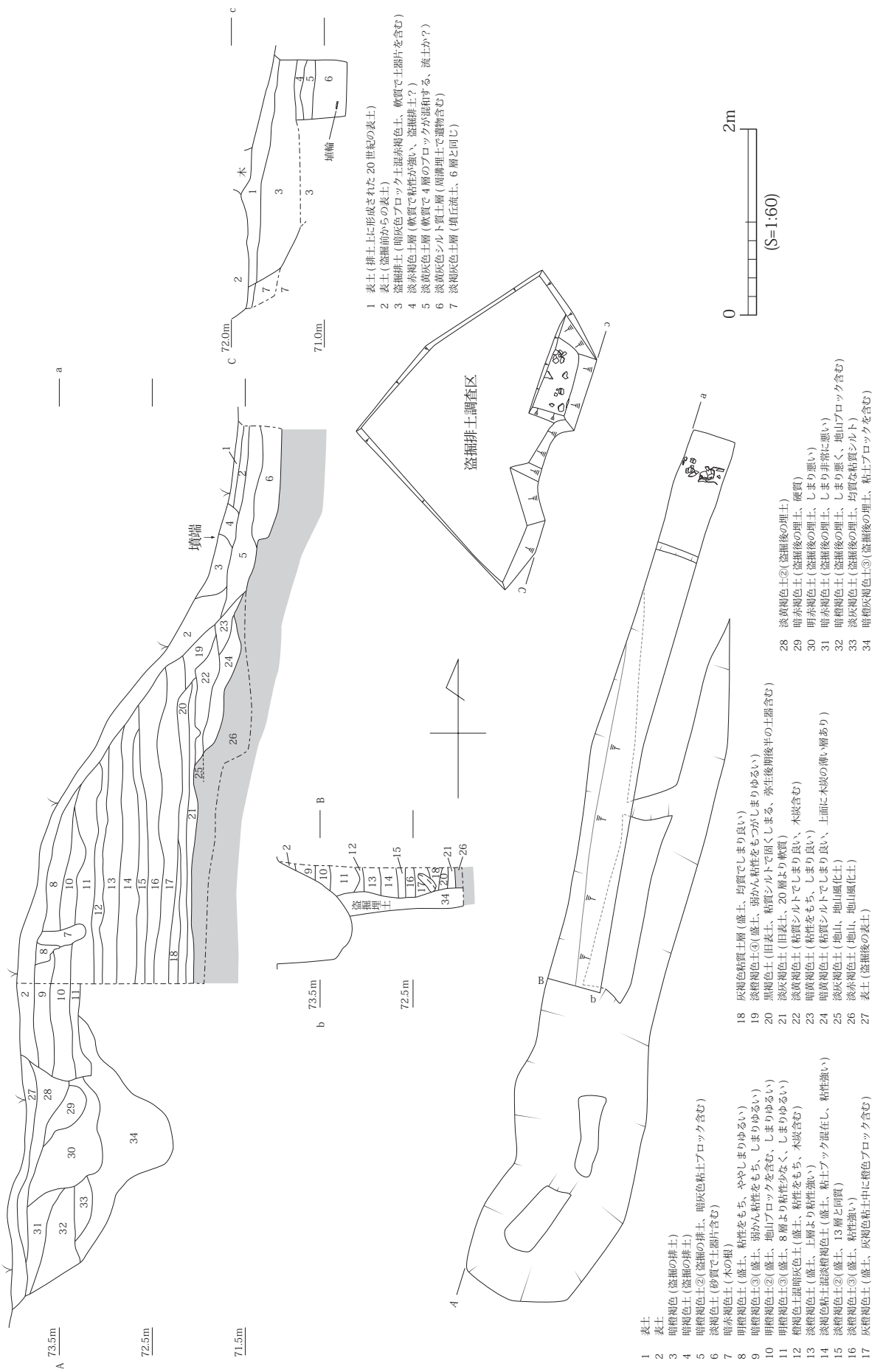
この古墳は、かつて盗掘を受けており、現状でも墳頂部から北側の墳端に向けて溝状の盗掘坑が残っている。島根大学考古学研究室には、この古墳から出土したとされる「鉄製 U 字形鋤先」が保管されている。

今回は、埋葬施設や副葬品の残存状況を確認するために盗掘坑の清掃と一部墳丘の断ち割りを行った。結果的には盗掘が複数回行われており、墳頂平坦面の広い部分に及ぶと想定されたため、盗掘坑の平面プランの確認は行わなかった。

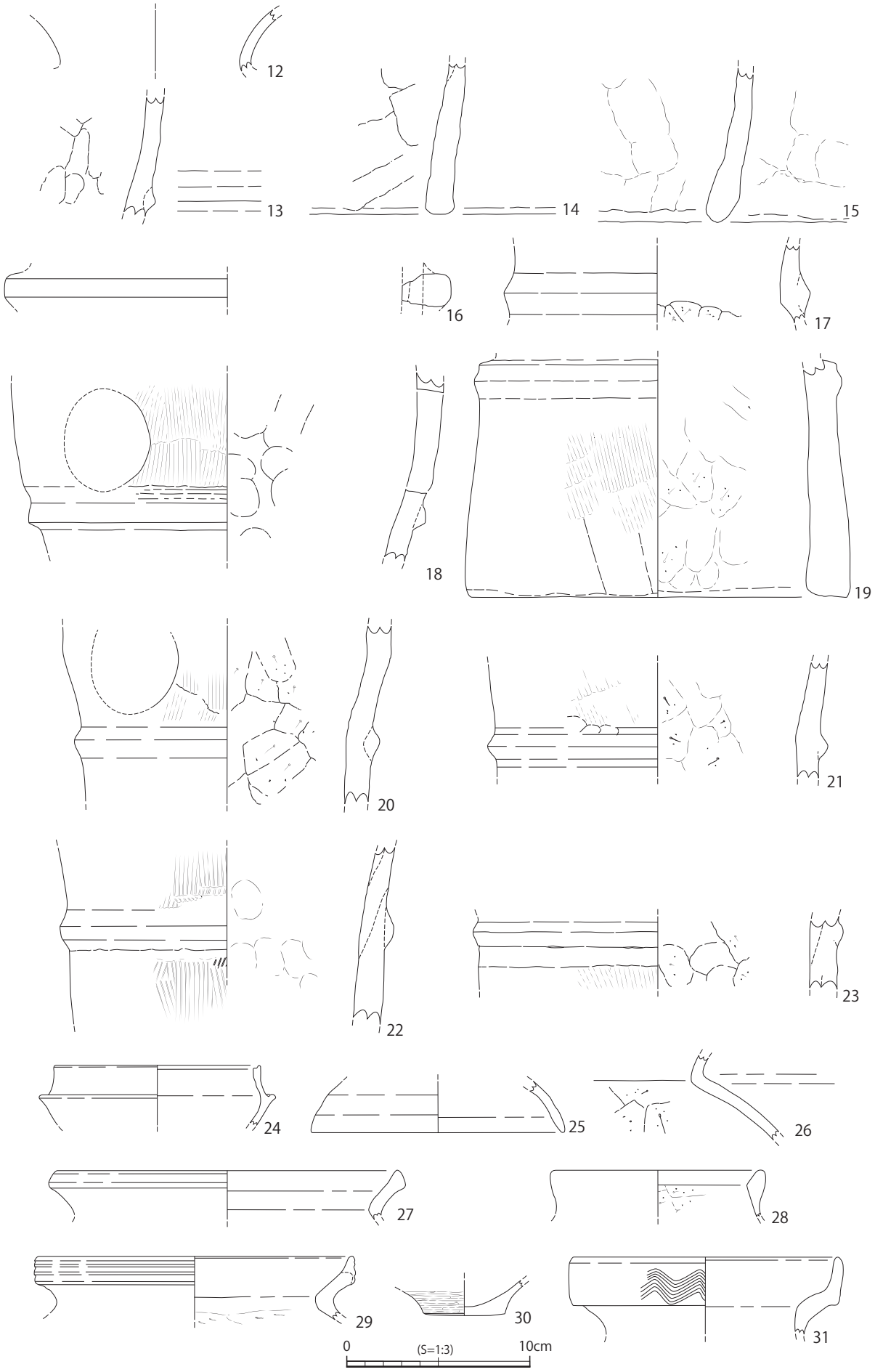
墳頂部から墳丘北側に延びる盗掘坑開口部を利用して、墳丘の断ち割りを行った。この結果、盗掘時の墳丘中央～北側裾の掘削は、墳丘築造前の旧表土層を突破して、いわゆる基盤層までほぼ垂直に達しており、深さ 2m 近くに至るほど徹底したものであることが判明した。

さて、この墳丘断ち割りでは、①墳丘の構築方法と周溝の状況、②墳丘築造以前の地形と遺構、について確認することができた。墳丘の構築方法は、標高 72.5 ～ 72.7m 付近にある旧表土（ブラックバンド）の上に、10 層前後の異なる土層を交互にほぼ水平に積み上げて墳丘を構築している。いわゆる外周土手状の高まりや土嚢状の単位は確認できない。

墳端付近では、旧表土層をカットしていわゆる基盤層（淡赤褐色土）まで掘削して墳丘裾周りを整えている。基盤層は墳丘中央直下付近では標高 72.1m 前後であるが、北側の墳端付近では 71.6m に下がっており、本来の地形も墳丘中央付近を最高所として、周囲に向かって下ってゆく



第 24 図　東百塚山古墳群 71 号墳 Tr 実測図（S = 1：60）



第 25 図　東百塚山 71 号墳出土遺物実測図

地形であると想定される。周溝は、旧表土と基盤層を掘削しており、周溝底部は標高 71.1m 付近まで掘削している。トレンチ内で確認できた周溝の深さは 10 ～ 20㎝程度の浅いものである。周溝底部では円筒埴輪と思われる埴輪が転倒した状態で出土したが、細片化・風化のため本来の形状は確認できなかった。

旧表土は 20・21 層がほぼ水平に堆積しているが、墳丘北端部分では、20・21 層の下位にある 24 層上面に層厚 2㎝ほどの木炭混じりの旧表土層が存在した。20・21 層からは細片ながら弥生時代後期後葉（Ⅴ－ 3）の土器片が出土しており、24 層上面からは弥生時代後期前葉（Ⅴ－ 1）の土器が出土している。このことから旧表土は弥生時代後期の 2 時期の包含層と考えられるほか、24 層は加工段などの遺構内埋土である可能性も考えられた。

9. 盗掘排土の調査

既述の盗掘穴は、北側の墳裾にまで及んでいることから、その排土は墳丘北側裾に集積され小山状を呈していた。今回の調査では、この排土中に含まれる副葬品、埴輪、土器などの遺物の回収も主目的として盗掘排土の調査を行った。また、隣接するトレンチ内で周溝が確認されたため、その延長部分を確認するため、排土直下の深掘りも実施した。

深掘りにより周溝底部では埴輪小片を複数確認した。また、周溝底部の標高は、トレンチ内で 71.1m であったが、北西に 1.5m 離れた盗掘排土直下では標高 70.8m に低下しており、元の自然地形に合わせて墳丘裾や周溝も整えていた可能性が認められた。

10. 遺物

71 号墳出土の埴輪及び土器類は 12 ～ 31 である。このうち、周溝内等で原位置を保って出土したのは 12 の須恵器、13 ～ 16 の埴輪のみである。他は盗掘坑攪乱土や盗掘排土中などからの出土である。当初目的とした埋葬施設に由来する副葬品等は確認できなかった。

弥生土器は、墳丘構築以前の旧表土 20・21 層と 24 層から出土しているものは細片化しており、図化をできなかった。排土中等出土の弥生土器は 27 ～ 30 が後期前葉、31 が後期後葉に帰属するものである。27 は口縁端部側面が面状になるもの、29 は口縁端部側面に 2 条凹線を加えるもので、胴部内面のヘラ削りは頸部付近にまで及んでいる。

30 の甕（もしくは壺）の底部は丁寧に整形されたもので、器壁が薄く、外面には細かな単位のヨコ方向ヘラミガキが施される。中期的な整形・調整技法であるが、胎土中には 1㎜程度の砂粒を多く含むなど後期的な様相も併せ持っている。

31 は後期後葉の複合口縁壺であるが、器壁がやや厚めで口縁部側面には 7 条の波状文を施す稀少な個体である。

須恵器は 12、24、25 である。24 の杯身は墳丘北西側にある造出し状の地点の表面採集品である。口縁端部の段も明瞭であり、TK47 前後のものと推測される。

26 は、土師器甕の肩部破片である。頸部が締まり、肩が張る形状は古墳時代中期末～後期前半の甕形態をよく示している。

埴輪は円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか、形象埴輪と推定される小破片も存在した。いずれも細片化、風化しており、完形時の様子を窺えるものはなかったが円筒埴輪と朝顔形埴輪の可能性があるものについて図化した。

19 は、朝顔形埴輪と推定したものである。基底部は通常の円筒埴輪よりも厚く作られており、

重量を支えるのに適している。

円筒埴輪は 13 ～ 18、20 ～ 23 は円筒埴輪である。全体がわかる個体がなくタガ段数は不明であり、突帯間隔が判明する個体もないが、底径は 20㎝以下の極小型となる。一次調整をタテハケあるいは斜行ハケで行った後、タガを貼り付けてヨコナデ調整を施す断続ナデ技法 A が採用されている。タガの断面形態は、低い三角形状を呈し、高さは 0.5㎝前後である。

円筒・朝顔形埴輪共に出雲地域で須恵器編年出雲 1 期中～新段階に普遍的にみられるカット技法や削りなどの基底部倒立再調整は行われていない。また、タガの断面形が三角形で低いものとなっている点も出雲地域では通例でないなど非出雲的要素が垣間見られる。（山内 2003、大谷 2003、田中 2015）

東百塚山 1 号墳では、底部調整がなく、断面台形のタガを巡らせた円筒埴輪が確認されており、藤永（須賀）編年では 3 期古相、田中編年で中期末とされる。71 号墳の埴輪はこれより一段階後出の藤永編年 3 期新相に位置づけることができよう。（須賀 1997、大谷 1998）

11. 小結

71 号墳の盗掘坑を拡張した断ち割りトレンチの状況から、古墳築造前の地形が墳丘中心付近をピークとして周辺に緩やかに傾斜する地形であったことが追認できた。そして墳丘築造前の弥生時代後期前葉及び後葉の 2 時期に土地利用が行われていることが推測された。土層断面に現れた旧表土とそれに含まれる土器の情報だけであるが、この時期に標高 70m の丘陵上で弥生人が活動したことは明らかである。東百塚山古墳群では、20 号墓が弥生時代後期後葉に築造された四隅突出型墳丘墓であることが確認されたので、弥生時代後期には、大草丘陵の広い範囲にわたって、集落や墓域などとして活用されたことが類推される。

また、墳丘築造前の旧表土中に含まれていたと考えられる弥生土器 31 は口縁部側面に波状文を施す稀少な個体である。片倉愛美氏によればこのような口縁部側面に波状文を施文する壺甕類は出雲地域の平野部では少なく、山間部の奥出雲地域で多く出土するという。大草丘陵は南側が八雲町であり奥出雲地域への出入り口であることを考えれば、当地の弥生人が奥出雲地域との交流を持ったことは十分に考えられる（片倉 1999）。また、東百塚山 20 号墓で吉備系土器が出土していることを勘案すれば、中国山地との交通路が担保され、それを十分に活用して経済的、社会的活動を行っていた集団であると評することができようか。

71 号墳の築造にあたっては、地山の整形により高さ 80㎝前後の基底部を造り出し、その上に 10 層前後にわたって異なる土を水平に盛土している。盛土の高さだけで 1.6m もあって、低墳丘の古墳の多い東百塚山古墳群の中では総墳丘高 2.4m の規模は異色である。

そして、原位置を保つものは少ないものの、円筒埴輪、朝顔形埴輪、須恵器類が認められた。須恵器杯身は TK47 前後の様相を示す。埴輪は須恵質のものを含まず、断面三角形のタガ突帯貼り付けの際に断続ヨコナデ技法を用いる反面、底部のカット技法を行わないなど同時期の在地埴輪である中海系統円筒埴輪群の特徴とは一線を画している。（田中 2017）

71 号墳は、東百塚山古墳群の所在する丘陵の最高所に、中海に面した 65 号墳～ 63 号墳より一時期遅れ、2.4m に及ぶ高い墳丘を持ち、古墳群内に 2 基しかない円墳として築造される。さらに 1 号墳と共に古墳群内では希な埴輪を樹立する古墳であることから、東百塚山古墳群の中でも、盟主的な古墳の一つに数えることができよう。

第３節　まとめ

1. 松江市域における東百塚山 20 号墓の位置づけ

東百塚山 20 号墓の発見により、松江市内で発見された四隅突出型墳丘墓は、14 基となった。出雲市（簸川平野）や安来市（能義平野）では突出部を含まない墳丘規模 30m 以上の大型四隅、同 15 ～ 30m の中型四隅が存在するが、松江市周辺では墳丘規模 15m 以下の小型四隅しか存在しないことが指摘されている。（松本 2003）

今回発見された東百塚山 20 号墓についても、推定墳丘規模は 15.5m × 11m 以上であり、小型四隅と中型四隅の境界に位置するものである。このように、松江市内ではやや墳丘規模が大きいといえるが、従来から知られる簸川平野勢力と安来平野勢力の狭間の小規模勢力群という見方に変更はないであろう。

松本岩雄氏によると、墳丘規模の大型－中型－小型に対応して、貼石・配石構造にも対応関係がみられるとされる（松本 2012）。具体的には、「Ⅰ類は小型・超小型のもののみ、Ⅱ A 類は小型のもののみ、Ⅱ B 類は小型に一部中型がみられ、Ⅱ C 類は中型・大型のみであり、仮に同時期の場合に墳丘規模により階層差が認められるとすれば、石組み類型もそれに準じた傾向を示す」とされる。貼石・配石構造にも墳墓の階層性が顕現していることは、既に周知の事項といえる。

さらに、今回の調査で検出された東百塚山 20 号墓の貼石・列石構造の意味を理解するため、Ⅱ B 類の貼石・配石構造を持つ四隅突出型墳丘墓を再検討してみたい。

2. 貼石・列石の構造

東百塚山 20 号墓の貼石・列石構造は、松本岩雄氏による分類のⅡ B 類である。Ⅱ類は墳丘斜面の貼石に加え、墳裾に敷石や立石を巡らせるものである。その中でⅡ B 類は敷石、立石が一重に巡るものとされている。（松本 2003、2012）

『宮山古墳群の研究』の中で松本氏は、Ⅱ B 類についてはさらに小分類される可能性を指摘及び図示されているが、細分まではなされてはいない。このⅡ B 類の細分については、松江市内の『四隅』を検討する上で有意と考えられるので細分類を試みたい。

なお、四隅突出型墳丘墓の貼石・列石構造は同一の墳丘墓であっても、各辺や各突出部によって構造に偏差がみられることがある。その場合は、その墳墓に施工される最上位の貼石・列石構造にあてはめて検討を進める。

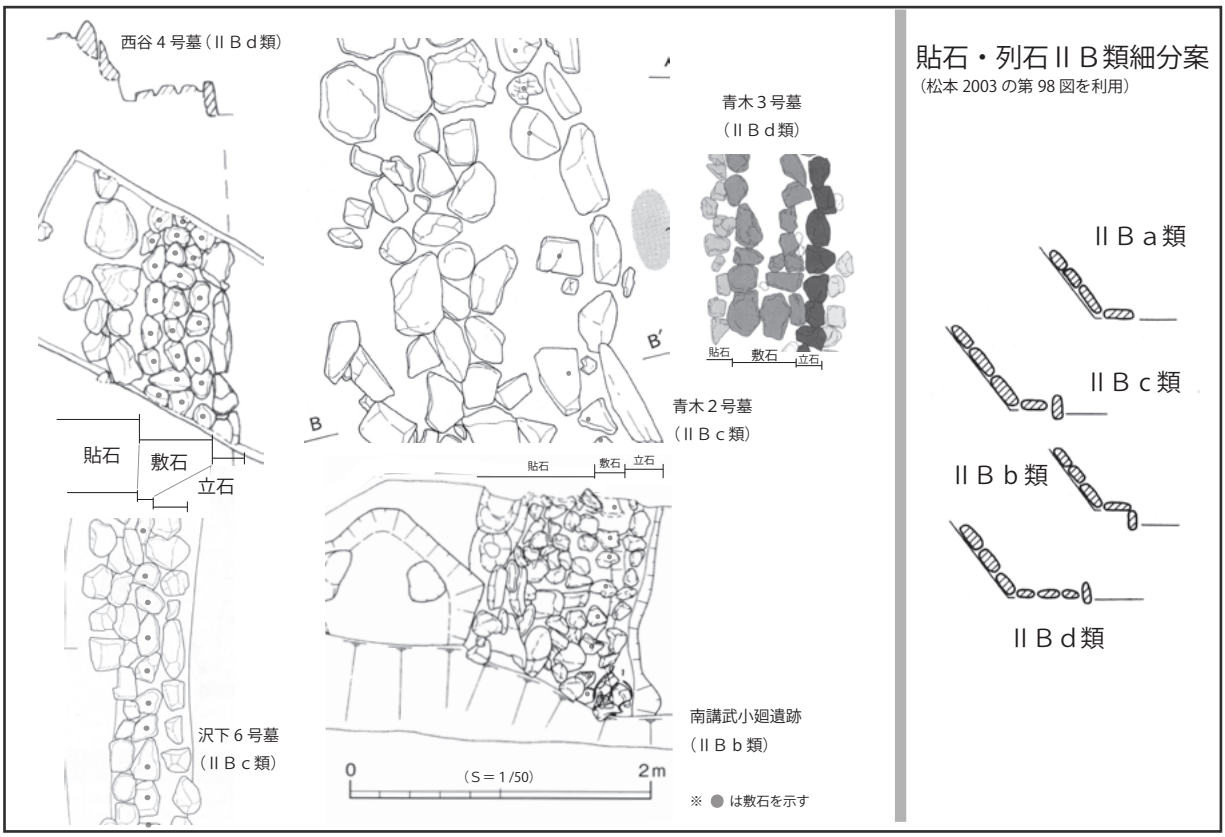
Ⅱ Ba……敷石のみ

Ⅱ Bb……一列敷石＋立石＝段状　　歳ノ神 3 号墓・4 号墓、南講武小廻遺跡、的場墳墓、尾高浅山 1 号墓、佐田谷 1 号墓

Ⅱ Bc……一列敷石＋立石＝溝状　　東百塚山 20 号墓、沢下遺跡 5 号墓、同 6 号墓、青木 2 号墓

Ⅱ Bd……複数列敷石＋立石＝溝状　　安養寺 1 号墓（立石は 2 列）、西谷 1 号墓、西谷 4 号墓、青木 3 号墓（立石は 2 列）

まず、この細分で重要なことは、敷石の部分が一列（Ⅱ Bb、Ⅱ Bc）か、複数列（Ⅱ Bd）になるかである。敷石部分に複数列の石が充填されているⅡ Bd 類は、必然的に敷石部分が幅広で荘重



貼石・列石ⅡＢ類の細分とその実例

第 26 図　貼石・配石構造の類型からみた松江市内の四隅突出型墳丘墓の小地域性

な墳丘装飾となる。このⅡBd類に分類されるのは、出雲市の西谷１号・４号墓、青木３号墓、安来市の安養寺１号墓などであるが松江市内では皆無である。

敷石＋立石が二重以上になるⅡC類に援用すれば、ⅡBb・ⅡBc類のような一列敷石＋立石を重複させるⅡCa類と、ⅡBd類のような複数列敷石＋立石を重複するⅡCb類に細分が可能である。出雲市では西谷２号、３号、９号墓が、安来市では安養寺３号墓がⅡBd類の重複（反復）構造であるⅡCb類となっている。貼石・列石構造に階層差を認めるならば、簸川平野と安来平野にはⅡCb類＞ⅡCa類＞ⅡBd類＞ⅡBb・ⅡBc類の段階的階層性を認めるが、松江市域ではⅡBb・ⅡBc類の段階が最上位となるのである。

これは、後期後葉以降の出雲地域に限定してみれば、墳丘規模ばかりではなく、貼石・列石構造にも明確な階層性が認められることを示している。松江市域の四隅突出型墳丘墓には貼石・列石構造ⅡBb・ⅡBc類の構築しか確認できないことは、出雲・安来両地域に挟まれた松江市域の集団の立場を端的に表しているであろう。

3. 松江市域の四隅突出型墳丘墓の地域性

さて、四隅突出型墳丘墓における貼石・列石構造について、隣接する出雲・安来地域と比較したが、松江市内の四隅突出型墳丘墓の地域性については小型のものが多いことから、これまで触れられることは少なかった。

上述のように、松江市内では一列敷石＋立石を持つⅡBb・ⅡBc類を筆頭として、ⅡA類、Ⅰ類が存在し、貼石・列石構造の示す階層序列を読み取ることができそうである。

ⅡB類……東百塚山20号墓、的場墳墓、沢下５号墓、沢下６号墓、南講武小廻遺跡

ⅡA類……来美１号墓（?）、東城ノ前３号墓

Ⅰ類……布志名大谷１・２・３号墓、間内越１号墓、友田A区墳墓、東城ノ前１・２号墓

このうち、布志名大谷１号墓では、報告書の記述をもとにⅡB類に分類されることもある。これは、墳丘の全周囲が発掘調査されているにも関わらず、墳丘南辺に４石だけ敷石状に平坦に置かれた状況を根拠とすることから、本論ではⅠ類に分類する。

また、墳丘の大半が調査されている友田遺跡A区墳墓は、墳丘周辺に散在する弥生時代前期の配石墓の配石が偶然に「四隅」の墳端に位置するものを誤認した可能性が高い。

さて、このように貼石・列石構造に着目して松江市内に所在する四隅突出型墳丘墓を分類すると各類型の分布状況に明確な偏在性が現れてくる。つまり、大橋川以北の旧島根郡側ではⅡB類が分布し、大橋川以南の中でも意宇川下流に位置する意宇平野に面する地域でⅡB類が分布する。

しかし、両者に挟まれた大橋川南岸の丘陵地帯に造墓された、布志名大谷１・２・３号墓、友田A区墳墓、間内越１号墓、来美１号墓、東城ノ前１・２・３号墓などは貼石・列石構造がⅠ類及びⅡA類でありⅡB類の存在が明確ではない。また、これらの「四隅」からは土器以外の出土品はなく副葬品に乏しい。

このように、貼石･列石構造からは地域性が看取されるが、沢下５号墓（松江市東持田町）では、副葬品としてヒスイ勾玉、碧玉管玉の副葬も見られる。このように、外来系遺物が多く出土し、対外交渉窓口としての機能が強い島根郡側の地政学的に有意な状況が反映されているとみられる。

一方、意宇平野側の集団は、纏まった耕作地に恵まれているうえ、中海～意宇川を通じた交易や、

後背地として存在する山間部との強い関係性などを背景に力を付けつつあったものと想定される。

両者に挟まれた大橋川南岸の丘陵部に居住する集団は、耕作地面積がやや狭く、対外交渉面でも劣位な状況にあったものと考えられる。

これまでの研究史上、松江市内の四隅突出型墳丘墓が脚光を浴びることは少なかった。しかし、県内市町村では最多となる 14 基以上の四隅突出型墳丘墓が確認されており、松江地域の弥生時代後期の地域社会を考える上で重要な資料といえる。特に意宇川下流域では、北岸の的場墳墓に加え、南岸の東百塚山 20 号墓の発見により、古墳時代に繋がる地域形成の過程の中で、弥生時代後期の重要性が改めて確認されたといえるであろう。

東百塚山古墳群の造墓について

東百塚山古墳群には 140 基以上の古墳が築造されているが、今回の調査により造墓の基点となる古墳や、古墳群の小単位について知見が得られた。

従来、北側斜面の標高の低い地点に築造された 1 号墳（TK208 前後）が造墓の基点の一つと目されていた。今回の調査では、丘陵尾根上に立地する 65 号→ 64 号→ 63 号墳が TK208 ～ 23 期の造墓と確認された。さらに平成 26 年度の測量調査では、八雲町側の南斜面で標高の低い地点にやや規模の大きい 137 号墳が確認された。137 号墳は南斜面側での造墓の基点となった可能性が考えられる。

このように、東百塚山古墳群の内部には、丘陵尾根上のグループ、南斜面のグループ、北側斜面のグループがある。さらに北側斜面に築造したグループでは、1 号墳から南へ向かって帯状の空閑地が存在し、東西に群が分離される。

限定的な測量・発掘調査の情報ではあるが、東百塚山古墳群内の小群構成の解明について道筋が示されたことは有意であり、今後の各種調査の進展が期待される。

【参考文献】
片倉愛美 1999「後期弥生土器に見られる地域性について　～出雲市内出土土器を中心として～」『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 9 集　出雲市教育委員会
大谷晃二 2003「古墳群とその時期」、「円筒埴輪基底部再調整の技法復元」『宮山古墳群の研究　島根県古代文化センター調査研究報告書 16』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
大谷晃二 1997「東百塚山 1 号墳」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 12　来美廃寺（山代郷北新造院推定地）』島根県教育委員会
田中　大 2015「出雲地域における中期円筒埴輪の時間的位置づけ」『前方後円墳と東西出雲の成立に関する研究　島根県古代文化センター研究論集第 14 集』島根県古代文化センター
田中　大 2017「出雲・伯耆西部における古墳時代後期後半の異系統円筒埴輪の融合」『考古学研究』第 64 巻第 2 号（通巻 254 号）　考古学研究会
仁木　聡 2015「山陰における初期須恵器資料について－分布傾向を中心に－」『前方後円墳と東西出雲の成立に関する研究　島根県古代文化センター研究論集第 14 集』島根県古代文化センター
松本岩雄 2003「出雲の四隅突出型墓」『宮山古墳群の研究　島根県古代文化センター調査研究報告書 16』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
松本岩雄 2012「集成 四隅突出墓」『松江市史　史料編 2　考古資料』松江市
松本岩雄氏には、四隅突出型墳丘墓に関して有益な助言を賜った。
山内英樹 2003「埴輪研究の現状と課題～「基底部調整」をめぐる諸問題について～」『宮山古墳群の研究　島根県古代文化センター調査研究報告書 16』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター

【挿図出典】
今岡一三・松尾充晶 2006『青木遺跡Ⅱ（弥生～平安時代編）』島根県教育委員会
坂本豊治 2006『西谷墳墓群　－平成 14 年～ 16 年度発掘調査報告書－』出雲市教育委員会
伊藤　智ほか 2008『島根原子力線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 1』島根県教育委員会
赤澤秀則 1986『鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書 1』鹿島町教育委員会

第 5 章　古天神古墳の発掘調査

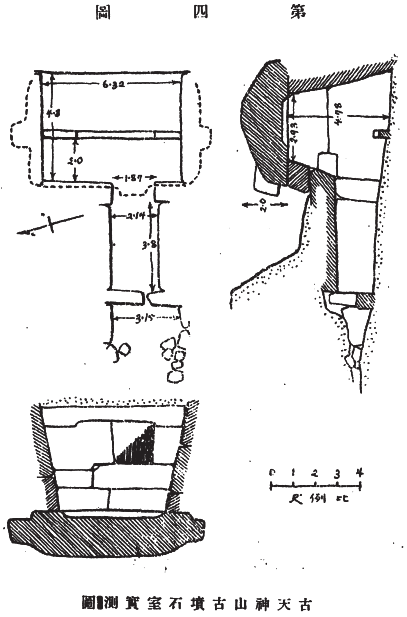
第 1 節　調査及び研究略史

古天神古墳は、松江市の南郊に広がる意宇平野の南側丘陵上に位置する前方後方墳である。

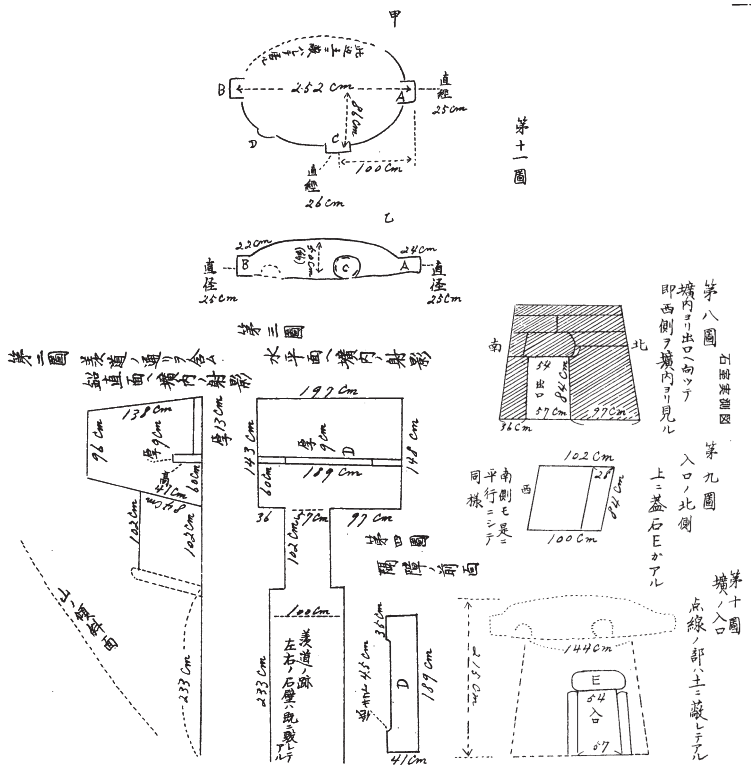
古墳の存在については、その主体部である横穴式石室の開口によって大正年間から知られており、大正 4（1915）年 8 月 22 日発行の『山陰新聞』の記事で「石棺を発掘す」という記事が掲載されている（山陰新聞社 1915）。その記事によれば、大正 4（1915）年 8 月 17 日午後 5 時頃に三島、太田両名が俗に肥松と称するものを採掘中に発見したとあり、「刀身 2 本、土器 16 個、鏡 1 個、金属製環 6 個、鈴様の破片及び刀類の破片」が出土したとされている。発見された翌年の大正 5（1916）年 7 月には蓋石（玄室天井石）は未だ露出し、7 月 27 日には三島氏宅に保管されている出土品を後藤藏四郎が確認している（後藤 1925）。出土品については、東京国立博物館に残る『埋蔵物録』に記録が残されている（時枝 2001）。それによれば、島根県から古墳に係る豊富な挿図が添付された上申書が宮内省に提出され、「悉皆東京帝室博物館ニ差出スヘシ」の指令に基づき寄贈されたことが知られる（渡辺 2013）。出土品の受理次第の日付は大正 7（1918）年 7 月 24 日である（東京国立博物館 1998）。

石室の開口後に喜田貞吉、關保之助の両氏が古墳を訪れており、両氏の談に基づき梅原末治が大

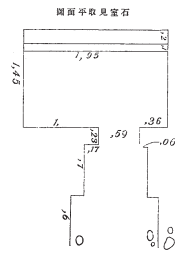
第 27 図　古天神古墳の位置



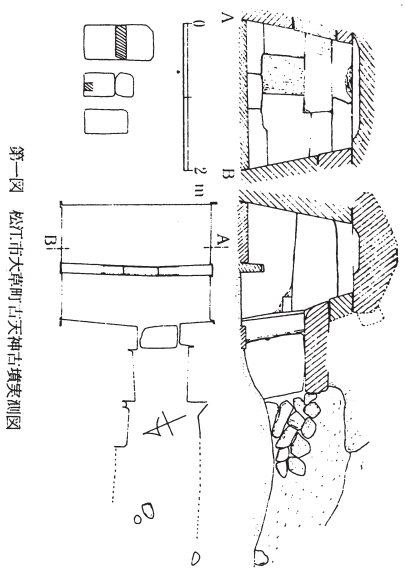
1（梅原 1918 より）



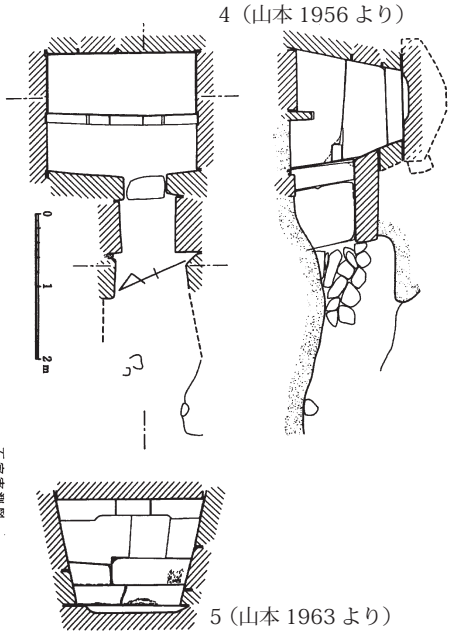
2（後藤 1925 より）



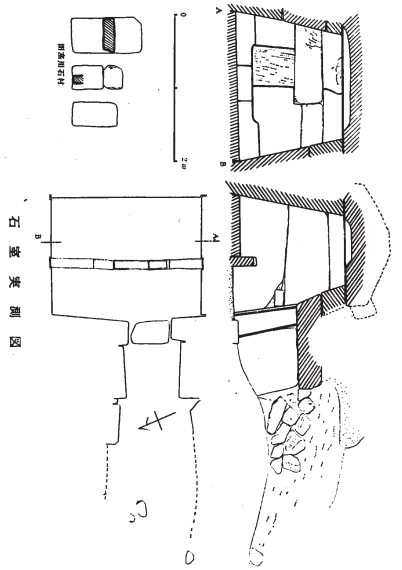
3（野津 1925 より）



4（山本 1956 より）



5（山本 1963 より）



6（山本 1968 より）

第 28 図　各報告の古天神古墳の石室（１）

正 6（1917）年 8 月に古墳の現地調査を実施し、大正 7（1918）年に『考古学雑誌』において本格的な古墳の調査報告がなされた（梅原 1918）。梅原は石室実測図を掲載し（第 28 図 -1）、石室について詳細な説明を行っており、現在では確認できない天井石の形状、二つの切石による閉塞及びその前面の丸石と土による閉塞等の状況は、重要な知見である。また、墳形は「整形なる前方後圓にあらずして眞の瓢形に近く、前方部の如き著しく崩れ直線形をなさず」としている。

梅原報告の翌大正 8（1919）年には梅原に請われた高橋健自が東京帝室博物館に寄贈された出土品（第 31 図 -1）を『考古学雑誌』にて紹介し（高橋 1919）、この段階で古墳についての基本的な情報が概ね報告されたことになる。また、高橋健自は大正 11（1922）年の『古墳と上代文化』においても古天神古墳を挙げ「石棺式石槨」と呼称している点は注目される（高橋 1922）。

島根県では、大正 13（1924）年 6 月に第 1 回史蹟名勝天然記念物調査會が開催され、重要且つ至急保存の要あるものを現地調査することとし、古天神古墳も該当となり調査成果が大正 14（1925）年に報告された（後藤 1925）。この調査では、開口時露出していた石室天井石が土に覆われていたことから、この時に土の大部分を取り除いて確認している。報告では石室（第 28 図 -2）及び墳丘の図が掲載されており、天井石の突起が円形を呈していることが確認される。墳丘については述べられていないが、概略図からは長方形と把握されたものと思われる。

同年に発行された『島根縣史』では多くの古墳が集成され、その中に古天神古墳も石室平面図（第 28 図 -3）と伴に報告されている（野津 1925）。

1951 年には山本清によって墳形が前方後方墳であることが指摘された（山本 1951）。報告では、井上狷介実測の測量図（第 30 図 -1）を掲載し、検討の結果前方後方墳として評価した。そして、同年の須恵器の図化調査成果に基づき、1956 年に新たな石室実測図（第 28 図 -4）と伴に須恵器の実測図（第 31 図 -4）を掲載して、古墳の評価を行っている（山本 1956）。この中で須恵器の時期的な検討を行い、蓋坏を「第 3 段目、或いは 2 段目と 3 段目との中間的な特徴をそなえている」（後に自身の須恵器編年（山本 1960）の「4 期区分の第 3 期」に位置付け）とした。そして古天神古墳のような石棺式石室は出雲地方の横穴式石室の盛行期の中で比較的早い時期から行われていたとしている。また、掲載された石室実測図の中には 3 枚の切石と考えられる実測図も付されており、後の図面（第 28 図 -6）で閉塞用石材であることが確認され、重要な情報を提供している。

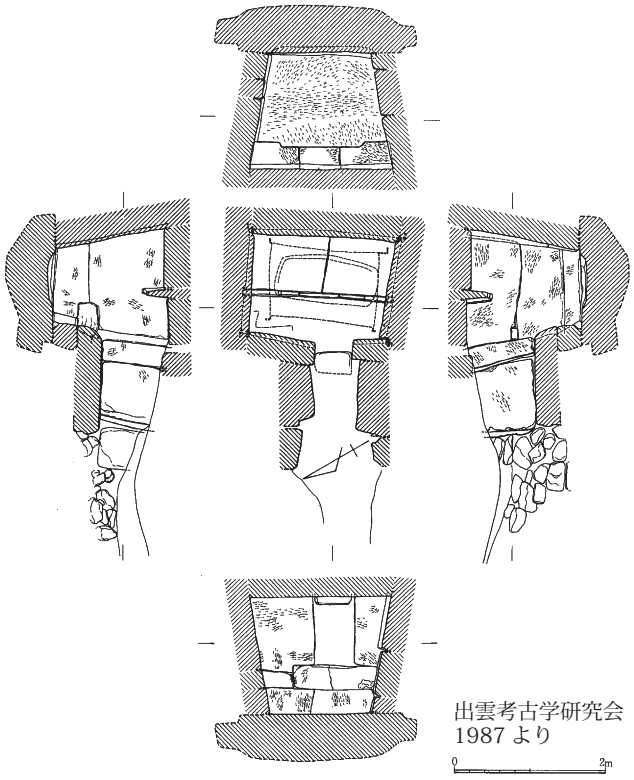
古墳は、前方後方墳という注目すべき墳形であることや、内部構造が良好に保存され、出土品も良く保存され古墳の性格・年代等を考える上で鍵となる重要なものであると評価され、1960 年 9 月 30 日に、島根県教育委員会告示第 14 号により島根県指定史跡となった。

1963 年には、島根県教育委員会によって県内の史蹟の基本的な情報が収録された『島根の文化財』 が刊行され、より詳細な古墳の測量図（第 30 図 -2）、石室実測図（第 28 図 -5）が石室内部写真と出土鏡と伴に掲載されている（島根県教育委員会 1963）。

1964 年には、山本清が山陰地方の石棺式石室を集成し、具体的な検討を行い、その系譜と九州方面との地域交渉について考察した。以降、『新修島根県史』（山本 1968a）、『島根県文化財調査報告』第 4 集（山本 1968b）、『島根県文化財調査報告』第 5 集（山本 1968c）、『出雲の国』（池田・東森 1973）、『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』（山本 1975）等において古墳が取り上げられ紹介されている。このうち『島根県文化財調査報告』第 4 集の中で山本清は、出土品の円頭大刀の現状の実測図（第 31 図 -2）を紹介しており、石室実測に掲載されている切石が閉塞用石材である

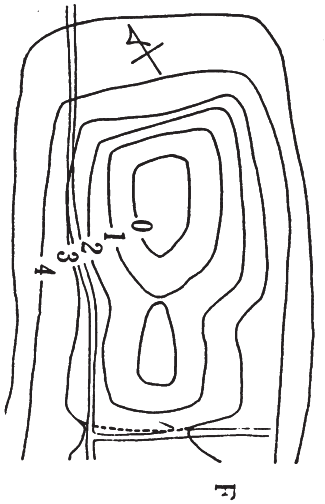
ことが確認される（第 28 図 -6）。

1980 年に小田富士雄は九州以東の地域の初期横穴式石室の導入について検討し、出雲地方の石棺式石室で古天神古墳を初期横穴式石室と位置付け、九州の初出横穴式石室に見られる諸形式が継承されているが、新たに当地での創意が加えられて発展した点に注目した（小田 1980）。1981 年には本村豪章により東京国立博物館に保管されている古墳出土遺物の発見に関わる書類が整理され、その目録によって古天神古墳の開口時の出土品に関わる基礎資料が確認される（本村 1981）。1982 年には池上悟が出雲における石棺式石室をその平面形の使用想定基準尺から分析し、古天神古墳の編年的な位置付けを行った（池上 1982）。また同年刊行の『島根県大百科事典』には古天神古墳の項が設けられ、概要が紹介されており、その中で閉塞状況にあらためて触れ、羨門手前の左右の石材は、閉塞の一部が残存したものとしている（渡辺 1982）。

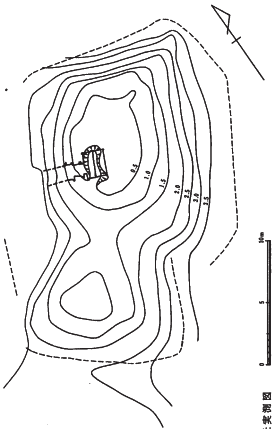


第 29 図　各報告の古天神古墳の石室（2）

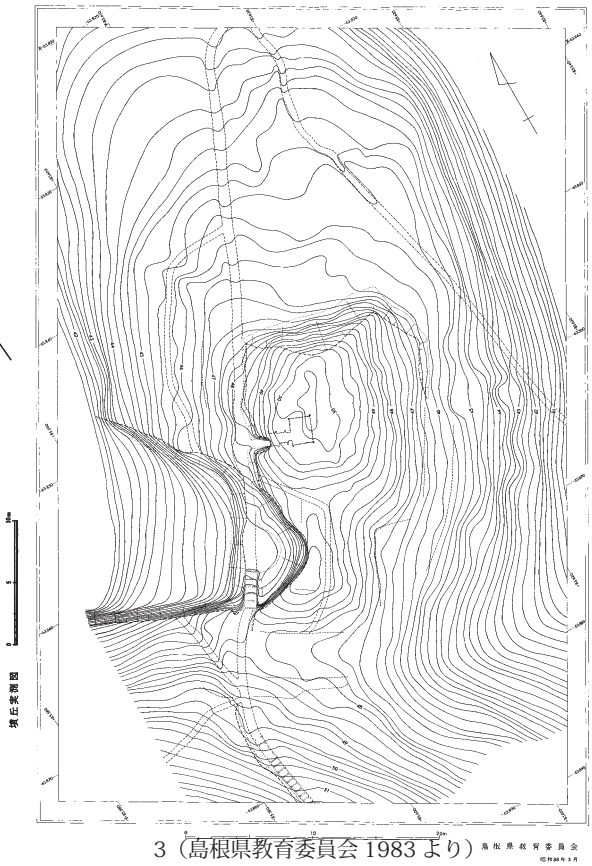
1983 年には、日本測地系の座標値に基づいた詳細な測量調査成果（第 30 図 -3）が報告された（島根県教育委員会 1983）。この調査によって、墳丘の規模等の詳細な検討がなされ、これまでの「やや不整形」とされてきた墳形が、「かなり整った形」であること



1（山本 1951 より）

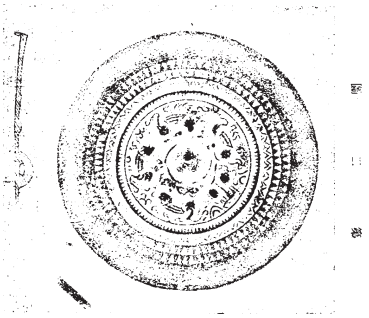


2（山本 1963 より）



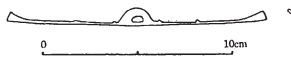
3（島根県教育委員会 1983 より）

第 30 図　各報告の古天神古墳の墳丘測量図

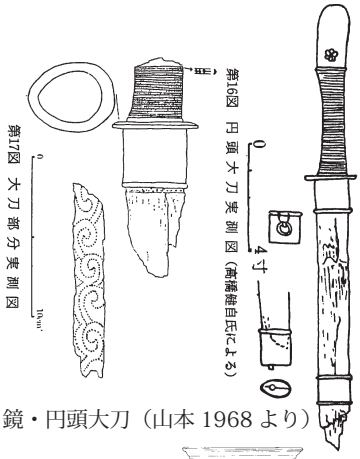


第一図

1. 鏡・円頭大刀（高橋 1919 より）

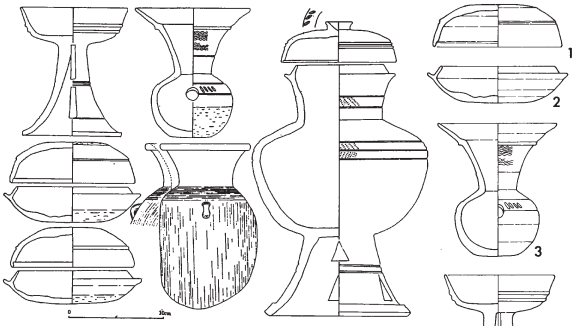


第15図　変形五獣鏡断面図



第16図　円頭大刀実測図（高橋健自氏による）
第17図　大刀部分実測図

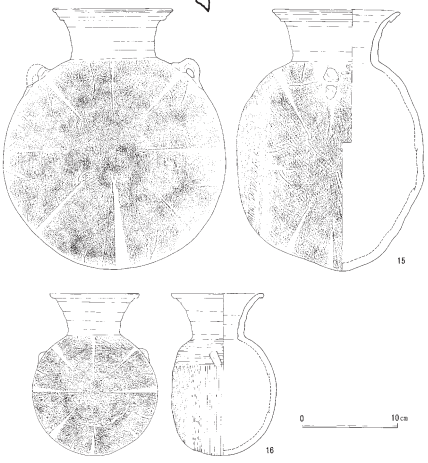
2. 鏡・円頭大刀（山本 1968 より）



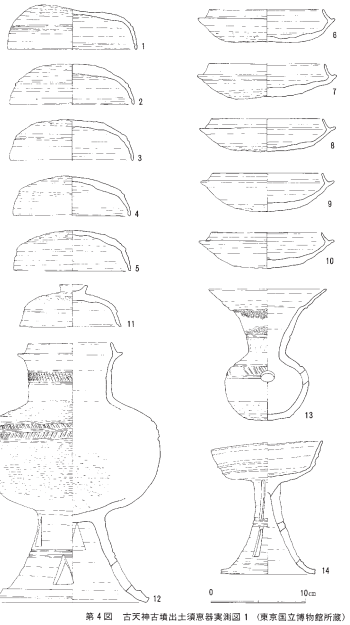
第18図　古天神古墳出土須恵器実測図

4. 須恵器（山本 1956 より）

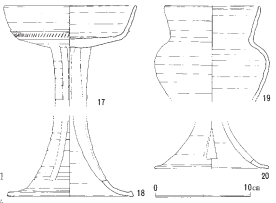
5. 須恵器（池上 1982 より）



第 5 図　古天神出墳出土須恵器実測図 2（東京国立博物館所蔵）

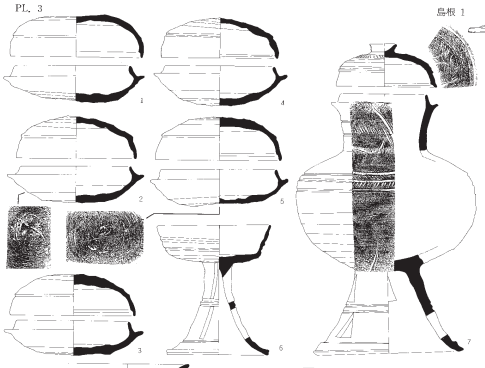


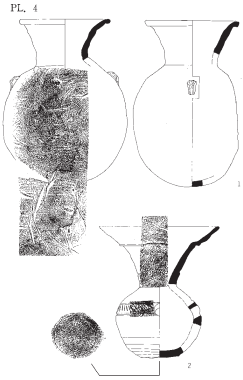
第 4 図　古天神古墳出土須恵器実測図 1（東京国立博物館所蔵）



第 6 図　古天神古墳出土遺物実測図 3

6. 須恵器
（角田 1993 より）





7. 須恵器
（東京国立博物館 1998 より）

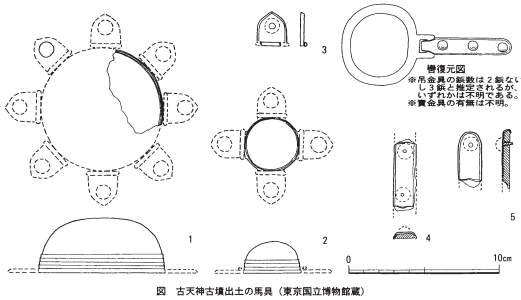


図　古天神古墳出土の馬具（東京国立博物館蔵）

3. 馬具（大谷 1997 より）

第 31 図　各報告の出土遺物実測図

が確認された。また、出土品目について発見当時の新聞記事、高橋健自報文、東京国立博物館の台帳を比較し検討している。1986 年には小田富士雄が古天神古墳と熊本県の宇賀岳（丘岳）古墳の構造にあらためて注目して、出雲地方の石棺式石室の位置付けについて検討した（小田 1986）。

1987 年には、出雲考古学研究会が山陰地方の石棺式石室の図化・集成作業に基づいた総括的な研究成果をまとめた（出雲考古学研究会 1987）。この研究で古天神古墳も他の石室と共に新たに図化された（第 29 図）。この研究は、古墳時代後期における石棺式石室の位置付けを総合的に行ったもので、一つの到達点といえるものである。この中で古天神古墳は、石棺式石室の定型化以前の導入期の石室とされ、4 期に区分された石棺式石室編年の 1 期に位置付けられている。

1991 年には出雲地方の前方後円（方）墳が集成され、古天神古墳は前方後円墳編年の 10 期前半に位置付けられている（渡辺・内田・曳野・松本 1991）。1993 年には角田徳幸が受容期の石棺式石室の須恵器（第 31 図 -6）の検討を行った上で、古天神古墳を石棺式石室の受容時の姿をとどめている古墳とした。また具体的にその系譜を肥後特に宇土半島基部を中心とした地域に求め、その受容の背景についても考察した（角田 1993）。角田は 1995 年にも出雲の後期古墳文化と九州との関連を論じ、古天神古墳について同様の評価をしている（角田 1995）。

1994 年には大谷晃二が 6 世紀代の須恵器を再検討し、これまでの山本清による須恵器編年（山本 1971）3 期の細分を各器種の型式学的検討と共伴関係から整理した。そして、古天神古墳を自身の編年である出雲 3 期に位置付けた（大谷 1994）。さらに大谷は 1996 年には自身の横穴式石室編年の 2-1 期に位置付け、地域型石室の成立段階のものとした（大谷 1996）。また、1997 年には出土馬具（第 31 図 -3）の類例と編年的位置付けについても太谷は検討し、須恵器の編年観も含め古墳の時期を TK43 併行期とした（太谷 1997）。1998 年には、東京国立博物館に所蔵される出土須恵器について実測図（第 31 図 -7）と詳細な解説が公表された（東京国立博物館 1998）。

2008 年、09 年には角田徳幸が石棺式石室を論じる中で受容期の石室として古天神古墳を取り上げ、肥後との関係を改めて強調した（角田 2008、2009）。2012 年には『松江市史』史料編 2 考古資料が刊行され、関連図と伴に古天神古墳も紹介されている。この中の古墳の個別解説において羨道前面の切石や粗雑に積まれた凝灰岩の割石を前庭側壁と見られるとしている（松江市 2012）。2013 年には古天神古墳の開口時の出土品の取扱の経緯について渡辺貞幸が関連図と伴に紹介し検討している（渡辺 2013）。これによると県からの上申書に添付された詳細な図によって当時の状況を知ることができ、渡辺もコメントしているように墳丘が前方後方墳の形状を呈していること、石室の天井石の形態等、注目される情報が確認される。2012、13 年には坂本豊治が導入期の横穴式石室を検討する上で、玄門部の構造に注目し、A・B 類に二つに大別して検討をしている（坂本 2011・2012）。この中で古天神古墳を A 類とし、初源形態に近い構造の石室とした。

近年では岩本崇を代表とする既掘考古資料の再検討と歴史文化遺産の持続的活用を目的としたプロジェクトで、古天神古墳の調査研究が進められている [(1)]。

以上のように古天神古墳は大正時代の開口から現在まで、その墳形、石室構造、出土遺物が詳細に分かることから注目されてきた古墳であり、発掘調査が行われたものではないが、山陰地方の古墳時代後期の研究を行う上で、重要な資料としてこれまで取り上げられてきた古墳である。

(1)　岩本崇氏（島根大学法文学部）御教示。その研究成果は 2018 年に公表される予定。

第２節　発掘調査の成果

1. 古墳の現況

古墳の現況　古天神古墳は松江市大草町杉谷 1169 番地外に所在する。古墳は意宇平野の南側に広がる丘陵の北東方向に派生する尾根上の先端部付近の標高 46 ～ 48m に位置する。眼下には意宇平野を一望することができる。同一丘陵には、古墳時代前期～後期にかけての古墳が多く、出雲地方東部では古墳密度が最も高い丘陵に所在する（第 15 図）。

古墳の保存状況は、近年前方部西側の地滑りが著しく、崩落が進んでいることから、保護対策が必要となっており、今回、事前に法面断面の調査を実施することとなった。

墳丘の形状（第 32 図）　調査・研究史で述べたように、当古墳の測量調査は 1983 年に島根県教育委員会で実施しており、今回の調査は、その墳丘測量図を利用し実施している（島根県教育委員会 1983）。古墳は、丘陵の高所に向かって前方部が付設しており、前方部先端は丘陵から溝状に切り離されている。後方部の北側には平坦面が広がっているが、これはおそらく明治以前に天満宮があったことから、その祠の関連で削平されている可能性が指摘されている。また、前述したように前方部西側が地滑りにより大きく崩落している。

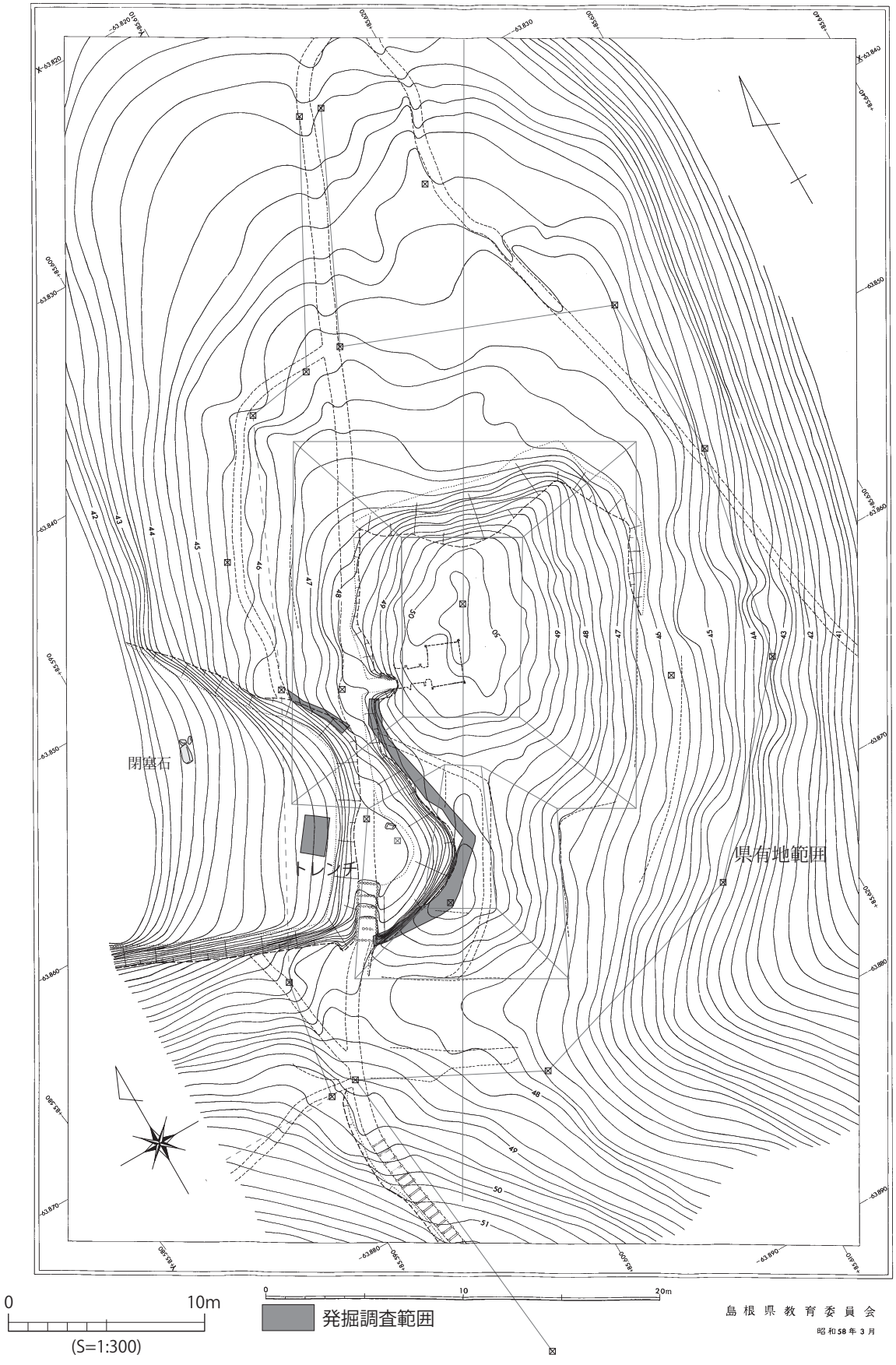
墳丘規模は、1983 年の墳丘測量成果に基づいた検討によると以下のとおりとなる。また、前方部前面には尾根筋から墳丘を切断した溝が確認され、上端幅 5.3m、下端幅 3.6m、深さ 0.5m 程を測り、くびれ部から後方部にかけての墳丘裾部には幅 2.3m 程の平坦面が見られる。

全長 27.0 m　　後方部　南北 18.5m　　東西 17.5m　　高さ 4.0m
前方部　長さ 8.5m　　先端幅 1.0m　　高さ 1.6(3.2)m
前方部平坦面　長さ 7.4m　　くびれ部側幅 2.0m　　前方部側幅 3.6m
くびれ部　　幅 9.5m　　高さ 1.7(2.6) m

以上のように改変はあるが、整った前方後方墳である。現状では段築や葺石は確認されない。

内部構造（第 33 図）　古墳の内部構造は、いわゆる「出雲型」石棺式石室とされている横穴式石室の導入形態である（出雲考古学研究会 1987）。前節で述べたように大正年間に開口しており、その当時の石室については梅原末治が報告している。それによれば、「天井石の純然たる把手を有する石棺の蓋なる點（点）」、「玄室の底部に當り前壁より約二尺を距てゝ一の障塀を置き、室を内外の二區に分てる事なり。」、「隧道部の構造亦注意を惹ける一なり。」とあるように玄室の天井石、玄室内の屍床仕切石、羨道部の閉塞状況の３点を特に注目すべき点であると指摘している（梅原 1918）。このうち天井石の外観形状、閉塞状況は現状では確認できない構造であることから重要な情報である。

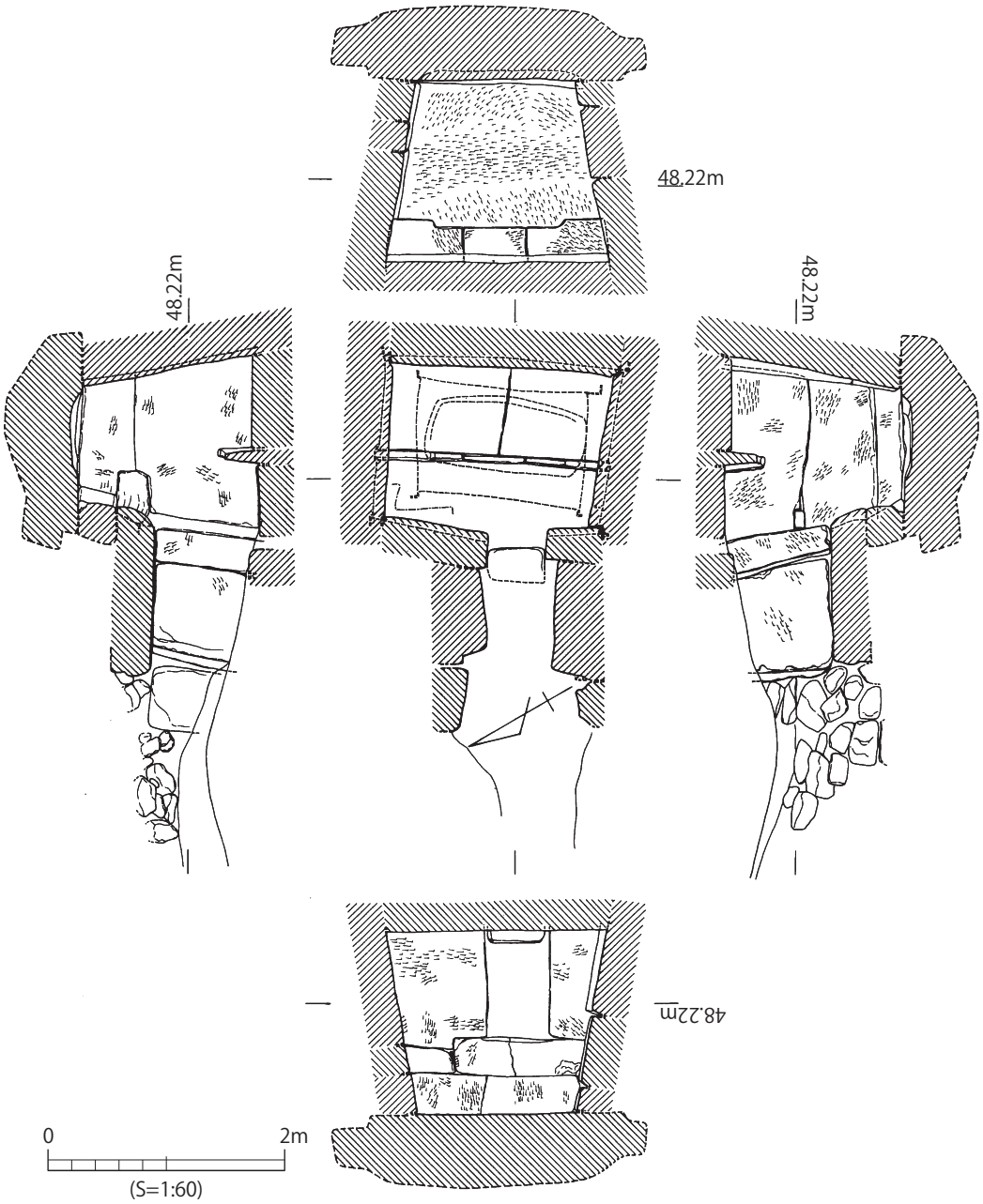
凝灰岩の切石で構築された石室は、後方部のくびれ部寄りに設けられ、概ね西に向いて開口している。玄室は幅 1.9m、奥行 1.5m、高さ 1.5m と幅の広い平面形態である。奥壁と天井石は一枚石で、天井石は内面がカマボコ形に加工され、外面は梅原末治等によれば家形を呈し、少なくとも３方向に縄掛突起があったと考えられる（梅原 1918、後藤 1925）。左側壁は２枚、右側壁は３枚の切石で、前壁は２枚の切石を両側に立てることによって玄門としているが、位置は右側に偏っている。この前壁の玄門を構成する切石の上に羨道天井石が切り組で積まれ、さらにその上に１枚の切石を載せることで各壁の高さが揃えられている。この羨道天井石に並んで載る切石はＬ字



第 32 図　古天神古墳の調査箇所の配置図（※測量図は島根県教育委員会 1983 より）

状に加工され左側壁にも組み合っている。玄室床面には奥壁に平行してＵ字形に刳り込まれた屍床仕切石が設けられている。屍床仕切石は３枚で構成されている。この屍床仕切石をはさんで床石があるが、奥壁の方が7㎝程一段高くなっている。

羨道は両側壁及び天井を１枚の切石で構築し、幅0.5 ～ 0.7m 程である。そして両側壁の前面側の端面には閉塞用の刳り込みが施されている。この部分が、梅原末治の「戸口にありては二個の切石を立てゝ之を閉ぢ、更に其の外側を塞ぐに徑一尺内外の丸石を以てし、土を加へたるものの如し」（梅原 1918）と記述されている閉塞状況にあたるものと考えられる。この前面には、さらに左側に切石が、両側には多くの割石が遺存している。これらについては、前庭部の前庭側壁とみる見解（松江市 2012）もあるが、左側の切石は構築物の可能性はあるが、割石については梅原末治の記述にもあるように閉塞用の割石の可能性もある。現状では土砂に覆われているため不明とせざるを得な



第 33 図　古天神古墳の内部構造実測図（※出雲考古学研究会 1987 より (標高を追加)）

い。

2. 調査箇所と概要

調査は、後方部墳丘西側で地滑りによる崩落が著しく保護工事が予定されている箇所、同じく石室西側下方の法面、保護工事で改変が及ぶ可能性のある後方部西側下方斜面の 3 箇所について実施した。その他に、既存の石室実測図（出雲考古学研究会 1987）に標高を入れる作業等を行い、また、梅原報告（梅原 1918）や山本報告（山本 1968）にある閉塞に使用された板石と思われる石材を前方部西側下方の斜面で確認したことから、上方に引き上げて略測を実施した。

3. 墳丘西側（前方部－後方部）の断面調査

調査の概要（第 32 図）　地滑りにより崩落した墳丘西側について、崩落によって断面が露出している箇所の直線距離で約 13 m程を対象に断面精査を実施した。現状では断面がオーバーハングしている状況であったことから、該当箇所の樹木を伐採後に調査可能な状況にするためにオーバーハング部分を裁ち落として精査した。当初はくびれ部付近までの範囲で行っていたが、調査指導時等の助言に基づいて最終的には後方部の石室開口部まで延長し、断面は大きく 4 面に分割して精査することとした。

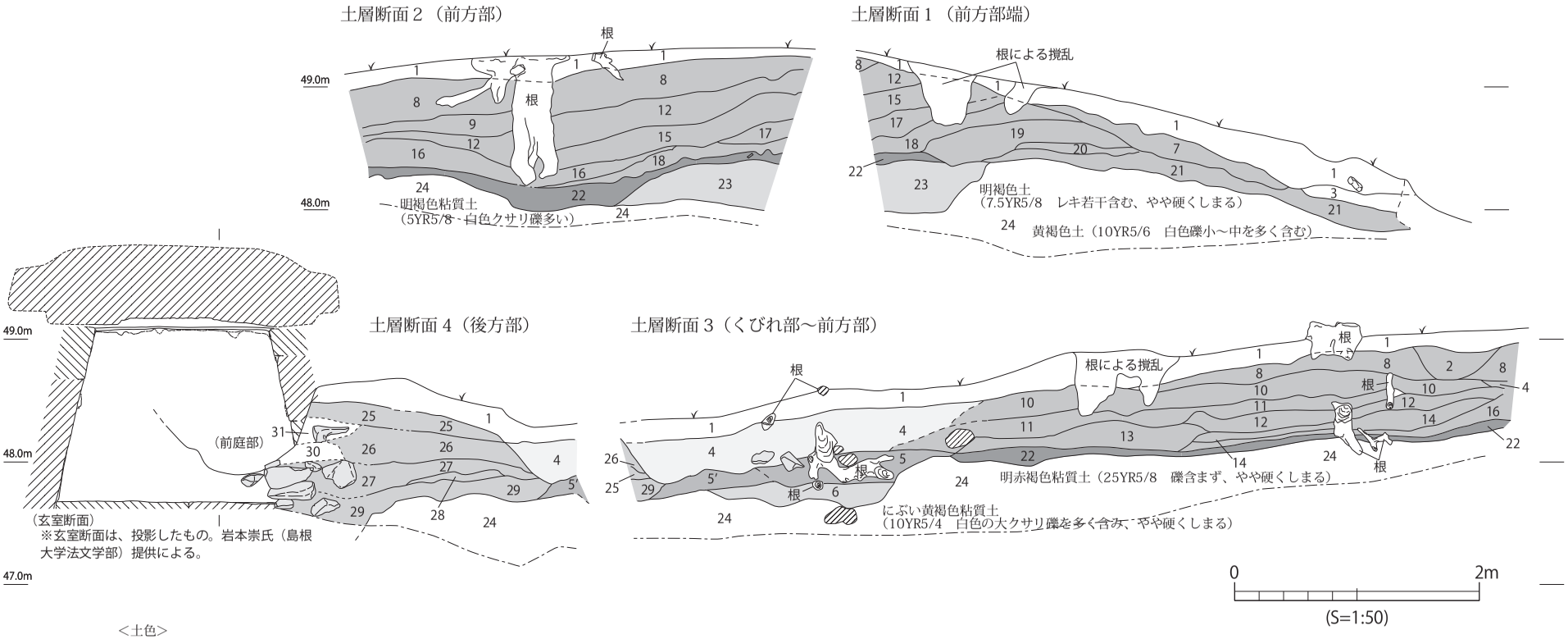
墳丘・盛土（第 34 図）　断面調査の結果、土層は、①流土又は客土（4 層）、②墳丘盛土（7 ～ 21 層）、③前庭部埋土又は盛土（25 ～ 29 層）、④旧表土（5 層、22 層）、⑤古墳築造以前の遺構埋土（6 層、23 層）、⑥地山（24 層）の大きく 6 つに分けることができる。

①流土又は客土は、くびれ部付近に確認され、他の盛土と異なりクサリ礫を殆ど含まないものである。可能性として大正時の石室開口時に関連する土砂であるのかもしれない。②墳丘盛土は、くびれ部付近から前方部にかけて認められる。概ね④旧表土上に確認されるが、前方部先端付近には旧表土は認められないことから、前方部先端部は地山を削りだして整形した後に盛土が施されたものと考えられる。②墳丘盛土は 15 ～ 20 層の状況から前方部先端付近に先に盛土をし、その後にくびれ部付近に向かって充填するように盛土を行っている状況が確認される。

③前庭部埋土又は盛土は、後方部の石室開口部付近で認められる。現状の法面断面の表面を軽く削る程度の調査しかできなかったことから、やや問題は残る点があるが、前庭部付近では割石を含んでいる。この層は、下部に旧表土が無く地山上に載っている点が特徴である。第 35 図及び第 36 図に玄室等の断面図を投影しているが、玄室の床石上面あたりのレベルで地山が削平されていると思われる。おそらく石室構築時等にある程度平滑にした後にこの層が堆積したと考えられる。また、前庭部付近では地山（24 層）が一段さらに下がっていたと思われ、石室の床石の下面あたりのレベルまで石室構築のために削っている可能性も考えられる。

⑤古墳築造以前の遺構埋土としたものは、前方部端から前方部にかけて見られる落ち込みの埋土、くびれ部付近の落ち込み埋土の二つがある。前者は、底面が平坦に近いしっかりと掘られた遺構内の埋土であり、おそらく弥生時代後期と思われる土器小片が含まれていた。遺構の詳細は不明であるが、古天神古墳の南側には四隅突出形墳丘墓が検出されていることから、墓坑である可能性も考えられる。後者は底面が平坦では無い形状の遺構の埋土である。

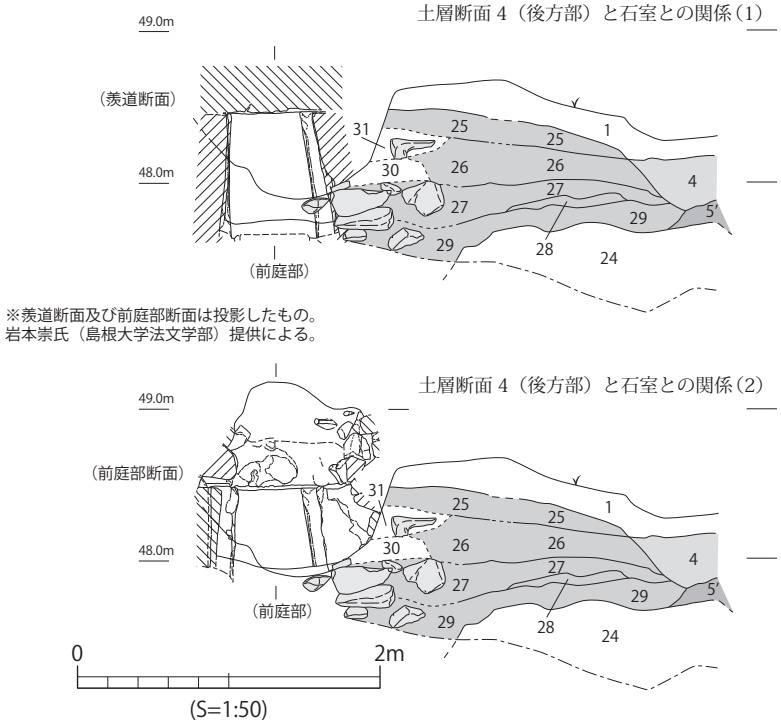
遺物の出土状況　断面調査であったことから、遺物はほとんど出土していない。わずかに旧表土や盛土から弥生土器小片が、くびれ部付近の旧表土から須恵器甕片（第 37 図 2）が出土している。



第 34 図　古天神古墳墳丘土層断面図

＜土色＞

表土　1　褐色粘質土（10YR4/4　やわらかい、礫を含まない）
撹乱？　2　黄褐色粘質土（10YR5/6　白色のクサリ礫小を若干含み、やや硬くしまる）
流土？　3　褐色粘質土（10YR4/6　白～灰色の礫を若干含み、やや硬くしまる）やわらかめ
流土又は客土　4　褐色粘質土（7.5YR4/4　白色のクサリ礫小を少しだけ含み、やわらかい）
旧表土　5　黒褐色粘質土（10YR2/3　白色のクサリ礫小を少しだけ含み、やわらかい）
旧表土か？　5'　黒褐色粘質土（7.5YR2/2　白色のクサリ礫小を少しだけ含み、やわらかい）5 層より暗色系
古い遺構の埋土　6　褐色粘質土（10YR4/4　炭を含み、白色クサリ礫を若干含み、やわらかい、地山と似る）
前方部盛土（7 ～ 21 層）　7　黄褐色粘質土（10YR5/6　白色のクサリ礫小を所々含み、やや硬くしまる）
8　黄褐色粘質土（10YR5/8　白色～灰色のクサリ礫小を多く含み、やや硬くしまる）
9　明褐色粘質土（7.5YR5/8　白色～灰色のクサリ礫中を多く含み、暗色土を所々含む、やや硬くしまる）
10　明赤褐色粘質土（5YR5/6　白色のクサリ礫小を多く含み、やや硬くしまる）
11　褐色粘質土（7.5YR4/3　白色クサリ礫小を若干含み、やわらかい）暗色系
12　明褐色粘質土（7.5YR5/8　暗～灰色クサリ礫小を含み、やわらかい）後方部端は礫ほとんど含まない
13　黄褐色粘質土（10YR5/8　白色のクサリ礫小を多く含み、やや硬くしまる）
14　暗褐色粘質土（7.5YR3/3　褐色土が混在する、クサリ礫若干含み、やわらかい）
15　明褐色粘質土（7.5YR5/6　褐色土との互層状の層、２㎝前後の層厚で互層、クサリ多め、やや硬くしまる）
16　明褐色粘質土（7.5YR5/8　白色クサリ礫を互層状に多く含み、やや硬くしまる）
17　橙色粘質土（7.5YR6/8　白～黄色のクサリ礫を含み、やや硬くしまる）
18　明褐色粘質土（7.5YR5/6　上部は褐色土、白色クサリ礫小を含み、やや硬くしまる）
19　明褐色粘質土（7.5YR5/8　白～橙色クサリ礫を含み、やや硬くしまる）
20　橙色粘質土（7.5YR6/8　白色クサリ礫小を含み、やや硬くしまる）
21　黄褐色粘質土（7.5YR5/6　礫を含まず、やや硬くしまる）
旧表土　22　黒色粘質土（10YR1.7/1　礫を含まず、やや硬くしまる）
古い遺構の埋土　23　明褐色粘質土（7.5YR5/8　白色クサリ礫小を若干含み、やや硬くしまる）
地山　24　明褐色、明赤褐色、にぶい黄褐色土
前庭部埋土か？（25 ～ 29 層）　25　暗褐色粘質土（10YR3/3　白色クサリ礫を少しだけ含み、やわらかい
26　褐色粘質土（10YR4/4　白色クサリ礫を若干含み、やや硬くしまる）
27　暗褐色粘質土（10YR3/3　黄色クサリ礫を含み、やや硬くしまる）
28　褐色砂質土（10YR4/6　礫含まず、やわらかい）
29　黒褐色粘質土（10YR2/3　白色クサリ礫を含み、やわらかい）
石材の抜け痕か　30　黒褐色粘質土（10YR2/3　礫含まず、やわらかい）
石材の抜け痕か　31　褐色粘質土（10YR4/4　白色クサリ礫小を若干含む、橙色土が混在しやや硬くしまる）

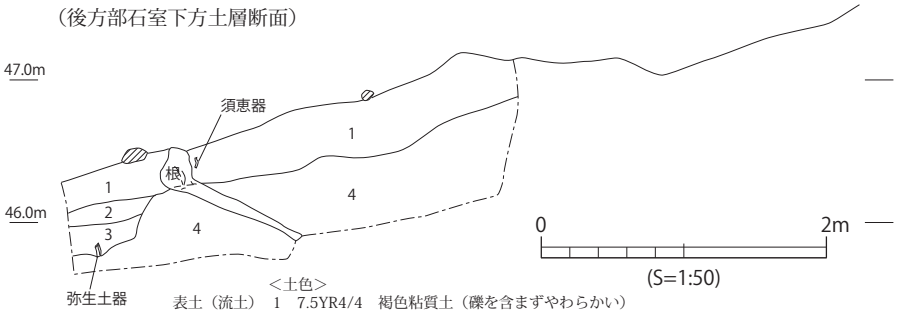


前庭部埋土か？（25 ～ 29 層）
- 25　暗褐色粘質土（10YR3/3　白色クサリ礫を少しだけ含み、やわらかい
- 26　褐色粘質土（10YR4/4　白色クサリ礫を若干含み、やや硬くしまる）
- 27　暗褐色粘質土（10YR3/3　黄色クサリ礫を含み、やや硬くしまる）
- 28　褐色砂質土（10YR4/6　礫含まず、やわらかい）
- 29　黒褐色粘質土（10YR2/3　白色クサリ礫を含み、やわらかい）

石材の抜け痕か　30　黒褐色粘質土（10YR2/3　礫含まず、やわらかい）

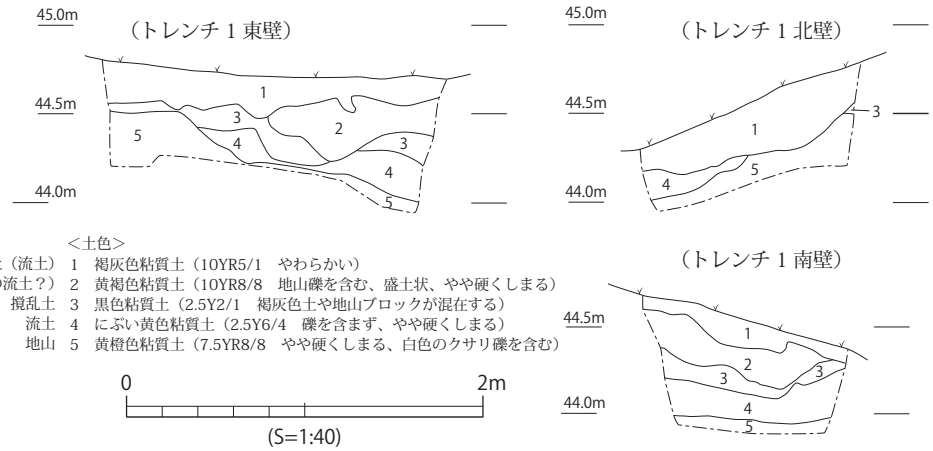
石材の抜け痕か　31　褐色粘質土（10YR4/4　白色クサリ礫小を若干含む、橙色土が混在しやや硬くしまる）

第 35 図　古天神古墳　石室開口部付近土層断面図



＜土色＞

表土（流土）　1　7.5YR4/4　褐色粘質土（礫を含まずやわらかい）
土坑埋土か？　2　7.5YR4/4　褐色粘質土（白色のクサリ礫を若干含み、やわらかい）
土坑埋土か？　3　7.5YR3/4　暗褐色砂質土（白色のクサリ礫を多めに含み、やや硬くしまる）
地山上部　4　7.5YR5/8　明褐色砂質土（白色のクサリ礫を含み、硬くしまる）
〜　〜
下部　7.5YR6/8　橙色砂質土（白色のクサリ礫を含み、硬くしまる）



＜土色＞

表土（流土）　1　褐灰色粘質土（10YR5/1　やわらかい）
撹乱（盛土の流土？）　2　黄褐色粘質土（10YR8/8　地山礫を含む、盛土状、やや硬くしまる）
撹乱土　3　黒色粘質土（2.5Y2/1　褐灰色土や地山ブロックが混在する）
流土　4　にぶい黄色粘質土（2.5Y6/4　礫を含まず、やや硬くしまる）
地山　5　黄橙色粘質土（7.5YR8/8　やや硬くしまる、白色のクサリ礫を含む）

第 36 図　古天神古墳　石室開口部下方及びトレンチ土層図

4. 石室開口部下方の法面調査

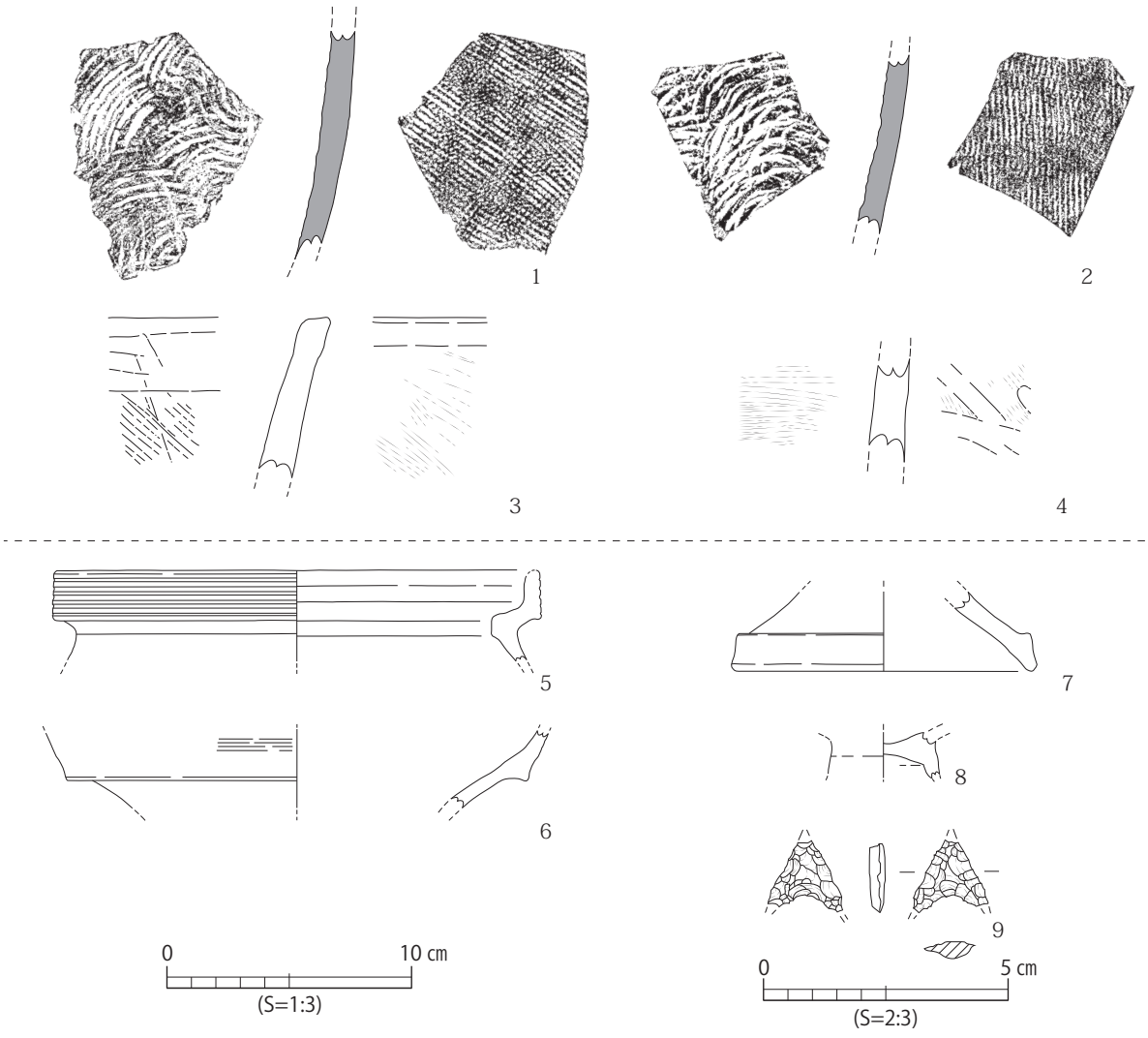
調査の概要（第 32 図）　石室開口部の下方にある法面断面では、墳丘測量図（第 32 図）から想定される、墳丘裾が断面で確認できる可能性があることや、地表面に散乱している割石等の性格が分かる可能性から、この箇所でも土層断面を精査した。

土層断面（第 36 図）　地山（4 層）上で確認された 1 層はクサリ礫を含まない軟らかい層であったことから表土及び流土と判断した。このことによって地表面にも確認される礫は原位置を保っている可能性は低いと判断される。また西側下方端で地山が落ち込む箇所が確認され、2・3 層が堆積していた。この場所は墳丘測量図から後方部西側裾と推測される箇所であることから、墳端を示す可能性もあるが、この場所だけでは判断が難しい。またこの堆積層からは弥生時代後期の土器（第 37 図 5）が出土していることから弥生時代の土坑等の遺構である可能性も考えられる。

5. 前方部西側下方のトレンチ調査

調査の概要（第 32 図）　前方部の西側下方、標高 44.5m 付近の緩斜面に 1.2 × 2 m のトレンチを設定し調査をおこなった。既に地滑りによって大きく地形が変わっている場所ではあるが、古墳に伴う遺物等が流れている可能性を考えて調査した。

土層断面（第 36 図）　地山（５層）上に流土（４層）の堆積が見られた。その上に、地山に含まれるクサリ礫等が混ざる層（2･3 層）が確認されたが、層序が乱れており撹乱の可能性が高い。古



第 37 図　古天神古墳　出土遺物実測図

墳に関わる遺物は出土しなかったが、撹乱土と考えられる層から弥生土器（第 37 図 -6）が出土している。

6. 出土遺物（第 37 図）

須恵器（1・２、写真図版 25・26）　須恵器は甕片と考えらる小片が 4 点出土した。このうち 2 点を図化している。1、2 共に外面に平行タタキ、内面に同心円当具痕が見られる。1 及び非図化の 2 点は表採や表土出土のものである。2 はくびれ部付近の旧表土から出土している。

埴輪（3･4、写真図版 25・26）　埴輪と考えられる破片は 4 点出土しており、そのうち 2 点を図化している。3 は口縁端部の破片で内外面にナナメ方向のハケメが確認され、端部はヨコナデによって仕上げられている。4 は部位が不明な破片で外面にナナメ方向のハケメとヨコナデ、内面に横方向のハケメが見られる。非図化の破片も含めた埴輪 4 点は表土や流土から出土したものである。

弥生土器（5 ～ 7、写真図版 25・26）　古墳に伴わない弥生土器が旧表土・盛土や石室開口部下方の断面から出土しており、7 片出土している。5 は石室開口部下方法面の断面から出土している。複合口縁甕の口縁部小片であり、口縁外面には 5 条の平行沈線文が施されている。6 は器台の受部片と考えられ、外面には平行沈線文がかろうじて確認され、トレンチから出土している。7 は高坏の脚部片と考えられ、前方部のからくびれ部の断面精査時に出土した。5 ～ 7 は概ね弥生時代後期のⅤ -1 ～Ⅴ -2 様式（松本岩雄 1992）に属するものと考えられる。

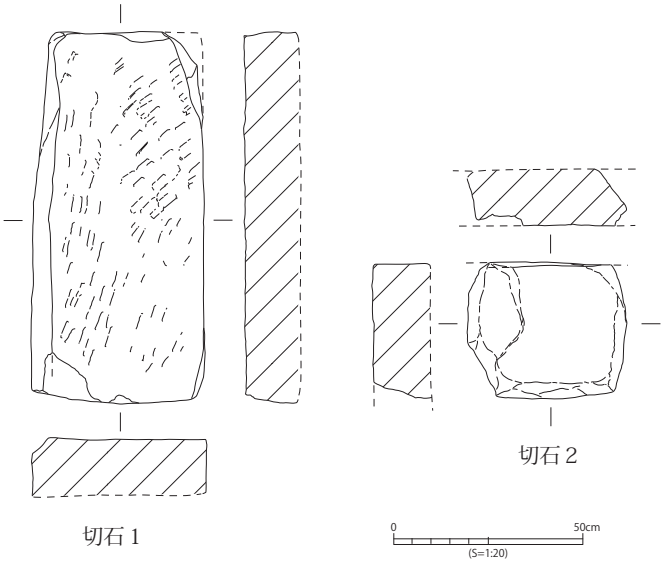
土師器（8、写真図版 25）　石室開口部下方の断面調査時に表土から出土した。高台付の坏の破片と思われる。

石鏃（9､写真図版 26）　先端が欠けた黒曜石製の凹基式の石鏃で､残存長 15㎜､厚さ 03㎜､重量 0.6ｇである。

7. 閉塞石（第 38 図）

石室開口部下方の斜面で 2 枚の切石が確認されたことから略測した。山本報告（山本 1968）の図（第 28 図 6）で閉塞用石材とされている石材に一部該当する可能性がある。

切石 1 としたものは、凝灰岩製の板石で全長 1 m、幅 0.45 m、厚さ 15㎝を測る。山本報告図の最大の石材に該当する可能性があり、羨門部の閉塞にちょうど良い大きさであることから、梅原報告（梅原 1918）の 2 枚の閉塞石の一つに当たるとすれば、羨門部の閉塞石と考えられる。切石２は、欠けており全体は不明であるが、現状で長さ 0.4m、幅 0.45 m、厚さ 15㎝である。山本報告図で二個の石材で表現されたものがあり、それに該当するのかもしれない。



第 38 図　古天神古墳　石材（閉塞石）略測図

第３節　小結

1. 調査知見のまとめ

当古墳の調査は、崩落した断面精査のみであったことや遺物も少ないことから、これまで評価されてきた古墳の年代や性格について新たな知見は得られていないが、発掘調査で明らかになったことを次に簡単にまとめておく。

①墳丘構築法について

前方部先端付近及び石室構築部分については、地山を削り出して整形している。前方部先端付近は上方の尾根と切断する溝の掘削と同時に地山を整形している可能性が考えられる。

石室構築部分は、ある程度の平坦面を作り出している可能性があり、石室石材を構築する部分はさらに一段下げている可能性がある。

墳丘は基本的に盛土が施されて完成していることが確認された。また、盛土は前方部端を先に盛り上げてくびれ部方向に充填するような構築がなされてる。

②古墳に伴う遺物の確認

出土した埴輪は、少量であるが、これまで伝えられてきたように、古墳には埴輪が伴っている可能性が考えられる。また、須恵器は、甕片のみであり、良好な出土位置が確認出来たものは僅かであることから判断できないが、1 点出土した旧表土のものは、墳丘構築段階の何らかの行為に伴う可能性もあるが、点数が少なく詳細は分からない。

③閉塞用石材の再確認

山本清の報告で既に閉塞用石材として実測図が紹介されている石材（山本 1968 ）と思われる切石を墳丘西側下方斜面で確認した。これらを斜面上方に引き上げて略測した。そのサイズからおそらく山本報告にある石材の一部と思われ、少なくとも完形に近い一枚は梅原報告（梅原 1918）の記述にある 2 枚の切石のうちの一枚である可能性が考えられる。

④古墳築造以前の弥生時代の遺構の確認

出土した弥生土器は僅かであり、時期が特定出来るものは少ないが、前方部直下、石室開口部西側斜面には、何らかの弥生時代の遺構が存在していると考えられる。古墳の南側背後には四隅突出型墳丘墓（東百塚山 20 号）も存在していることから、その時期の墳墓に関連する遺構の可能性も考えられる。

以上簡単ではあるが、今回得られた僅かな知見をまとめた。

なお、今回の調査では、課題点も残っており、それは、前庭部の両側に残る割石積である。

前庭部前面に残る土砂の断面を簡単に精査したが、この土層や含まれた割石の性格は明らかにできなかった。当初は前庭側壁の石積み構築物の可能性も考えて、土砂も控えの盛土の可能性も考えたが、割石積みの状況が構築物とは考えがたいとの指摘 (1) や梅原報告による閉塞構造の記述（梅原 1918）等もあることから、明確に判断することは難しいと考えた。

今後の課題としたい。

（1） 岩本崇氏（島根大学法文学部）より割石の構造がその現状から梅原報告にある閉塞構造の可能性が高い旨ご教示いただいた。

第 39 図　古天神古墳　調査後墳丘測量図及び土層断面見通し図

2. 墳丘の構築及び築造年代について

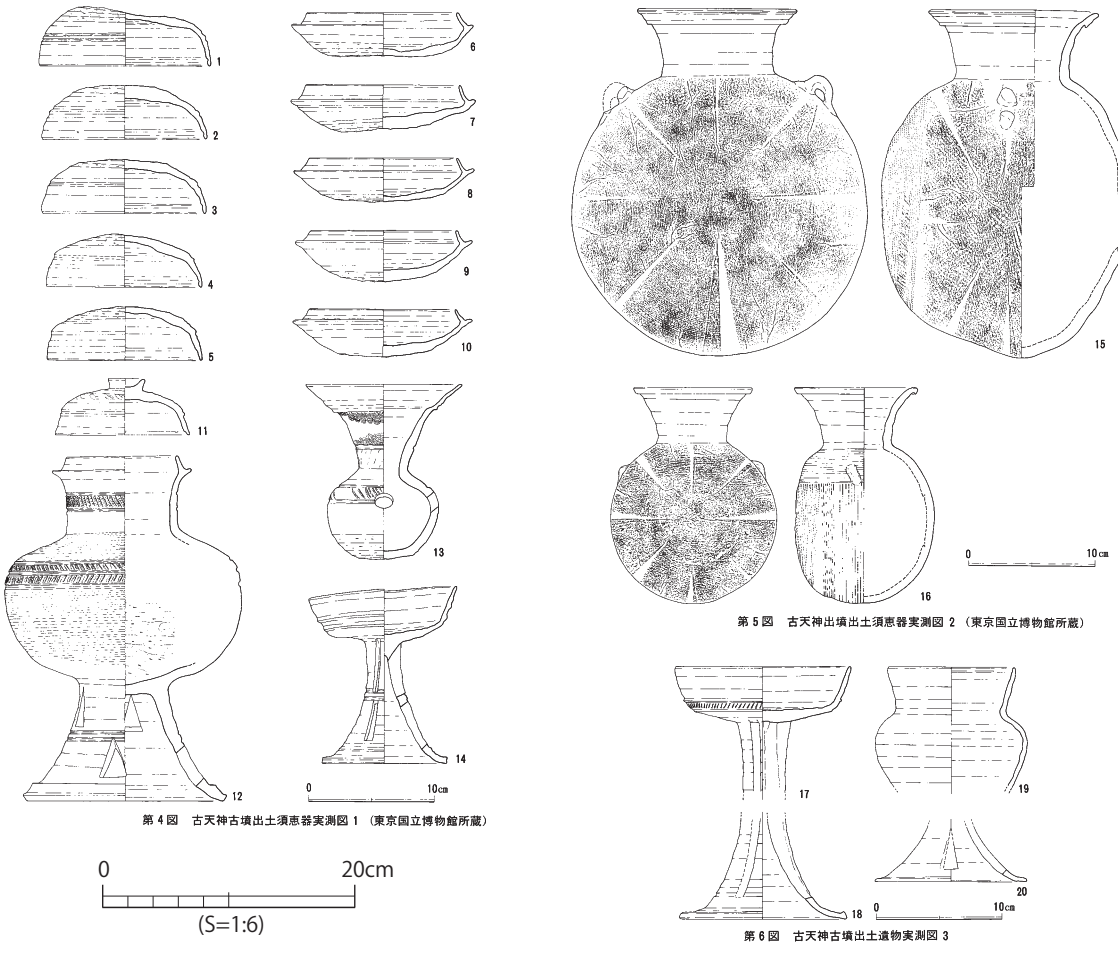
墳丘の構築　僅かながら確認された土層から墳丘構築法をあらためて整理しておきたい。墳丘構築については、既に測量調査成果の段階で、今回断面精査をおこなった墳丘崩落面の観察から検討されている（島根県 1983）。今回の精査によって多少ではあるが、修正すべき点について整理しておきたい。

墳丘は、背後の丘陵から切り離すために、前方部先端付近は旧表土を削り整形されるが、くびれ部付近までは旧表土が残ることから、少なくとも墳丘主軸付近は自然地形のままと思われる。

その後、盛土が施され完成するが、現状では前方部付近からくびれ部に向けて充填するように土が盛られている可能性が考えられる。後方部の石室構築部周辺は、平坦に整形される。さらに石室を構築する部分はさらに 1 段掘り下げられている可能性が考えられる。

以前の想定されていた墳丘構築法では、後方部の石室が地表の上に構築されている可能性が推測されていた（島根県教育委員会 1983）が、今回の調査結果からは、ある程度削平されている可能性が考えられる。なお、前方部東西裾、後方部北側の状況については不明である。

古墳の墳丘構築法については、近年研究が進められてきており、全国的には青木敬の検討があり（青木 2013 等）、出雲の後期古墳では角田徳幸が一次墳丘、二次墳丘の指摘等よる研究成果がある（角田 2005）。今回は部分的な調査であり、検討可能な材料が揃わない状況であることから、積極的な評価は難しいと考えられる。今後の課題としておきたい。



第 40 図　古天神古墳　出土須恵器実測図（角田 1993 より）

築造年代　築造年代については、今回の調査ではこれまで発見されている出土品以上の情報をもつ遺物は発見されていないことから、新たな検討は難しいところである。

出土須恵器（第 40 図）のこれまでの編年的位置付け等の先学の検討を踏まえると、従来どおり大谷晃二の須恵器編年（大谷 1994・2001）による出雲 3 期として差し支えないと考える。

〈参考文献〉

青木敬 2013「古墳の墳丘構造」『考古学ジャーナル』No. 644、ニューサイエンス社
池上悟 1982「出雲における切石使用横穴式石室の一類型について - 所謂 " 石棺式石室 " の再検討 -」『考古学研究室彙報』立正大学文学部考古学研究室
池田満雄・東森市良 1973「八 方形墳の伝統 - 意宇の勢力 -」『出雲の国』学生社
出雲考古学研究会 1987『石棺式石室の研究』出雲考古学研究会
梅原末治 1918「出雲に於ける特殊古墳 (上)」『考古学雑誌』第 9 巻第 3 號、考古学会
大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集、島根考古学会
大谷晃二 1996「出雲東部の横穴式石室 」『山陰の横穴式石室 - 地域性と編年の再検討』第 24 回山陰考古学研究集会
大谷晃二 1997「松江市古天神古墳出土の馬具」『八雲立つ風土記の丘』№ 144、島根県立八雲立つ風土記の丘
大谷晃二 2001「附編 1 上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』島根県平田市教育委員会
小田富士雄 1980「 横穴式石室の導入とその源流」『東アジア世界における日本古代史講座』4、学生社
小田富士雄 1986「島根県の九州系初期横穴式石室再考」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会
角田徳幸 1993「石棺式石室の系譜」『島根考古学会誌』第 10 集、島根考古学会
角田徳幸 1993「出雲の後期古墳文化と九州」『風土記の考古学』3、同成社
角田徳幸 2005「出雲における後期古墳の墳丘構造」『島根考古学会誌』第 22 集、島根考古学会
後藤蔵四郎 1925「 古天神の古墳」『島根縣史蹟名勝記念物調査報告』第 2 回 (回)、島根縣内務部学務課
坂本豊治 2012「第 7 章総括 第 1 節横穴式石室の玄門構造からみた中村 1 号墳」『中村 1 号墳』出雲市教育委員会
坂本豊治 2013「山陰 - 横穴式石室の導入と展開 -」『横穴式石室の導入と展開』 中四国前方後円墳研究会 第 16 回研究集会実行委委員会
山陰新聞社 1915 年「記事「石棺を発掘す」『山陰新聞』山陰新聞社
島根県教育委員会 1983「付載．古天神古墳測量調査」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』Ⅱ、島根県教育委員会
高橋健自 1919「出雲國八束郡大草古天神古墳發掘遺物」『考古学雑誌』第 9 巻第 5 號、考古学会
高橋健自 1922「第 4 章石棺陶棺及び甕棺」『古墳と上代文化』高橋健自
東京国立博物館 1998「島根県 10 松江市大草町杉谷 古天神古墳」『東京国立博物館所蔵須恵器集成Ⅲ（西日本篇）』、東京国立博物館
時枝務 2001「近代国家と考古学−『埋蔵物録』の考古学史的研究−」『東京国立博物館紀要』第 36 号
野津左馬之助 1925「第 11 八束郡大庭村大字大草字古天神古墳」『島根縣史』4 古墳、島根縣
松江市 2012「 第 4 章古墳時代、第 8 章考古資料集成」『松江市史』資料編 2 考古資料、松江市
松本岩雄 1992「7 出雲・隠伎地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』
本村豪章 1981「古墳時代の基礎研究稿 - 資料篇 (Ⅰ)-」『東京国立博物館紀要』第 16 号、東京国立博物館
山本清 1951「 出雲国における方形墳と前方後方墳について」『島根大学論集 (人文科学)』1 号、島根大学
山本清 1956「 須恵器より見たる出雲地方石棺式石室の時期について」『島根大学論集 (人文科学)』6 号、島根大学
山本清 1960「山陰の須恵器」『島根大学論集（人文科学)』第 9 号
山本清 1964「 古墳の地域的特色とその交渉 - 山陰の石棺式石室を中心として -」『山陰文化研究紀要』第 5 号、島根大学
山本清 1968「 第 2 部古代 第 2 章古墳文化」『新修島根県史』通史篇 1、島根県
山本清 1968「 古墳（12 古天神古墳)」『島根県文化財調査報告書』第 4 集、島根県教育委員会
山本清 1968「古墳（12 古天神古墳)」『島根県文化財調査報告書』第 5 集、島根県教育委員会
山本清 1975「古墳（未発掘古墳)」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会
山本清・池田満雄・近藤正・東森市良 1963『古天神古墳』『島根の文化財』第 3 集、島根県教育委員会
渡辺貞幸 1982「古天神古墳」『島根県大百科事典』下巻、山陰中央新報社
渡辺貞幸 2013「政府に報告された市内発見の古墳－『埋蔵物録』にみる松江の近代考古学－」『松江市歴史叢書 6 松江市史研究』4 号、松江市教育委員会
渡辺貞幸・内田律雄・曳野律夫・松本岩雄 1991「第 3 章　出雲」『前方後円墳集成 中国・四国編』近藤義郎 編、山川出版社

第６章　安部谷古墳群の測量調査

第１節　調査の経緯

島根県古代文化センターと島根県埋蔵文化財調査センターでは、平成８年度より考古資料基礎調査研究（墓制調査）事業の一環として、県内の主要古墳の測量・発掘調査を継続的に実施してきている。安部谷古墳群は古代出雲の中心地である意宇平野南縁の松江市大草町から春日町にかけて所在する古墳群であり、県内最大の古墳群である大草丘陵古墳群の一角を構成している。

当古墳群は国指定史跡安部谷古墳の所在する丘陵尾根上に立地する。その存在は古くから知られていたが、古墳の数や規模、また築造年代については全く不明のままであった。現在県教育委員会では大草丘陵古墳群の国指定史跡を目指して古墳群全容のための調査を行っており、今回の測量調査はその一環として実施したものである。

第２節　調査の経過

測量調査は平成 25 年 5 月 23 日から着手した。測量は丘陵尾根上の最も低い北側の 1 号墳から着手し、順に丘陵尾根上に向かって測量を進めていった。調査範囲は雑木・シダ類のブッシュがひどく、踏査のみでは古墳の有無や規模が確認できなかったため、順次伐採を行い、測量を行ったものから古墳番号を振っている。最終的には今回の測量範囲内では９基の古墳を確認し、測量を実施した。測量作業はトータルステーションにより国土座標値を計測し、手書きでマイラーに測点を記入し図化作業を行った。縮尺は 1/100、コンターは 25㎝間隔である。

第 41 図　安部谷古墳群測量調査伐採風景

調査員は初日のみは 4 名体制で実施したが、それ以外は基本的に 2 名体制で伐開・測量を断続的に実施した。このため調査は遅々として進まなかったが、調査後半には隣接する古天神古墳で発掘調査中の調査班の作業員から、伐開・片付け作業の応援を受け、これによって作業は飛躍的に進捗した。7 月 4 日には島根大学法文学部岩本崇准教授、松江北高等学校大谷晃二教諭より、また 7 月 11 日には出雲弥生の森博物館渡辺貞幸館長・島根大学法文学部大橋泰夫教授より、それぞれ調査指導を受けた。7 月 19 日にはすべての作業を終了した。

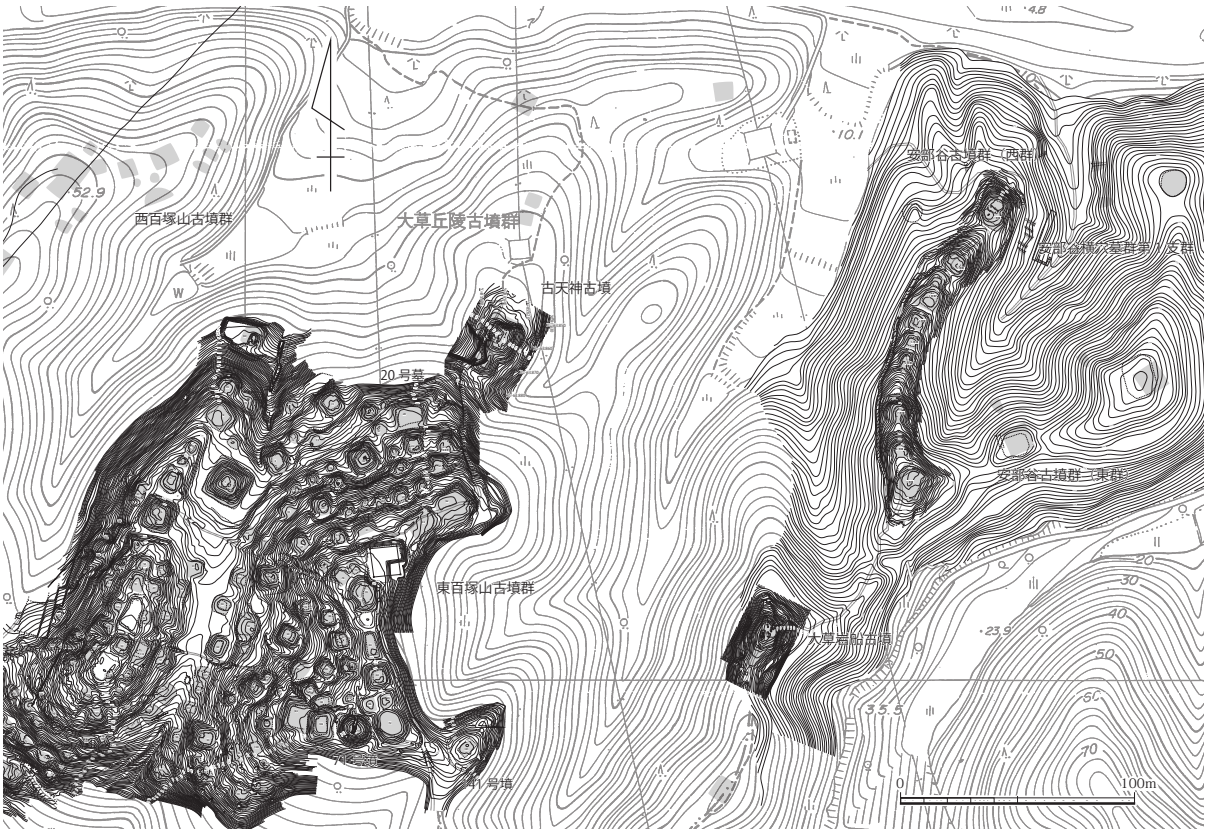
第 42 図　安部谷 9 号墳より茶臼山を望む

第 3 節　遺跡の位置と環境

安部谷古墳群は意宇平野南縁に東西に延びる大草丘陵東部に位置する。当古墳群の位置する丘陵の東斜面には国史跡安部谷横穴墓（古墳）群が位置し、西側には総数約 150 基から構成される県史跡東百塚山古墳群（大谷 2007）、さらにその西側には総数 80 基前後からなる西百塚山古墳群が存在する。さらにこれらの古墳群の中には、最古段階の石棺式石室を内蔵する全長 27 mの前方後方墳である県史跡古天神古墳（本書所収）、地山岩盤を刳り抜いた舟形石棺を主体部とする全長 25 mの前方後方墳である県史跡大草岩舟古墳（大谷 2002）など、中規模の首長墓を含んでいる。このように、当古墳群を含む大草丘陵古墳群は総数 200 基以上の中小古墳や横穴墓が密集する古墳群であり、県下最大の群集墳と言っても過言ではない。

さて、先述のとおり当古墳群は大草丘陵古墳群の東端に位置する。古墳群は標高 30 m～ 50 m のＹ字形の丘陵尾根上に立地しており、昭和 50 年の山本清氏の報告によれば西側の尾根に 9 基、東側尾根に 6 基の計 15 基が知られていた（山本 1975）。なお、最近の松本岩雄・曳野律雄氏らによる踏査によると、当地区には 27 基の古墳が存在するとされている[(1)]。ただし現地、特に東支群はブッシュがひどく全く見通しが効かない箇所もあり、古墳の正確な数や規模の確定は今後の課題である。

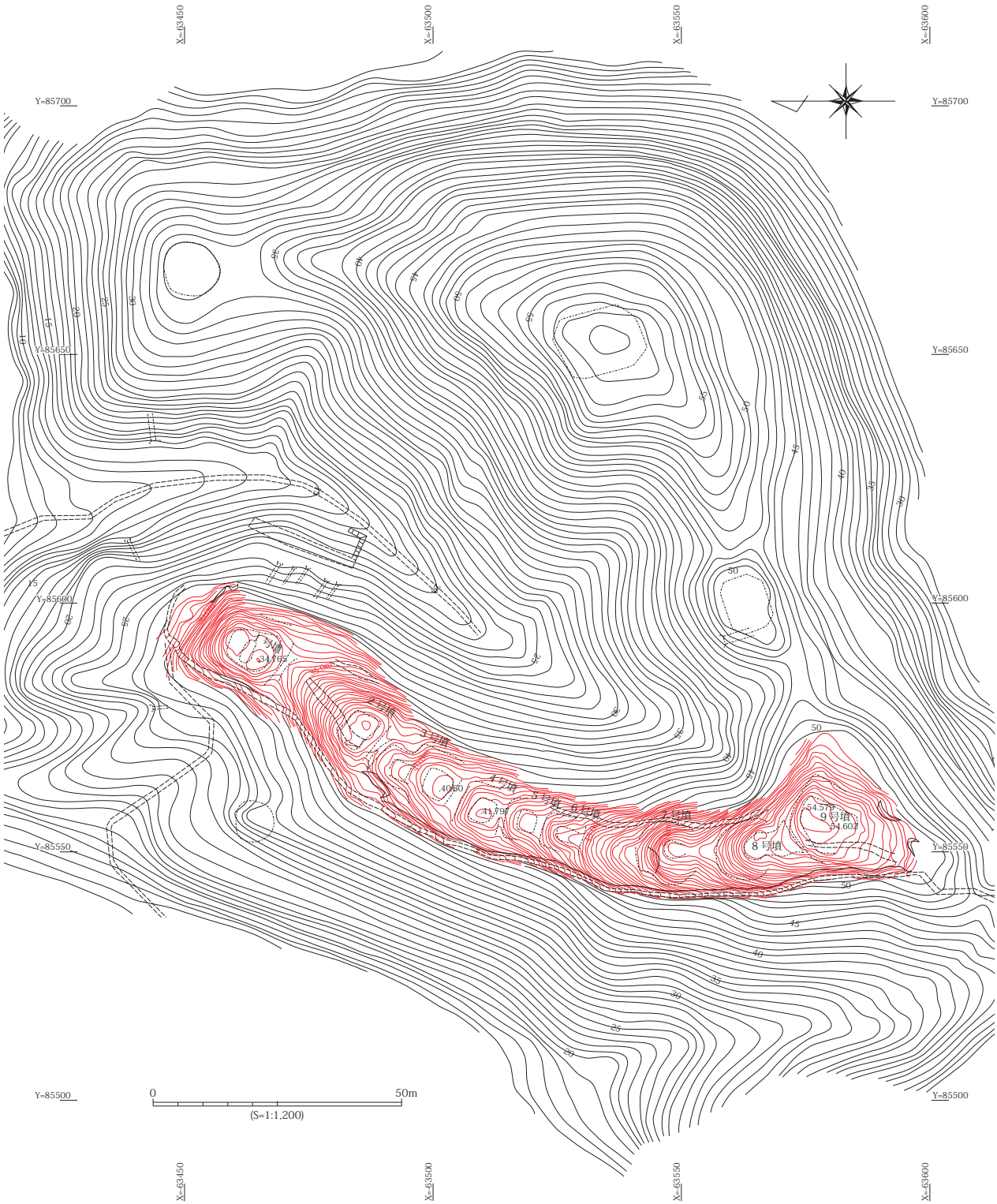
なお、当古墳群の展開する尾根に囲まれた谷部には安部谷横穴墓群が所在する。現在 11 穴が確認されており、そのうちⅠ支群の 5 穴は戦前に「安部谷古墳群」として国史跡に指定されている。これらは意宇型横穴墓と呼ばれる極めて精美な造りの横穴墓であり、過去に須恵器や円筒埴輪片、鉄製轡などが出土している（出雲考古学研究会 1989）。



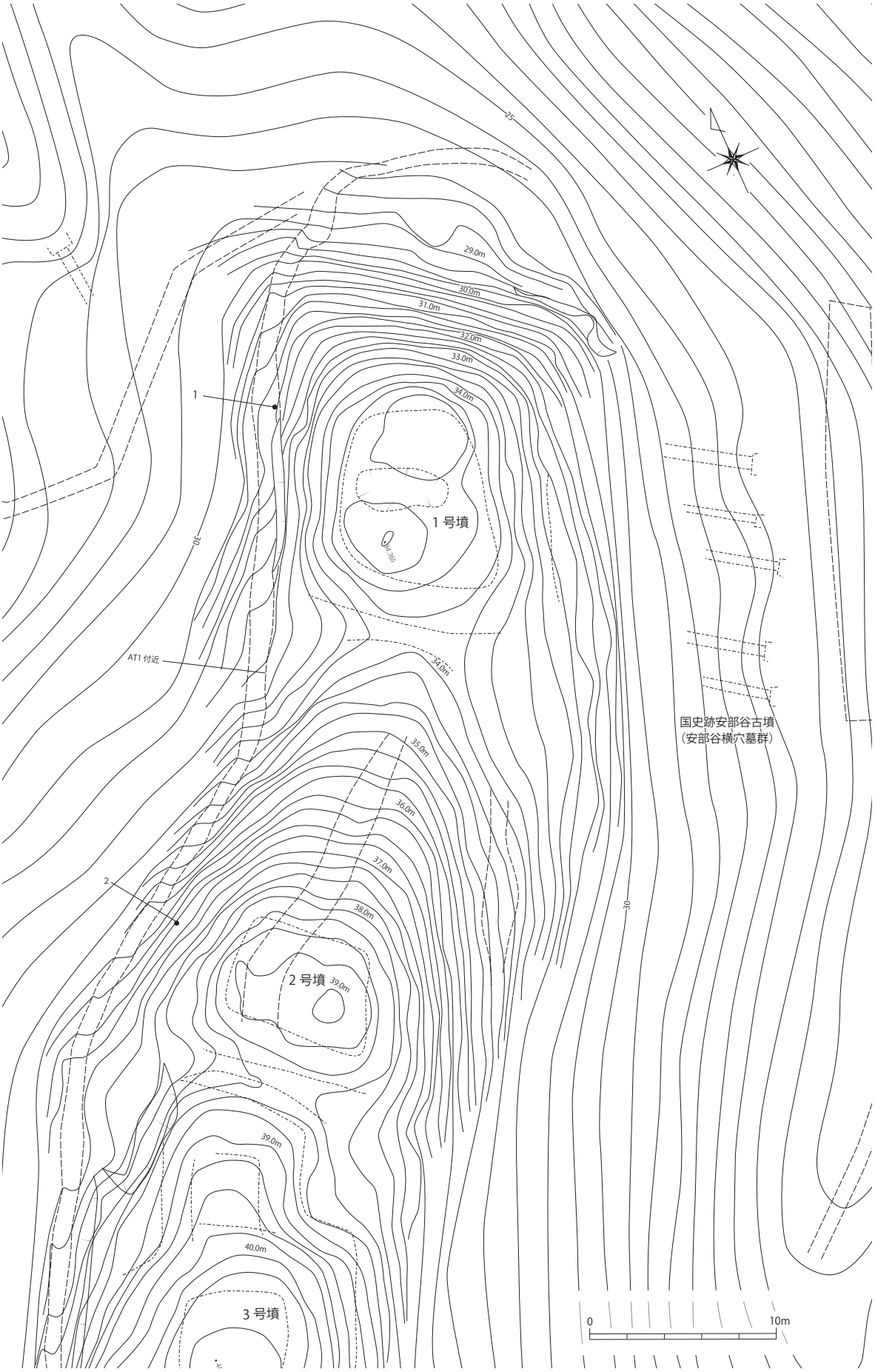
第 43 図　大草丘陵古墳群（東半部）

第 4 節　測量調査の結果

今回測量調査の対象とした区域は、当古墳群のうち県有地内に位置する安部谷の西側尾根上に展開する古墳群である。これを仮に西支群と呼称しておく。測量調査の結果、方墳 6 基、前方後方墳 1 基、円墳 2 基の計 9 基の古墳を確認した。ただし中世以降の改変などもあって墳形は不明瞭なものも多く、墳形の確定は今後の発掘調査を待たねばならない。



第 44 図　安部谷古墳群測量図　S=1/1,200



第 45 図　安部谷 1・2 号墳測量図　S=1/300

古墳は測量した順に、北側の尾根の低い点から南の尾根のピークに向けて順次 1 ～ 9 号墳と命名している。以下、各古墳の概要について述べる。

(1)1 号墳

墳丘の概要　今回測量を実施した丘陵の最も北端に位置する。なお、当古墳の北側で尾根は複数に分岐し、それぞれの尾根上に小規模な方・円墳が立地しているが、これらの多くは横穴墓の後背墳丘と考えられる。1 号墳墳頂部から約 10 m東の斜面、標高 24 m付近には国史跡安部谷古墳群 1 ～ 5 号横穴墓が 1 号墳側に向けて開口しており、開口範囲は 1 号墳の範囲にほぼ収まっている。

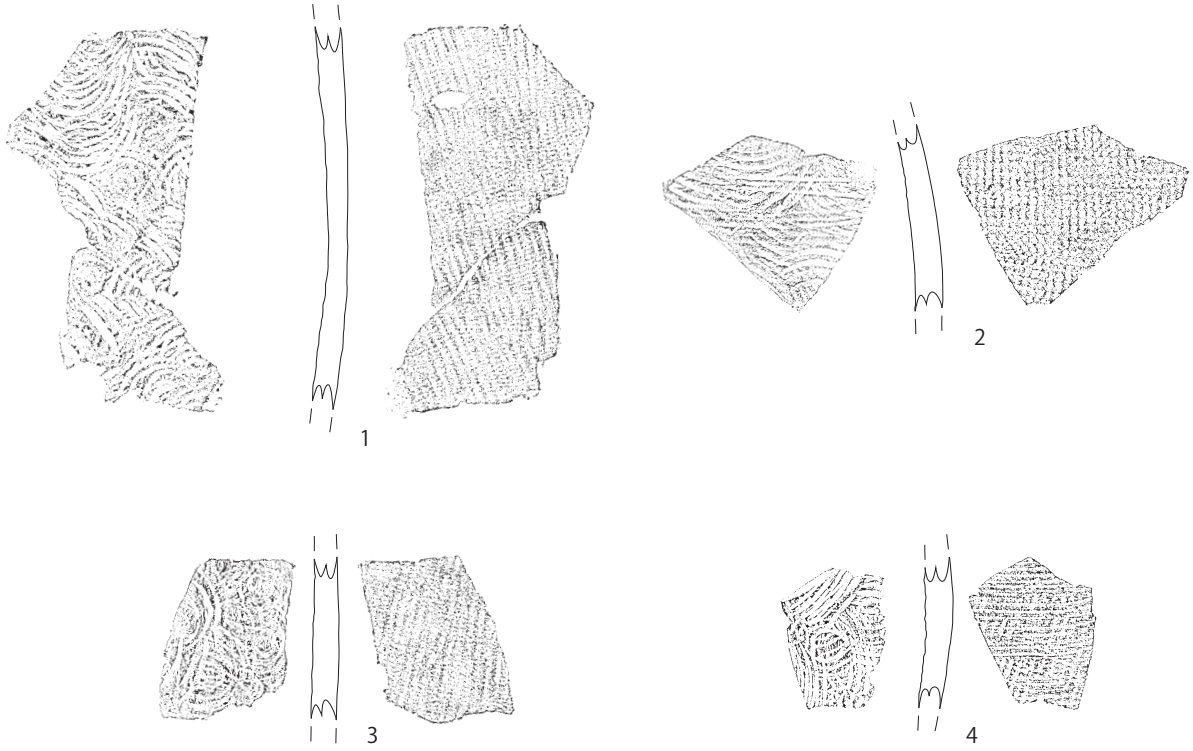
1 号墳は丘陵尾根に平行して主軸をとる方墳である。墳丘東の安部谷側と丘尾切断の南側は墳端は比較的明瞭であるが､古墳北側と遊歩道が通る墳丘西側については墳端は不明瞭である。特に墳丘北側は標高 29.25 m付近に傾斜変換点があり、北側から当古墳をみると一見大方墳のようにも見えるが、この墳裾ラインは東西とも南側には続かないことから墳端でないことは明白である。ただし、北側の平野側からの眺望を意識して、あえてこのような地山整形を行っていた可能性は十分想定される。あえて墳丘規模を求めるならば、北側は標高 31.00 m付近の傾斜変換点に、西側は遊歩道上場ライン付近に求めることが現時点では妥当と思われる。これらの墳端から算出した墳丘規模は､南北約 17 m､東西約 14 m程度の長方形墳に復元できる。墳丘高は南側の掘割底面から計測して約 0.8 mと低平であるが、北側墳裾からは 3.8 mとかなり高い。なお、先述の傾斜変換点から計測すると北側は高さ 5.3 mの大墳丘となる。

墳頂平坦面はやや不整形な長方形状を呈しており、約 9.5 m× 7.5 mを測る。平坦面中央には 5 m× 2.3 m、深さ 10㎝程度の浅い楕円形状の窪みが認められ、盗掘穴と考えられる。現状での地表観察上では段築や葺石は認められない。なお、過去に当古墳と思われる場所から埴輪片が採集されている[(2)]。

出土遺物の概要　今回の測量調査で数点の須恵器を採集した（第 45 図 1 地点)。採集地点は墳丘西側の遊歩道によって削られた崖面及び路面に露出していた。第 47 図 1 ～ 5 は須恵器大甕の胴部片である。1・3 はいずれも外面には縄目原体の平行タタキ、内面には同心円状当具痕が認められる。4 は外面に格子目状タタキを施した後、カキメ風のヨコナデを施す。これらは横穴墓から通常出土するものと変わりない。

7 ～ 13 は先述のとおり以前当古墳で採集され､「安部谷」出土の注記があり現在松江北高等学校に保管されている資料である。ただし、採集年月日にはばらつきがあり、すべてが当古墳から採集されたものかは不明である。7 は基底部から中段にかけての資料で、外面は中段はヨコハケ、基底部は斜め方向のナデが認められる。ヨコハケは静止痕が確認できずＢ種かどうかは不明である。内面は中段は斜め方向のタテハケ、下段はナデで仕上げ、粘土紐接合痕が観察される。焼成は良好で無黒斑、突帯は断面台形で比較的しっかりしている。8 は風化が著しいが中段に円形ス

第 46 図　安部谷 1 号墳（南西から）



1 号墳表採遺物

AT1(1 号墳 2 号墳間) 付近表採遺物

2 号墳表採遺物

松江北高等学校所蔵伝安部谷古墳群表採遺物

第 47 図　安部谷古墳群 1・2 号墳表面最終遺物　S=1/3

第 48 図　安部谷 1 号墳（北西から）

カシ痕が認められる。調整は外面は風化のため不明、内面はタテハケのちナデで仕上げる。タガは断面台形で高くない。9 は 8 とほぼ同様な資料で橙色を呈する。10 は淡黄褐色でやや薄手の埴輪である。風化のため調整は不明。11 は形象埴輪片と考えられる資料で、円筒状の器形に有軸綾杉文が施されている。甲冑形埴輪の草摺部であろうか。12 は口縁部の小片でやや外反し端部は平坦面を形成する。13 は風化が著しいが底部片と想定される資料である。底部端部は先細り状を呈し、内面に斜め方向のアタリ痕があることから何らしか底部調整を行った資料と想定される。

小結　以上述べてきたように、当古墳は約 17 × 14 mの小規模な長方形墳と想定される。年代については墳丘西側で採集された須恵器甕の特徴は横穴墓でよく見かけるタイプのもので、出雲 4 ～ 5 期前後（大谷 1994）のものと想定される。先述のとおり、古墳の東側斜面には安部谷横穴墓第Ⅰ支群 5 基が開口しており、場所もほぼ 1 号墳の範囲内に収まる。こうした点からみて、1 号墳は安部谷横穴墓第Ⅰ支群の後背墳丘である可能性が高い。

しかし、当地で通常みられる後背墳丘は丘陵の横穴墓側に著しく片寄って立地しているのが通例であり、丘陵尾根のほぼ中央に立地しかつ長方形プランの当古墳の様相とは大きく異なっている。こうした特徴を有する方墳は、当地では古墳時代前期から中期にかけて盛行するタイプのものである。さらに、先に紹介した埴輪片が仮に当古墳で採集されたものであるならば、当地の埴輪の下限から考えて東斜面に開口する意宇型に属する安部谷横穴墓群に伴う可能性はあるにせよ一般的なケースとは言えない。当資料の大半は小片のため位置づけが難しいが、焼成からみて穴窯焼成によるものであることは確実であり、また底部調整の存在から川西Ⅴ期以降に位置づけられる（川西 1978）。さらに台形状でしっかりした突帯の形状や二次調整のヨコハケの様相からみて、川西Ⅴ期でも比較的古い段階、須恵器で言えば TK23 から TK10（田辺 1981）の範囲で収まる資料と考えられる。以上の点を勘案すれば、当古墳は古墳時代中期後葉～後期前葉に営まれたものが 6 世紀末以降に後背墳丘として再利用された可能性が高いものとして理解しておきたい。

(2) 2 号墳

墳丘の概要　1 号墳南端から約 15 m南の丘陵尾根のほぼ中央に立地する方墳である。1 号墳と異なり、墳丘主軸は丘陵尾根に直交する。墳端は、南側の尾根切断部は深さ約 50㎝程の掘割があるため比較的明瞭であるが、その他の北及び東西側については傾斜変換点も認められず墳端は不明瞭であり、正確な古墳の規模は明らかでない。南側の掘割部の状況を勘案すると、概ね東西 12 m、南北 10 m程度の墳丘が復元できる。墳丘高は南側の掘割底面から計測して 0.7 m前後を測る。

墳頂平坦部はやや不整形な長方形状を呈し、東西 7.5 m、南北 5.5 mを測る。1 号墳のような盗掘坑らしき落ち込みは認められないが、北側からの尾根筋の山道によってやや改変を受けている。葺石等は確認できていない。

出土遺物の概要　第 45 図 2 地点で数点の須恵器を採集した。採集地点は 1 号墳と同様に墳丘西側

の遊歩道崖面からである。第 47 図 6 は須恵器大甕の口縁部の小片である。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く収める。口縁部外面には幅広の肥厚帯を形成している。5 は須恵器大甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面には同心円当具痕が観察される。

小結　2 号墳は不明瞭ながら一辺 10 ～ 12 mの方墳と推定される。年代については 1 号墳と同様に出雲 4 ～ 5 期前後の須恵器が採集されており、横穴墓の後背墳丘の可能性が考えられるが、現状では 1 号墳のように東側斜面に対応する横穴墓は確認されていない。

このように出土遺物からは横穴墓の後背墳丘の可能性が想定されるものの、墳形や尾根筋中央部に立地する点からみて、古墳時代前期から中期にかけての古墳の可能性も残しておきたい。

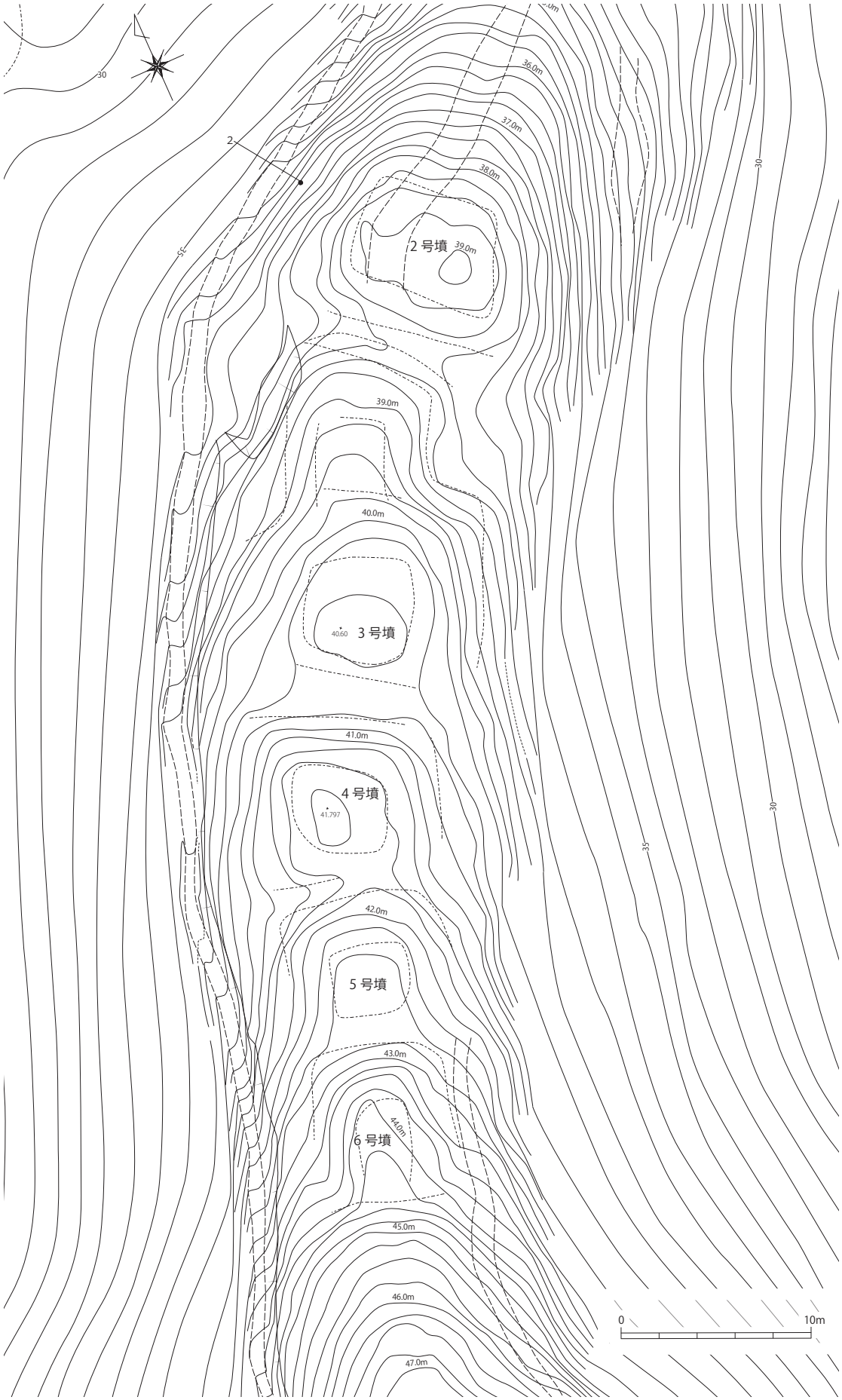
(3)3 号墳

墳丘の概要　2 号墳の南にすぐ隣接する古墳である。現状では方丘が 2 基隣接した形状をなしており、前方後方墳の可能性も想定された。二つの方丘の主軸がややずれる点、西側くびれ部が不明瞭な点など否定的要素も多いが、東側くびれ部が比較的明瞭である点、後方部墳頂から前方部墳頂にかけては隆起斜道状に傾斜し、二つの方墳が連続するものとは考えにくいため、ここでは前方後方墳と仮定して記述を進める。

古墳は前方部を丘陵下側の北に配置し、後方部は上方側に立地している。後方部背面の丘尾切断はきわめて不明瞭であり、現状では墳頂平坦面と後方部背面の周溝底面とのレベル差は僅か 30㎝前後にすぎない。後述するように墳頂部付近は後世の改変を受けている可能性がある。斜面東側は、後方部からくびれ部及び前方部にかけては墳端が比較的明瞭に観察され、特にくびれ部付近の墳裾は 38.50 mの等高線にほぼ沿って明瞭に認められる。また、前方部前面も 2 号墳との掘割があるため、墳端は比較的明瞭であるが、古墳の主軸ラインと前方部前面の墳端ラインは約 15°斜交している。一方、墳丘西側は前方部の南西裾は後世の削平を受けて一部墳裾が失われている。前方部については墳端は比較的明瞭であるが、くびれ部から後方部にかけては不明瞭であり、後方部西側墳裾は現状では把握できない。くびれ部は緩やかなカーブを描いて後方部へと繋がっているが、東側くびれ部とは平面的には対応しておらず、レベル的にも約 50㎝高い。なお、この付近はシダ類の堆積が厚かったため、若干の測量誤差が想定される。墳丘規模は、推定主軸ラインで全長 16.8 m、後方部は南北 11 m、東西 12.5 m前後、前方部長 6.5 m前後と推定される。

後方部墳頂平坦面は 5.5 m四方の方形状をなし、北側は先述のとおり隆起斜道状のスロープを形成して前方部墳頂平坦面と接続している。段築や葺石は認められず、また須恵器・埴輪などの遺物も採集されていない。

小結　3 号墳は不明な点が多いが現状では、全長 16.8 mの小規模な前方後方墳と考えておきたい。墳形は前方部がやや短い点、左右非対称である点が特徴としてあげられる。年代については全く手がかりがないが、当地域では前方後方墳は古墳時代前期と古墳時代中期後葉～後期後葉にほぼ限定される。さらに墳丘長が 30 m未満の小規模で前方部が短小な前方後方墳は、隣接する大草岩舟古墳や大庭町向山西古墳、比津町小丸山古墳、安来市宮山 3 号墳など TK23・47 以降に集中することから、当古墳もこれらと同様な時期のものと理解しておきたい。



第 49 図　安部谷 3・4・5・6 号墳測量図　S=1/300

第 50 図　安部谷 4 号墳（北から）

(4)4 号墳

墳丘の概要　3 号墳の南にすぐ隣接する古墳である。3 号墳とは明瞭な掘割によって区画され、墳裾は等高線 40.50 m前後に求めることができる。南側の 5 号墳との境もやや埋没しているが掘割が設けられている。東側は等高線 40.50 ～ 40.75 mあたりに傾斜変換点が認められ、墳端は明瞭である。西側の墳裾はやや不明瞭ではあるが、当古墳群では最も精美な古墳と言える。平面形はほぼ正方形をなし、一辺 10.5 mを測る。墳丘高は北側から計測して 1.3 mを測る。南側は現状での溝底と墳頂平坦面とのレベル差はあまりないが、おそらく後世に改変を受け埋められてしまった可能性が高い。墳頂平坦面は不整な正方形状をなし 4.5 m× 5 mを測る。段築や葺石は認められず遺物も採集されていない。

小結　4 号墳は小規模な方墳であるが当古墳群では最も精美な形態を残している。遺物がないため年代の手がかりはないが、当地では平面正方形プランが小規模古墳に採用されるのは、当古墳群に隣接する東百塚山古墳群など中期後半以降から一般的になることから、それ以降の時期に位置づけられる可能性が高い。

(5)5 号墳

墳丘の概要　4 号墳の南にすぐ隣接する古墳で、4 号墳と周溝を共有している。4 号墳とは明確な掘割によって区画されているが、南の 6 号墳側には現状では堀割は認められず、墳頂平坦面からわずかに低くなっている程度であり、3・4 号墳と共通する。墳裾は北側周溝及び北東隅・北西隅付近は概ね観察可能であるが、墳丘南側に移行するにつれ不明瞭になる。墳丘南側の墳裾が不明瞭だが、仮に 6 号墳墳裾とほぼ同じ場所として計測すると、古墳の規模は南北 8 m、東西 8.5 m、墳丘高は北西コーナー付近から計測して 1.2 m前後を測り、4 号墳と同様な正方形プランの方墳となる。墳頂平坦面は 4 m× 3.7 mのほぼ正方形をなす。段築や葺石は認められず遺物も採集されていない。

小結　5 号墳は 4 号墳とほぼ同型となる小規模な方墳である。出土遺物がないため年代は不明だが、4 号墳と同様な理解から中期後葉～後期前葉を中心とする時期の可能性が高い。

(6)6 号墳

墳丘の概要　5 号墳のすぐ南に隣接する古墳である。4 号墳や 5 号墳に比べて墳丘高は高いものの、墳頂平坦面は狭く、中世城郭の郭状平坦地の可能性も考慮されたが、4・5 号墳との連続性から小規模な方墳と理解した。北側墳裾は等高線 42.75 mあたりに明瞭に認められる。墳丘東西の墳裾は両者とも北半は比較的明瞭にとらえることができる。ただし東側について近世以降の里道が通っており、このために見かけ上墳端に見える可能性も考慮される。墳丘南側については 3 ～ 5 号墳と同様に堀割は認められず、標高 44.50 m付近の傾斜変換点を墳端と理解すると、古墳の規模は南北 8.5 m、東西 7 mを測り、4・5 号墳よりほぼ同規模か若干小型の方墳となる。ただ先述のとおり、墳丘高は北側墳裾から計測して約 1.5 mと若干高い。墳頂平坦面は 4.5 m× 3 m前後とかな

第 51 図　安倍谷 7・8・9 号墳測量図　S=1/300

り狭い。段築や葺石は認められず遺物も採集されていない。

小結　出土遺物がないため年代は不明だが、規模や形態からみて、4 号墳・5 号墳に隣接する時期の古墳と考えられる。

(7)7 号墳

墳丘の概要　6 号墳から約 12 m程離れて丘陵尾根上に立地する円墳である。6 号墳との間には小規模な古墳が築造可能なスペースが存在するが、人為的に加工された痕跡は認められない。

墳形は 1 ～ 6 号墳と異なり円墳である。ただし南側は堀割がなく、墳裾が一旦くびれた後に広がるようにも見受けられることから、前方部を山側に向けた前方後円墳の可能性も想定される。ただしその場合の前方部となる部分の前面には堀割が存在しない点から、ここでは一応円墳として記述を進めることとする。

墳端は東西及び北側は比較的明瞭であり、墳裾が緩やなカーブを描くことから円墳と判断できる。ただし、北側は墳丘斜面の一部が崩落しその土が前面に押し出されていることから、墳端はやや乱れている。また墳丘東側には先述の近世里道が走っており、このために見かけ上円墳状の墳裾に見えている可能性も考慮されるが、里道がやや迂回していることから、むしろ古墳の裾に里道が走っていると理解した方が妥当であろう。先述のとおり南側には周溝がめぐらず墳端は不明瞭である。古墳の規模は 12.5 m× 13 mを測る。墳丘高は北側墳裾から計測して約 2.7 mを測り、方墳である 4 ～ 6 号墳に比べると非常に腰高な印象を与える。ちなみに前方後円墳と想定した場合の規模は最大 16 m前後となる。墳頂平坦面は狭く、3.5 m× 4.5 mの不整楕円形状を呈する。段築や葺石は認められず遺物も採集されていない。

小結　7 号墳は 8 号墳とともに円墳で、方墳である 4 ～ 6 号墳とは一定の距離を保ち、墳丘高も高いことから何らしかの築造時期差を想起させる。ただ、小高い円墳が方墳に混在する様相は隣接する東百塚山古墳群でも認められる。方墳が圧倒的多数を占める同古墳群では、稀少例となる円墳の 71 号墳からＵ字形鋤先が出土しており、中期後半～後期前半に位置づけられ、隣接する方墳との間に大きな時期差は認められない[(3)]。こうしたあり方を考慮すれば、当古墳の場合も 4 ～ 6 号墳とは時期差ではなく造墓集団の違いを反映している可能性も考慮される。

(8)8 号墳

墳丘の概要　7 号墳から 3 m程に南に位置する円墳であり、仮に 7 号墳が前方後円と仮定するとほぼ墳裾が接していることになる。

第 52 図　7 号墳（北から）

墳形は隣接する 7 号墳と同じ円墳である。そして 7 号墳と同様に南側は堀割が認められず、墳裾が一旦くびれた後に広がる様相も 7 号墳と同じである。ただその広がりは不整形であり、一見前方後円墳のようにも見える 7 号墳の様相とは大きく異なる。先述のとおり古墳の南側には丘陵尾根を切断した痕跡は認められず、墳頂平坦面は南側は 9 号墳側にむけて続き広い平坦面を形成しており、円墳の背面整形と

してはきわめて不自然である。後述するように 9 号墳も北西隅を削平された痕跡が認められることから、後世に古墳の堀割が埋められ人為的な平坦面が造成された可能性が高い。

第 53 図　9 号墳（北から）

墳端は南側以外は比較的明瞭であり、墳裾が緩やなカーブを描くことから 7 号墳と同様に円墳と判断できる。古墳の規模は 11.5 m× 13 mを測り、墳丘高は北側墳裾から計測して約 2.7 mを測り、7 号墳とほぼ同一規模であり、同一の墳丘規格に基づき築造された可能性を示唆する。墳頂平坦面は狭く、4.5 m前後の不整円形状を呈する。段築や葺石は認められず遺物も採集されていない。

小結　先に述べたとおり、8 号墳は 7 号墳と親縁性が高く同一規格に基づき築造された古墳であり、7 号墳とあまり時期を隔てることなく築造されたものと考えられる。よって 7 号墳と同様に築造時期は東百塚山 71 号墳例や東出雲町姫津 H1 号墳（池淵ほか 2010）などを参考にすれば、古墳時代中期後葉から後期前半の可能性が高い。

(9)9 号墳

墳丘の概要　8 号墳から平坦面を挟んで 5 m程に南に位置する。当古墳の立地する場所は丘陵尾根がＹ字状に分岐する地点で、最も標高が高く眺望のよい場所に相当する。これまで述べてきた安部谷古墳群西支群の最南端に位置し、ここから約 80 m南の大草岩舟古墳までには古墳らしき高まりは存在しない。一方、当古墳から北東に分岐する丘陵尾根上には、10 号墳をはじめとする 10 基前後の古墳が尾根上に点在している。

当古墳は他の古墳と違って墳形及び墳端がきわめて不明瞭であり、そもそも古墳であるかどうかも疑わしい。ただ、先述のとおり立地上は最も優れた場所に位置している点、不整形ながらも確実な高まりが認められることから、ここでは一応古墳の可能性が高いものとして記述を進める。

墳形は墳丘北側及び東側に比較的明瞭な傾斜変換点が直線的に認められることから方墳と考えられる。しかし南側は墳頂部から緩やかに南に向けて傾斜しており、現状では人為的に区画した痕跡は確認できない。墳頂平坦面も水平でなく傾斜している点もあわせ、古墳と認定するにはやや躊躇する点である。先述のとおり北西隅は後世の人為的な削平を受け、8 号墳墳頂平坦面までの間に広い平坦面を形成している。また尾根上には里道が走り古墳の形状はかなり改変を受けている。このように、不確定要素も多いが、仮に方墳であると考えるならば、一辺約 15 m程度の規模と推測される。墳頂平坦面も不明瞭だが、南北方向で 11.5 m程度を測る。段築や葺石は認められず、遺物も採集されていない。

小結　先述のとおり当古墳はそもそも確実に古墳であるとは断定しがたいものであり、当然遺物もなく直接的に年代を知る手がかりはない。仮に古墳であるとすれば、方墳という墳形や優れた立地条件を勘案すれば、当古墳群が形成される比較的初期の段階に築造されたものと推定される。

第 5 節　まとめ

今回の測量調査では方墳 6 基、円墳 2 基、前方後方墳 1 基の計 9 基の古墳を確認した。40 年近く前の山本清氏の踏査では今回の測量範囲内に 9 基の古墳が存在すると報告されており（山本 1975）、はからずも今回の測量調査は山本氏の先見性を追認する結果となった。ただ墳形や群構成及び年代については新たな知見を加えることができたため、ここで略述しておきたい。

まず群構成についてであるが、基本的には、6 号墳と 7 号墳の間に空疎地が認められ、そこで墳形も異なることから 1 ～ 6 号墳の方形墳群と 7・8 号墳の円墳群に分離される。なお、1 号墳と 2 号墳の間にも古墳 1 基を築造可能なスペースが存在することから、さらに 1 号墳と 2 ～ 6 号墳とを分離できるかもしれない。また、9 号墳は仮に古墳であるならばこれらに先立つものである可能性が高い。

また、当古墳群に共通する特徴として、各古墳の尾根の上側を切断する堀割・周溝が極めて不明瞭な点があげられる。最も下手の 1 号墳や 2 号墳は明瞭であるが、それより上に立地する 3 ～ 8 号墳はいずれも背面の堀割・周溝が埋没している。また当尾根上の最高点である 9 号墳付近は平坦地が形成され、それによって 9 号墳の北西隅は削られている。ここで注目されるのは、この 9 号墳は眼下に意宇平野を見下ろすことのできる眺望良好な地点であり、中世に山城として利用された茶臼山を一望できる場所に立地している点である（第 42 図）。3 号墳より上の古墳周溝（堀割）が無く、現状ではあたかも階段状の地形を呈しているのは、中世に例えば茶臼山城の向城として人為的な削平を受けて郭状に加工された可能性も考慮しておく必要があろう。

年代については、1・2 号墳から横穴墓の後背墳丘でよくみられる須恵器片を採集したが、尾根筋中央部に立地するという特徴や長方形墳という墳形を勘案すると、横穴墓に伴う後背墳丘と断ずるにはやや躊躇せざるを得ない。伝当古墳群出土とされる埴輪の年代観を重視すれば、中期末から後期中葉にかけて築造された可能性が高い。一方 7・8 号墳の円墳は位置づけが難しいが、既に述べたとおり東百塚山 71 号墳の事例から方墳とほぼ同様の時期を想定した。71 号墳は直径に対して極めて高いマウンドを備える円墳で、7・8 号墳と類似する。近隣では姫津 H1 号墳が同規模の円墳で、底部に平行タタキを持つ埴輪が出土し、TK23 ～ 47 併行期と想定されている（池淵ほか 2010）。このように意宇平野南麓で当該期の円墳が散見される点も、先の想定を傍証する材料と言える。

仮に両者が同時期の所産とするならば、同一群集墳内で円墳と方墳とが若干墓域を分離しつつ併存していることとなるが、こうした状況は、東出雲町渋山池古墳群や同姫津古墳群などで既に確認されている。特に前者では全面調査が行われ、ほぼ同時期にやや距離を置いて方墳群と円墳群とは継起的に築造されている様相が明らかにされている（島根県教育委員会 1998）。先の東百塚山古墳群の場合も方墳が圧倒的に多いが、大枠では同様な事例と理解してよいだろう。こうした様相は、円墳と方墳は必ずしも時期差を示すものではなく併存しつつも何らかの差異を表象するものであり、当地では圧倒的多数を占める方墳に対して、円墳はマイノリティとしての何らしかの差異、例えば出自・階層・職掌を表象するものとして機能していたものと考えられる。こうした視点は今後の大草丘陵古墳群の内容を検討していく上で重要な視点となるであろう。

このようにささやかな測量調査とはいえ、今回の測量調査によって安部谷古墳群ひいては大草丘陵古墳群の性格を考える上で貴重な成果が得られた。しかし、今回の調査は安部谷古墳群の西半部を測量したものにすぎない。東支群については古墳の基数もまだ確認できていない状態であり、また西支群も 1 号墳の北側には横穴墓の後背墳丘と想定される小マウンドが多数存在しており、全容の解明にはまだ程遠い状況である。今回のような地道な測量調査や確認調査を積み重ねていくことによって、今後当古墳群及び大草丘陵古墳群の解明が進み、国指定範囲の拡大など一層の保護措置に結びつくことが期待される。

註

(1)当古墳群については、松本岩雄氏・曳野律夫氏から直接現地で御教示いただき、かつ踏査図面を提供いただいた。

(2)花谷　浩氏の御教示による。

(3)東百塚山 71 号墳は、平成 26 年度の調査で、須恵器・円筒埴輪が出土し、その年代観から古墳時代中期末～後期前半とされている（本書所収）。

引用・参考文献

池淵俊一・間野大丞ほか 2010「東出雲町姫津古墳群の調査」『季刊文化財』第 121 号 島根県文化財愛護協会
出雲考古学研究会 1989「松江・安部谷横穴墓群について」『八雲立つ風土記の丘館報』№.90・94・95
大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集 島根考古学会
大谷晃二 2002「大草岩船古墳の測量調査」『八雲立つ風土記の丘館報』№.169
大谷晃二 2007「東百塚山・荒神谷後谷・楮畑古墳の測量調査」『八雲立つ風土記の丘館報』№.188
大谷晃二 2012「東・西百塚山古墳群」『松江市史 資料編 2 考古資料』松江市史編集委員会
川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第 2 号 日本考古学協会
島根県教育委員会 1998『渋山池古墳群』
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川出版社
山本　清 1975「古墳」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会

第 7 章　総括

本報告を締めくくるにあたり、蛇足ではあるが各章のまとめで述べられた各遺跡の位置づけを時代順にまとめなおし再度確認しておきたい。

当報告書掲載遺跡で最も古い遺構としては東百塚山古墳群の 20 号墓が挙げられる。これまで意宇平野周辺地域では、四隅突出型墳丘墓は的場墳墓が知られるのみであった。的場墳墓と 20 号墓はともに墳丘斜面に貼石がされ、墳裾に一列の敷石と立石を有している。この構造は、松江市域の四隅突出型墳丘墓中では最も高い階層序列に類しており、意宇平野周辺の集団が古墳時代に向け有力化してゆく過程の表れととらえられよう。なお、古天神古墳の前方部直下からは弥生土器が出土しており、この時期の墳墓にかかわる遺構が周辺に存在していた可能性を示すものと考えられる。

古墳時代前期末には上竹矢 7 号墳が築造される。上竹矢 7 号墳は、近接する廻田 1 号墳とともに出雲地域で最も古い時期に築造された前方後円墳の一つであり、その墳形と規模（全長 66 m）からも、意宇平野周辺を地盤とする首長系列の勢力がこの時期に大きく進展したことを示している。東百塚山古墳群では古墳時代前期末の土師器大型壺の破片が採取されており、この時期には上竹矢 7 号墳および廻田 1 号墳の被葬者の支配下にあった集団の墓域として古墳の築造が再開されたと考えられる。

古墳時代中期後葉には東百塚山で古墳の築造が盛んになるが、その起点の一つは従来北側斜面の 1 号墳と目されていたが、今回の発掘調査で尾根上の 65 号→ 64 号→ 63 号墳もその起点の一つであることが確認された。また測量の結果、丘陵南側の 137 号墳についても周辺の古墳の造墓の起点となった可能性が考えられる。

安部谷古墳群の西支郡群では測量で確認した 9 基の古墳のうち 1 ～ 6 号墳の方墳と 7・8 号墳の円墳が古墳時代中期末から後期中葉にかけて若干墓域を分離して併存したと推定され、このことの背景としては墳形に出自・階層などの差異が反映されている可能性が考えられる。

古墳時代後期に入っても大草丘陵では古墳の造営が続くが、このうち大草岩舟古墳は後期初頭の首長墓に比定される。その次代の首長墓として古墳時代後期後半には導入期の石棺式石室を有する古天神古墳が築造される。今回の古天神古墳の調査では、前方部先端付近と石室構築部分では地山を削り出して成形している以外は基本的に盛土が施されて構築されていることが判明した。この時期になると安部谷横穴墓群をはじめとして大草丘陵の斜面でも横穴墓が作られたが、平成 29 年度の東百塚山古墳群の測量調査で北西の斜面で横穴墓を 4 基確認している。

本報告書に掲載した調査成果は、いずれも調査自体が限定された内容であるため、僅かな知見にとどまることとなった。意宇平野周辺地域の弥生時代末から古墳時代にかけての墳墓の造営に関する様相については、いまだ未解明の課題が多く残されている。今後も調査研究を進めることにより、残された課題がより明瞭なかたちで解明されていくことを期待したい。

東百塚山古墳群　測量調査時の表面採集遺物掲載表

掲載No	出土地点		種別	器種	部位	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	時期
1	東百塚山	89号墳東側・73号墳北側谷部	埴輪	円筒埴輪	胴部	—	—	(6.0)	やや粗(7㎜以下の石英、長石等を多く含む)	良好	内:褐灰7.5YR4/1 外:橙7.5YR6/6	
2	東百塚山	89号墳東側・73号墳北側谷部	埴輪	円筒埴輪	胴部	—	—	(6.2)	密(2㎜以下の石英、長石等を多く含む)	良好	内:暗灰黄2.5Y5/2 外:暗灰黄2.5Y5/2	
3	東百塚山	89号墳東側・73号墳北側谷部	須恵器	杯身	底部	—	—	(1.5)	密(1㎜以下の石英、長石等を少し含む)	良好	内:灰5Y6/1 外:灰5Y5/1	
4	東百塚山	125号墳南側	須恵器	横瓶か	胴部	—	—	(5.3)	密(1㎜以下の石英、長石等を含む)	良好	内:灰5Y6/1 外:灰オリーブ5Y6/2	
5	東百塚山	125号墳南側	須恵器	甕	胴部	—	—	(6.2)	密(1㎜以下の石英、長石等を含む)	良好	内:灰5Y6/1 外:灰5Y6/1	
6	東百塚山	125号墳南側	須恵器	甕	胴部	—	—	(2.6)	密(1㎜以下の石英、長石等を含む)	良好	内:灰5Y6/1 外:灰5Y5/1	
7	東百塚山	125号墳南側	須恵器	甕	胴部	—	—	(4.8)	密(1㎜以下の石英、長石等を含む)	良好	内:灰5Y6/2 外:灰5Y6/1	
8	東百塚山	125号墳頂部	須恵器	甕	胴部	—	—	(7.2)	密(0.5㎜以下の石英、長石等を僅かに含む)	良好	内:灰5Y5/1 外:灰5Y4/1	
9	東百塚山	2号墳西側	須恵器	甕	胴部	—	—	(6.4)	密(0.5㎜以下の石英、長石等を僅かに含む)	良好	内:灰5Y5/1 外:灰オリーブ5Y5/2	

東百塚山古墳群　発掘調査出土遺物掲載表

掲載No	出土地点			種別	器種	部位	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	時期
1	東百塚山	20号墓	2トレンチ	弥生	甕	口縁部	(20.6)	—	(6.4)	やや密(1㎜以下の石英、長石、雲母等を含む)	良好	内:灰黄2.5Y6/2 外:浅黄2.5Y8/3	後期V-3
2	東百塚山	20号墓	2トレンチ	弥生	鼓形器台	脚基部	—	—	(2.1)	密(1㎜以下の石英、長石等を含む)	普通	内外:浅黄橙 10YR8/4	後期V-3
3	東百塚山	20号墓	1トレンチ	弥生	小型特殊器台	口縁部	(24.0)	—	(2.3)	やや粗(2㎜以下の角閃石、長石、金雲母等を含む)	普通	内外:褐10YR4/4	後期V-3
4	東百塚山	20号墓	1トレンチ	弥生	小型特殊器台	脚端部	—	(26.1)	(3.3)	やや粗(2㎜以下の角閃石、長石等を含む)	普通	内外:褐10YR4/4	後期V-3
5	東百塚山	20号墓	1トレンチ	須恵器	甕?	胴部破片	—	—	—	緻密(0.5㎜以下の砂粒を希に含む)	良好	内:灰7.5Y6/1 外:灰5Y6/1	
6	東百塚山	63号墳	南トレンチ	須恵器	高杯	脚端部	—	—	(2.1)	密	良好	内:灰白5Y7/1 外:灰5Y5/1	
7	東百塚山	64号墳	南トレンチ	須恵器	𤭯	完形	9.4	—	10.6	密	良好	内外:灰7.5Y6/1	TK23
8	東百塚山	64号墳	南トレンチ	須恵器	高杯	ほぼ完形	19.0	10.8	13.6	密	良好	内:灰白7.5Y7/1 外:灰7.5Y6/1	TK23
9	東百塚山	64号墳	南トレンチ	土師器	高杯	3/4程度	16.7	9.1	10.8	密	良好	内:橙5YR7/6 外:明黄褐10YR7/6	
10	東百塚山	64号墳	南トレンチ	土師器	高杯	杯部1/2、脚部1/2	(15.0)	9.1	(9.9)	密(1㎜以下の石英、長石等を含む)	良好	内:明黄褐7.5YR7/6 外:橙5YR6/6	
11	東百塚山	64号墳	南トレンチ	土師器	高杯	7割(口縁端部と脚端部欠損)	(15.0)		(9.3)	密(1㎜以下の石英、長石等を含む)	良好	内:明黄褐10YR7/6 外:明黄褐10YR7/6	
12	東百塚山	71号墳	周溝埋土	須恵器	小型壺	頸部小片	—	—	(3.3)	密(1㎜以下の石英、長石等を含む)	良好	内:灰10Y5/1 外:灰10Y5/1	TK47
13	東百塚山	71号墳	北サブトレ	埴輪	円筒埴輪	小片	—	—	(6.5)	やや粗(1～3㎜程度の石英、長石を多く含む)	良好	内:浅黄橙10YR8/3 外:浅黄橙10YR8/4	
14	東百塚山	71号墳	北サブトレ周溝内A群	埴輪	円筒埴輪	基底部破片	—	—	(8.2)	やや粗(1～3㎜程度の石英、長石、黒色粒を多く含む)	良好	内:浅黄橙7.5YR8/6 外:黄橙10YR8/6	
15	東百塚山	71号墳	北サブトレ周溝内B群	埴輪	円筒埴輪	基底部小片	—	—	(7.8)	やや粗(2㎜程以下の石英、長石を多く含む)	良好	内:黄橙10YR8/6 外:黄橙10YR8/6	
16	東百塚山	71号墳	北サブトレ周溝内B群	埴輪	円筒埴輪	タガ	—	—	(1.8)	やや粗(4㎜程以下の石英、長石を多く含む)	良好	内:浅黄橙7.5YR8/6 外:黄橙10YR8/6	
17	東百塚山	71号墳	造出 表採	埴輪	円筒埴輪	小片	—	—	(4.2)	やや粗(0.5～2.5㎜程度の石英、長石を多く含む)	良好	内:浅黄橙10YR8/4 外:橙7.5YR7/6	
18	東百塚山	71号墳	盗掘坑	埴輪	円筒埴輪	肩部小片	—	—	(10.3)	やや粗(1～2㎜程度の石英、長石を多く含む)	良好	内:浅黄橙10YR8/4 外:にぶい黄橙 10YR6/4	
19	東百塚山	71号墳	開口部北端攪乱土	埴輪	朝顔形埴輪?	基底部破片	—	(20.6)	(13.0)	やや粗(1～2㎜程度の石英、長石を多く含む)	良好	内:浅黄橙10YR8/3 外:浅黄橙10YR8/3	
20	東百塚山	71号墳	墳丘断割	埴輪	円筒埴輪	小片	—	—	(9.6)	やや粗(3～6㎜程度の石英、長石を含む)	やや不良	内:浅黄橙10YR8/4 外:明黄褐10YR6/6	
21	東百塚山	71号墳	開口部北端攪乱土	埴輪	円筒埴輪	小片	—	—	(6.2)	やや粗(3～5㎜程度の石英、長石を多く含む)	やや不良	内:浅黄橙10YR8/3 外:浅黄橙10YR8/4	
22	東百塚山	71号墳	墳丘断割	埴輪	円筒埴輪	小片	—	—	(9.7)	やや粗(1～3㎜程度の石英、長石を多く含む)	やや不良	内:橙7.5YR7/6 外:橙7.5YR7/6	
23	東百塚山	71号墳	開口部北端攪乱土	埴輪	円筒埴輪	小片	—	—	(4.0)	やや粗(1～2㎜程度の石英、長石を多く含む)	良好	内:灰白10YR8/2 外:浅黄橙10YR8/3	
24	東百塚山	71号墳	造出 表採	須恵器	杯身	1/4以下	11.2	—	(3.3)	密(1㎜以下の石英、長石を含む)	良好	内:灰白N7/ 外:灰N5/～灰N7/	TK47
25	東百塚山	71号墳	排土区	須恵器	杯蓋	小片	13.8	—	(2.8)	密(1㎜以下の石英、長石を少し含む)	良好	内:灰白N7/ 外:灰N6/	
26	東百塚山	71号墳	排土区	土師器	甕	肩部	—	—	(4.7)	やや粗(1～3㎜以下の石英、長石等を含む)	良好	内:橙5YR7/6 外:橙7.5YR7/6	
27	東百塚山	71号墳	排土区	弥生	甕	口縁部小片	(18.6)	—	(2.7)	密(0.5～1.5㎜以下の石英、長石等を少し含む)	良好	内:橙5YR7/8 外:黄橙7.5YR7/8	V-1
28	東百塚山	71号墳	盗掘坑	弥生	無頸甕	口縁部小片	(11.6)	—	(2.5)	密(1㎜以下の石英、長石等を少し含む)	良好	内:橙2.5YR7/6 外:橙2.5YR7/6	V-1
29	東百塚山	71号墳	排土区	弥生	甕	口縁部小片	(17.1)	—	(3.4)	やや粗(1.5㎜以下の石英、長石等を少やや多く含む)	普通	内:橙10YR7/4 外:浅黄2.5YR7/3 断:暗灰黄2.5Y5/2	V-1
30	東百塚山	71号墳	盗掘坑断面	弥生	甕	底部のみ	—	4.5	(1.9)	やや粗(1㎜以下の石英、長石をやや多く含む)	良好	内:浅黄橙10YR8/4 外:淡黄2.5Y8/3～暗灰N3/	V-1
31	東百塚山	71号墳	盗掘坑断面	弥生	壺	口縁部小片	(14.4)	—	(4.2)	やや粗(1㎜以下の石英、長石をやや多く含む)	やや不良軟質	内:橙7.5YR6/6 外:明黄橙10Y6/6 断:7.5YR5/6	V-3

※(　)の数値は、復元値及び残存値

第２表　東百塚山古墳群遺物観察表

写真図版

上竹矢 7 号墳　遠景（南から）

第 1 トレンチ　掘削状況

図版 2

第 2 トレンチ墳丘検出状況

第 2 トレンチ　墳端部土層堆積状況

第３トレンチ墳丘検出状況（西から）

第３トレンチ東端部　盛土堆積状況

図版 4

第 4 トレンチ　調査終了時状況（北から）

第 5 トレンチ墳丘検出時状況

第 5 トレンチ墳端付近土層堆積状況

第 6 トレンチ地山検出状況

図版 6

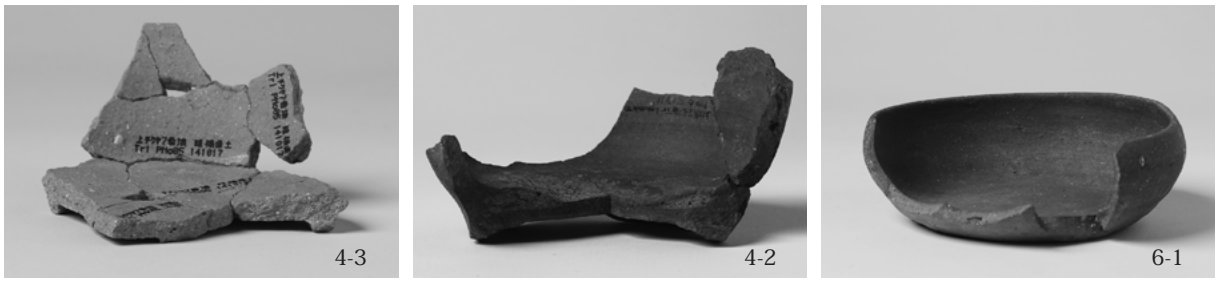
第 7 トレンチ掘削状況（北から）

第 7 トレンチ掘削状況（南から）

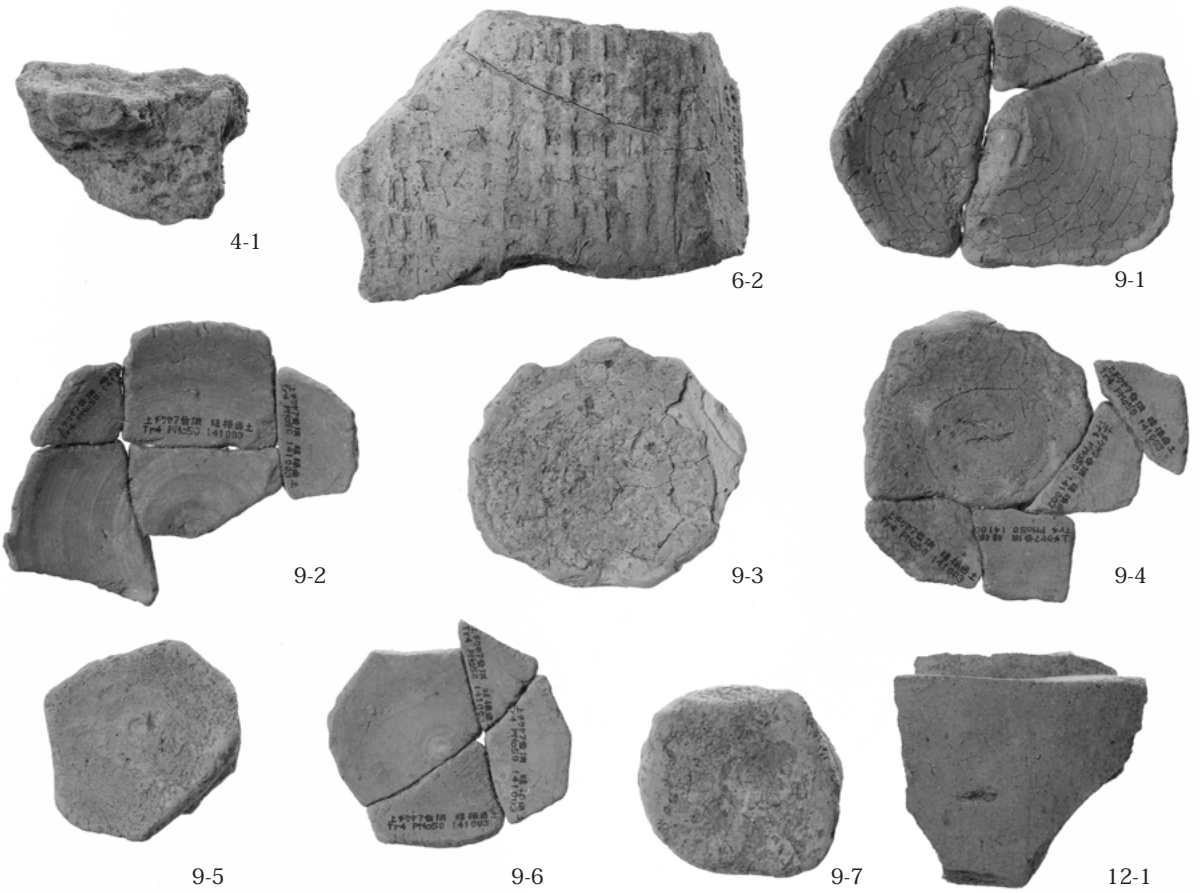
第 8 トレンチ土層堆積状況 1

第 8 トレンチ土層堆積状況 2

図版 8



上竹矢 7 号墳出土遺物　(1)



上竹矢 7 号墳出土遺物　(2)

東百塚山 20 号墓 1 トレンチ　墳丘東側の列石

東百塚山 64 号墳　墳丘東裾の土器群出土状況

図版 10

東百塚山 20 号墓 1 トレンチ　東裾列石の状況

東百塚山 20 号墓 1 トレンチ　東裾列石拡大

東百塚山 20 号墓 2 トレンチ　東裾列石の状況

東百塚山 20 号墓 3 トレンチ　北側墳裾列石の状況

東百塚山 20 号墓 3 トレンチ　北側墳裾列石拡大

東百塚山 20 号墓 1-2 トレンチ　墳丘東側の列石

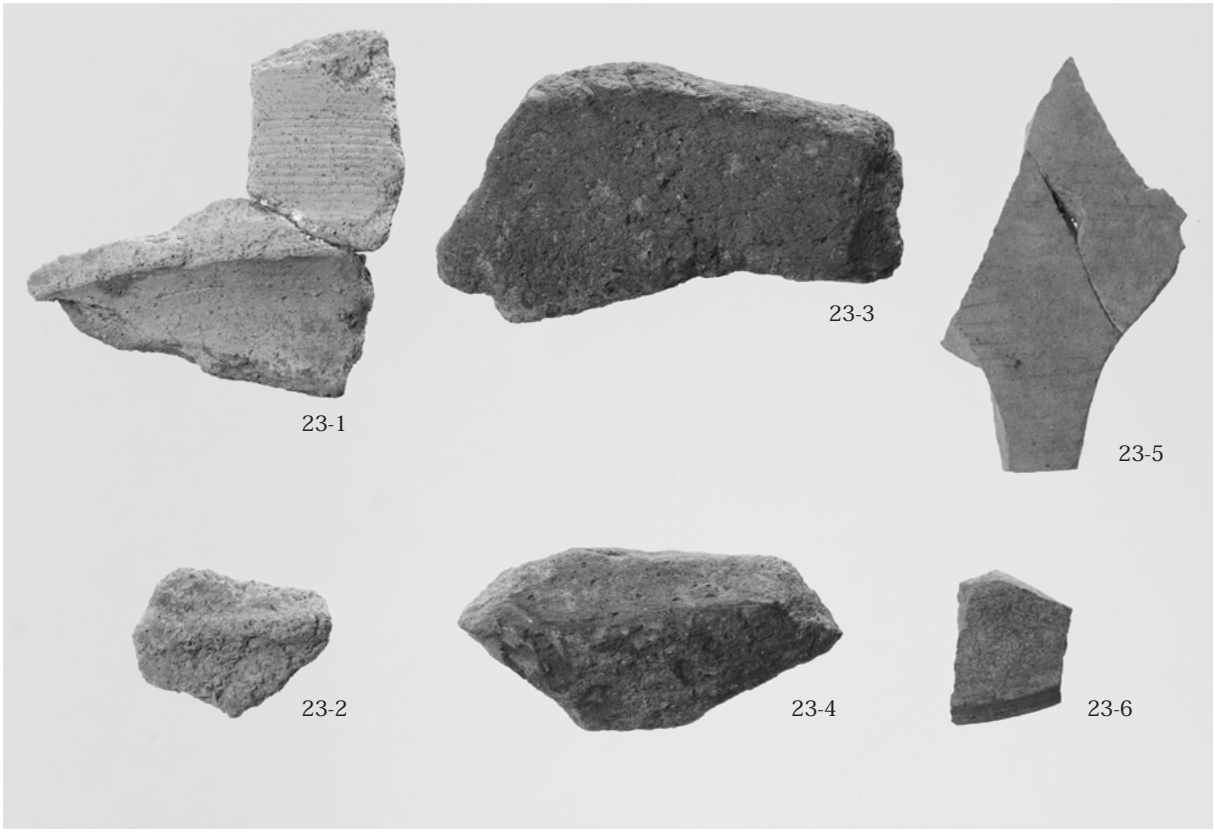
図版 12

東百塚山 71 号墳　墳丘断ち割り土層

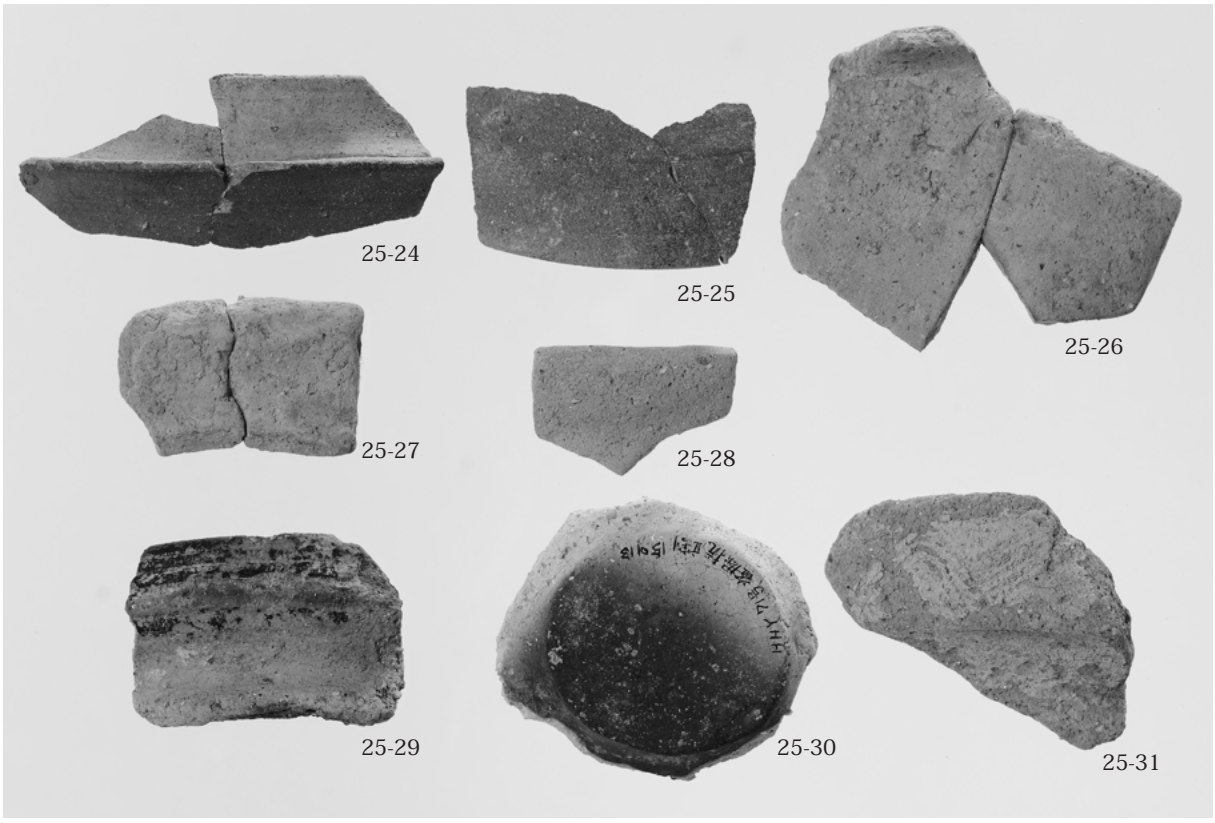
東百塚山 71 号墳　周溝掘り上げ状況

東百塚山 71 号墳　周溝内埴輪出土状況

東百塚山 71 号墳　周溝内埴輪出土状況 2

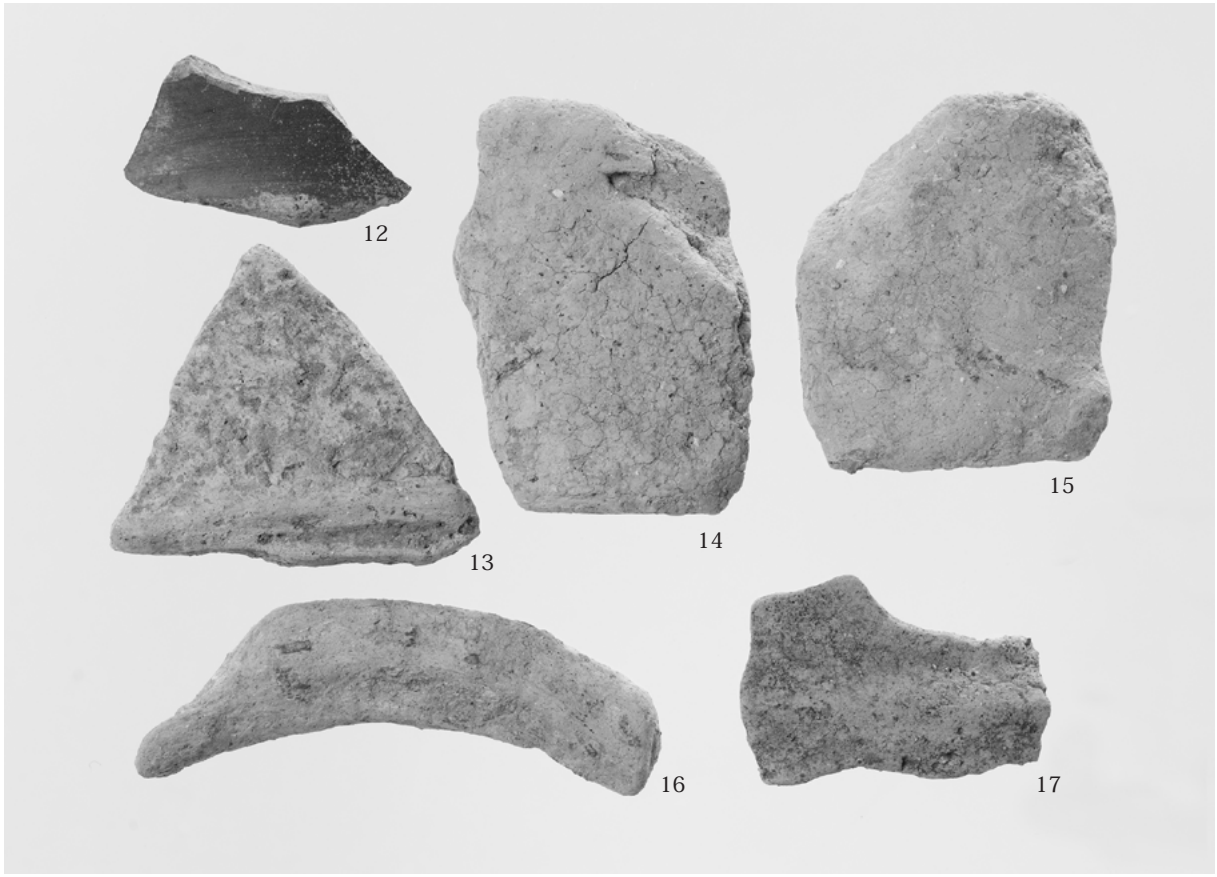


東百塚山 20・63 号墳出土遺物

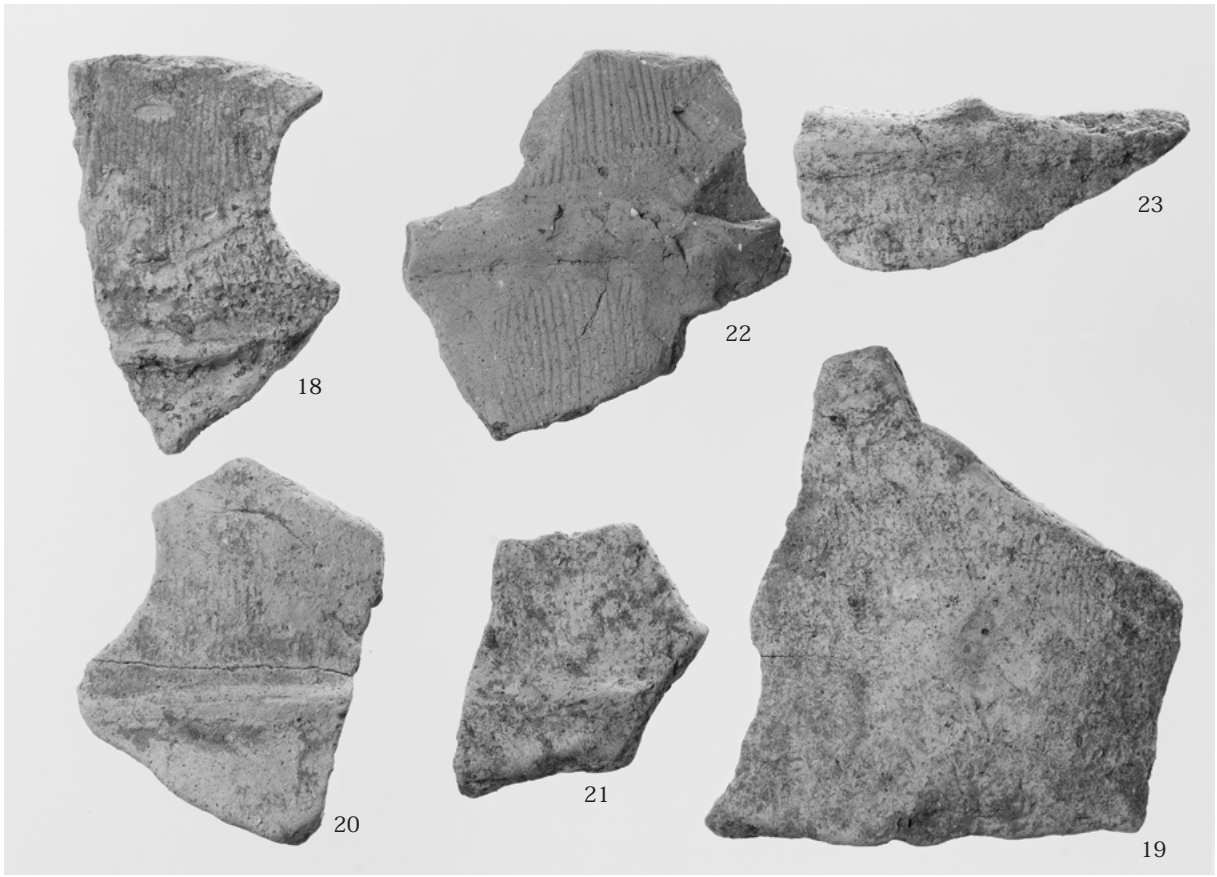


東百塚山 71 号墳出土遺物

図版 14



東百塚山 71 号墳出土遺物　(1)



東百塚山 71 号墳出土遺物　(2)

7

8

9

10

11

64 号墳出土土器集合

東百塚山 64 号墳群出土遺物

図版 16

1．古天神古墳調査前全景（南から）

2．古天神古墳調査前全景（南から）

1．古天神古墳調査前全景（北から）

2．古天神古墳調査後全景（南から）

図版 18

1．古天神古墳土層断面（前方部先端付近）

2．古天神古墳土層断面（前方部）

1．古天神古墳土層断面（前方部～くびれ部）

2．古天神古墳土層断面（くびれ部付近）

図版 20

1．古天神古墳土層断面（前方部～くびれ部）

1．古天神古墳土層断面（後方部石室開口部付近）

1．古天神古墳トレンチ調査状況

2．古天神古墳トレンチ土層断面

3．古天神古墳トレンチ遺物出土状況

4．古天神古墳石室開口部下方土層断面

5．古天神古墳石室開口部周辺礫群

6．古天神古墳閉塞石

7．古天神古墳閉塞石

図版 22

1．古天神古墳閉塞石

2．古天神古墳調査完了状況

3．古天神古墳法面保護工事（北から）

4．古天神古墳法面保護工事（南から）

5．古天神古墳法面保護工事（北から）

6．古天神古墳作業風景（閉塞石移動）

7．古天神古墳作業風景（土層精査）

8．古天神古墳作業風景（土層精査）

1．古天神古墳調査指導風景

2．古天神古墳調査指導風景

3．古天神古墳現地説明会風景

4．古天神古墳現地説明会風景

5．古天神古墳横穴式石室（前庭部から）

6．古天神古墳横穴式石室（羨門）

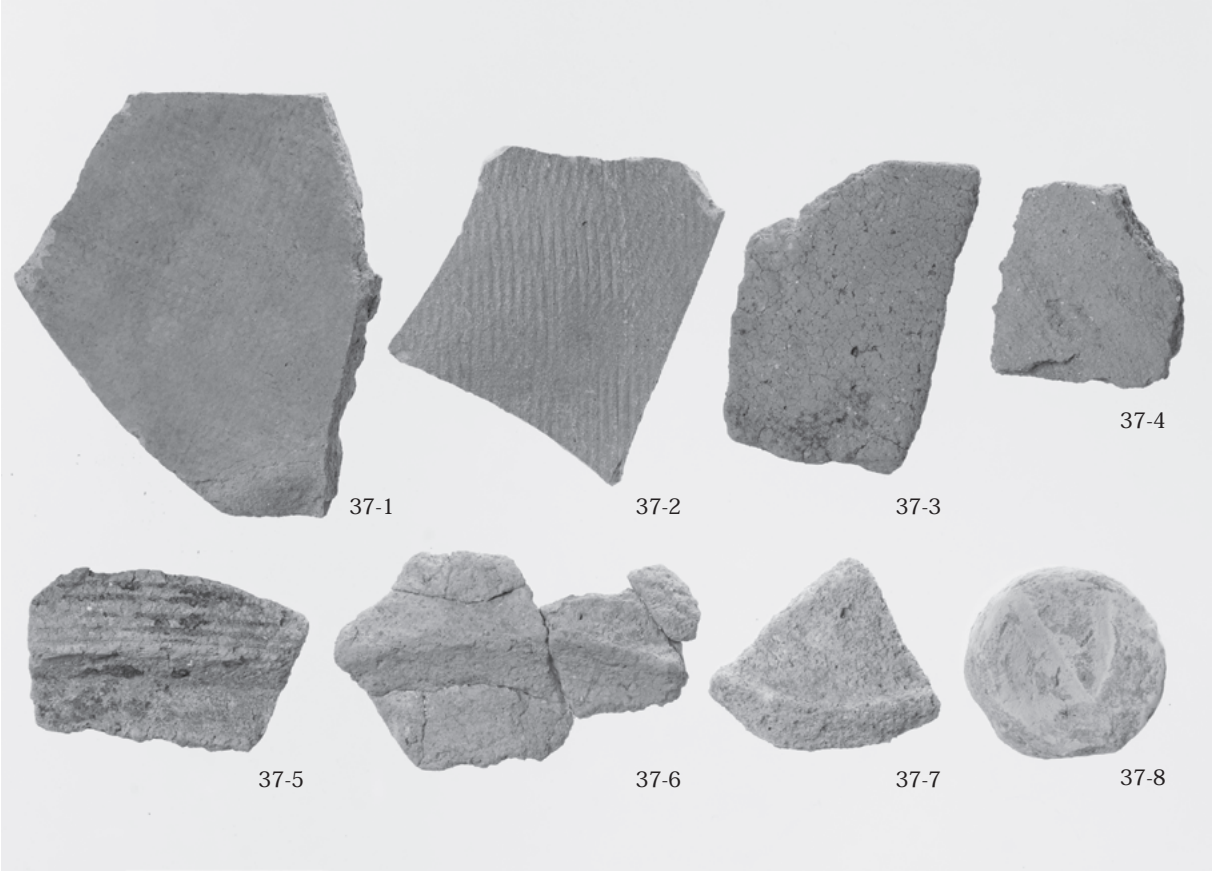
7．古天神古墳横穴式石室（玄室前壁左コーナー）

8．古天神古墳横穴式石室（玄室前壁）

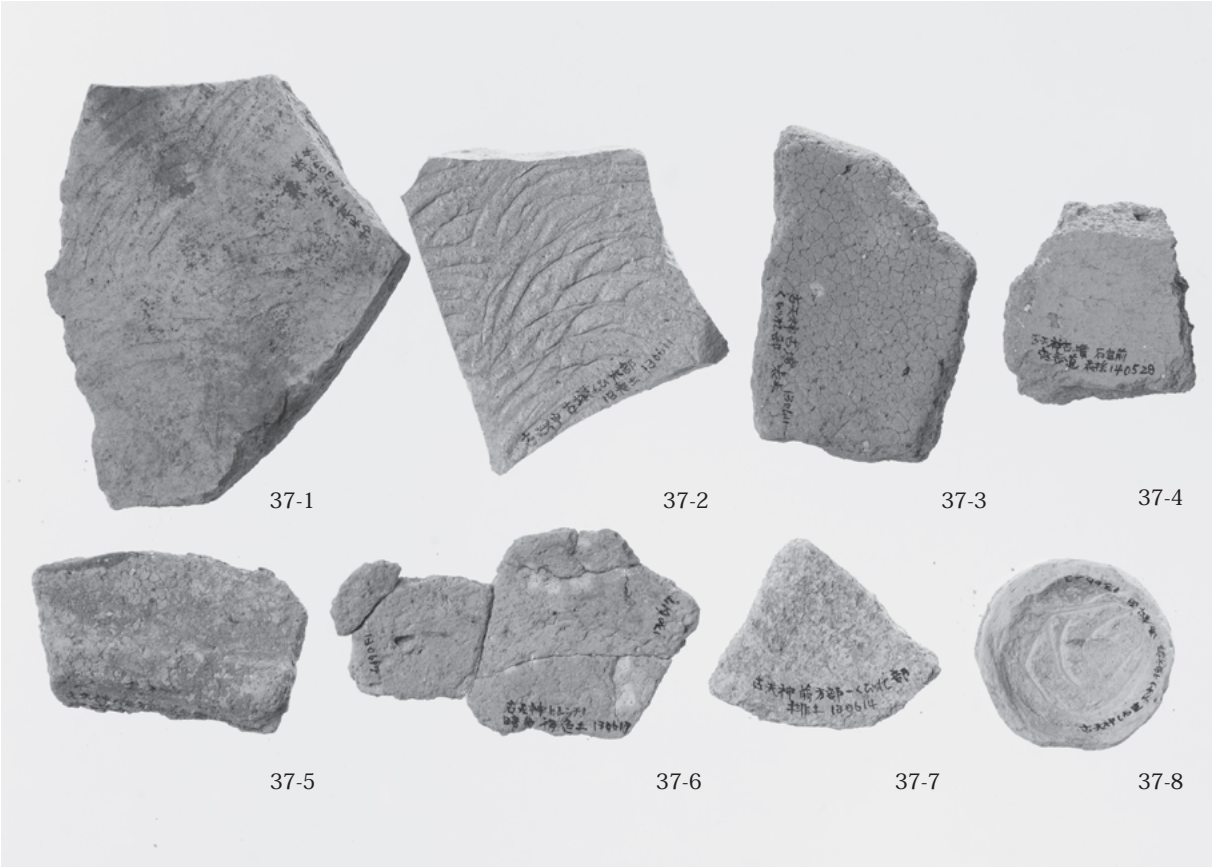
図版 24

1．古天神古墳横穴式石室（玄室内屍床仕切石）

2．古天神古墳横穴式石室（玄室内前壁左コーナー付近）

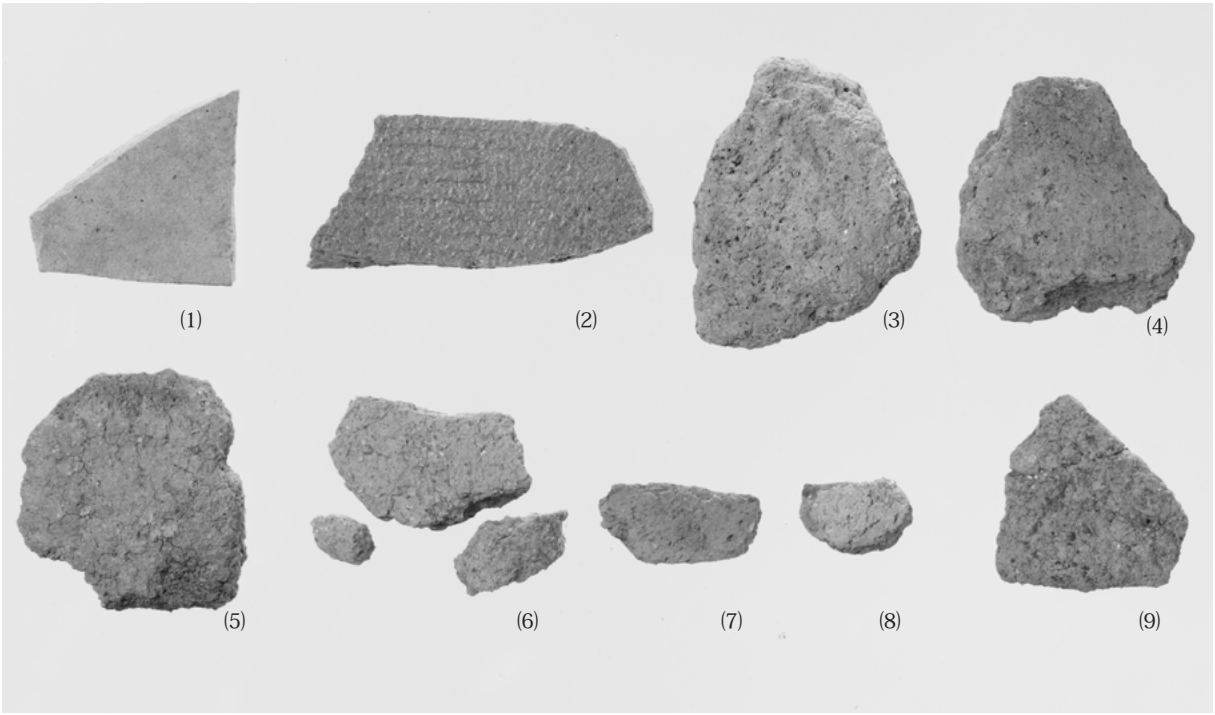


1．古天神古墳　出土須恵器・埴輪・弥生土器・土師器



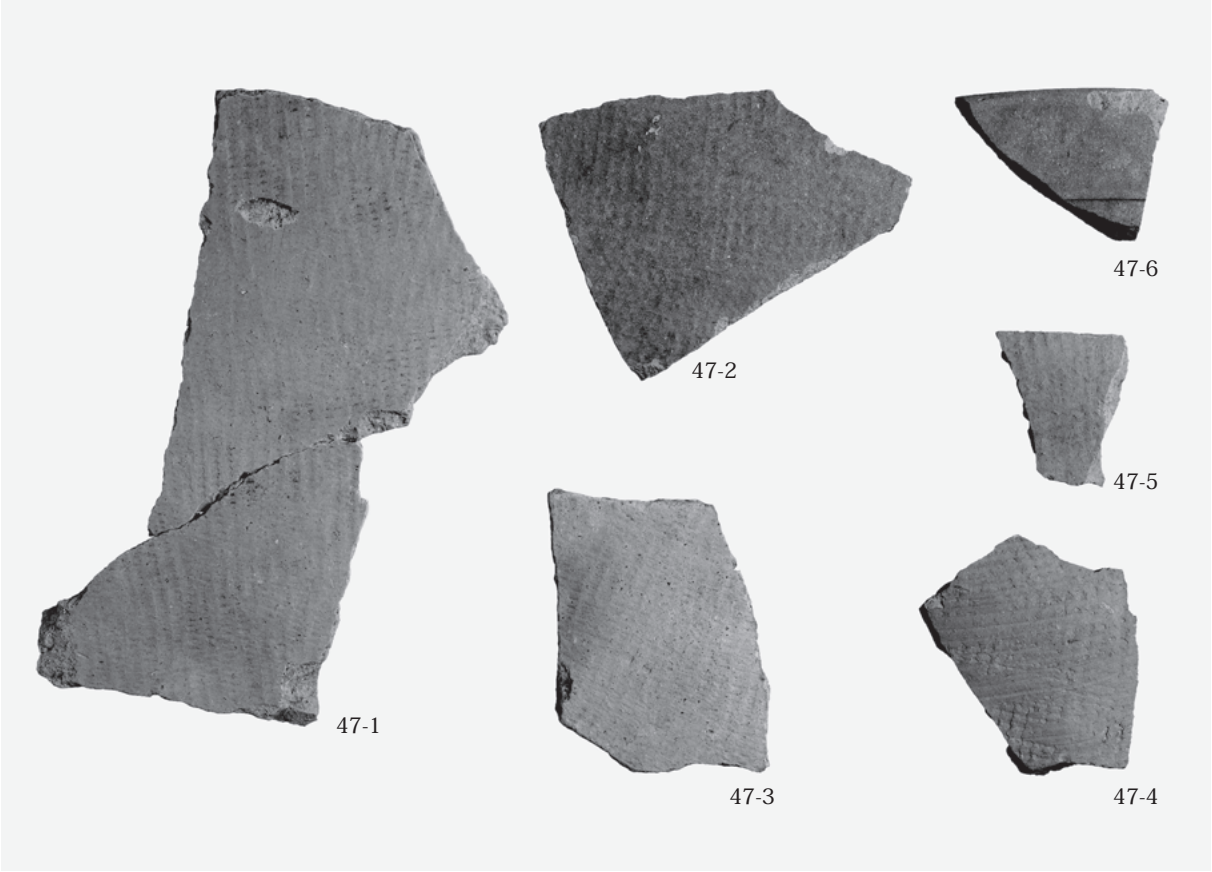
2．古天神古墳　出土須恵器・埴輪・弥生土器・土師器

1．古天神古墳　出土石鏃

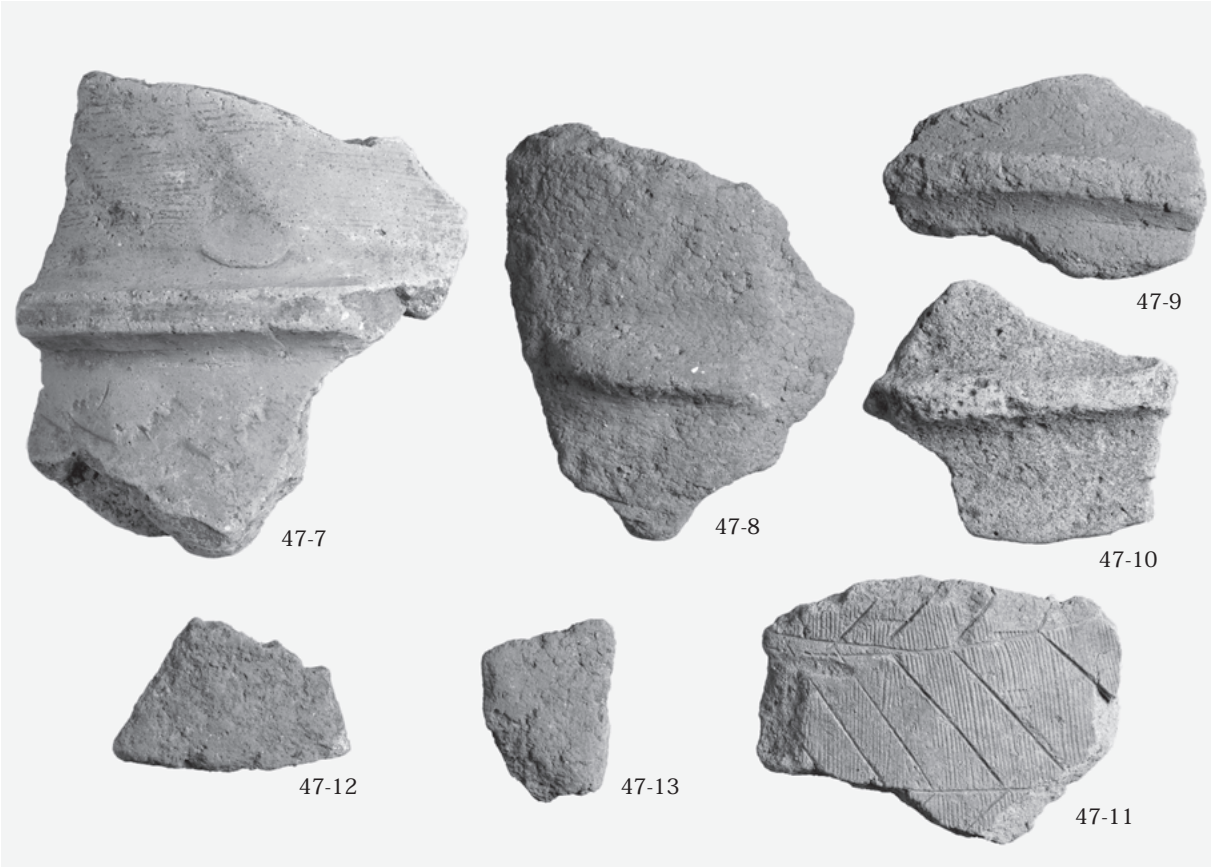


(1)・(2)須恵器片、(3)・(4)埴輪片、(5)～(9)弥生土器片

2．古天神古墳　出土須恵器・埴輪・弥生土器（非図化）



1．安部谷古墳群 表面採集須恵器



2．安部谷古墳群 表面採集埴輪

報告書抄録

ふりがな	かみちくやななごうふん・ひがしひゃくつかやまこふんぐん・ふるてんじんこふん・あべたにこふんちょうさほうこくしょ
書名	上竹矢 7 号墳・東百塚山古墳群・古天神古墳・安部谷古墳調査報告書
シリーズ名	風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書
シリーズ番号	24
編著者名	神柱靖彦・岩橋孝典・原田敏照・池淵俊一
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
	http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai
所在地	〒 690-0131　島根県松江市打出町 33　　TEL0853-36-8608
	E-mail:maibun@pref.shimane.lg.jp
発行年月日	2018（平成 30）年 3 月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
上竹矢 7 号墳	島根県　松江市　竹矢町	32201	D835	35°26′20″	133°6′29″	20150901 ～ 20151129	150㎡	保存目的
東百塚山古墳群	島根県　松江市　大草町 八雲町	32201	D50	35°25′23″	133°6′20″	20141118 ～ 20150213	60㎡	保存目的
古天神古墳	島根県　松江市　大草町	32201	D49	35°25′26″	133°6′20″	20130606 ～ 20130719	40㎡	保存目的
安部谷古墳	島根県　松江市　大草町	32201	D51	35°25′24″	133°6′32″	20130523 ～ 20130719		保存目的

遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上竹矢 7 号墳	古　墳	古墳時代	墳丘	円筒埴輪 土師器・須恵器	
東百塚山古墳群	古墳群	古墳時代	四隅突出型墳丘墓・古墳	弥生土器・埴輪 土師器・須恵器	弥生時代後期後葉から墓域として利用されていたことが判明
古天神古墳	古　墳	古墳時代	古墳	石器・埴輪 土師器・須恵器	墳丘の構築方法を確認
安部谷古墳	古墳群	古墳時代	古墳		墳丘の地形測量を実施

要　　約

上竹矢 7 号墳は松江市竹矢町に所在する前方後円墳である。島根県最古級の前方後円墳とみられながらも、正確な規模や年代は長らく不明のままであった。調査の結果全長 66 mであることが判明し、古墳時代前期後葉に属する古墳であることがほぼ確定した。

松江市大草町の東百塚山古墳群では測量調査の補足を行い、四隅突出型墳丘墓 1 基（20 号墓）、古墳 4 基の発掘調査を実施した。20 号墓の発見は意宇川下流域の四隅突出型墳丘墓としては 2 基目となり、出雲東部の弥生時代を考察する上で重要な知見を得ることができた。

古天神古墳は松江市大草町に所在する前方後方墳である。墳丘の崩落防止工事を行うにあたり、墳丘の土層断面の記録を行い、調査部分についての墳丘の構築方法について明らかにすることができた。

安部谷古墳は松江市大草町の横穴墓と古墳に構成される古墳群である。今回尾根上の古墳の測量調査を行い、その群構成について新たな知見を得ることができた。

上竹矢 7 号墳・東百塚山古墳群・古天神古墳・安部谷古墳調査報告書

― 松江市東部における古墳の調査（3）―

風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 24

発　　行：2018 年 3 月
発 行 者：島根県教育委員会
編 集 者：島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒 690-0131　島根県松江市打出町 33
Tel:0852-36-8608　e-mail:maibun@pref.shimane.lg.jp
印刷製本：千鳥印刷株式会社